

# 山ぎら

第45号

古くさくなどない  
宗教ではない  
恐れ入ることはない  
祈りだけでもない

(笹倉鉄平・詩)



# 山々 第45号 目次

〈表紙〉 笹倉鉄平画／〈目次・扉〉 詩Ⅱ 笹倉鉄平／写真Ⅱ 徳田八郎衛

蛭 飛 ぶ……坂上勝朗 5

平成25年度「ふるさとの会」開催……6／丸川征四郎氏講演要旨……8

平成25年度「ふるさとの会」出席者……10／会計報告書……11

祝寿の方々ご紹介……12／懇親会スナップ……16

## 《ふるさと随想》

生まれ故郷訪問―戦争の記憶……丸川健三郎 20

丹波の主要地点の標高と私の思い違い……谷垣一宏 25

丹波柏原を懐かしむ……谷垣 尚 27

我が出発のとき……藤井住夫 29

丹波への想い……西川宣孝 31

八十年を振り返って―青春のふる里に思う―……近藤龍夫 33

西山泊雲と小川芋銭……西山裕三 37

丹波の先人が残した文化遺産「鐘ヶ坂隧道」……野村節三 42

## 《インタビューコーナー》

足立さつきさん―東京と丹波に歌の懸け橋を！……編集部 52

《特別レポート》 丹波を襲った豪雨被害……小田晋作 57

《丹波通信》 児童養護施設「睦の家」……荻野祐一 60

《近況・エッセイ》

四国八八所車遍路紀行……山本喜則 64

役人の応対が柔らかくなったわけ？……形田恒夫 67

生涯の趣味になった標語づくり……村岡孝司 69

最近の政治に思うこと……荻野哲男 72

ドイツ・ポーランド・スイスを訪ねて……大野芳美 73

丹波人の東チベット見聞記……徳田八郎衛 77

首都直下地震に備えて……片瀬範雄 80

P国の電気通信網計画……前田武彦 84

折々の記(II)……井本義一 86

《特別寄稿》故宮書画複製への挑戦……渡邊隆男 92

《丹波ブランド紹介》

〈その5・丹波栗〉特産地再興にかける……足立智和 111

《ふるさと人物記》丹波柏原の名彫り物師

——中井権次一統の足跡をたずねて……岸名経夫

《丹波のまつり》柏原八幡宮と厄神大祭……千種正裕

北川敏彦・八千代／西崎 祥／小竹政孝／谷 敬三

《丹波を撮る》……徳田八郎衛 46

ふるさとトピックス（丹波新聞から）……63

《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇……100

《MYギャラリー》岸本敏子／芦田和代／梅津浩平／松田けい子……107

寄付者芳名……126 会員だより……143 BOOKS……149

《インフォメーション》平成26年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会……154

《協賛広告》……159／編集後記……170

ねかはくは はなのしたにて 春しなむ  
そのきさらきの 望月のころ

ねかはくは はなのしたにて 春しなむ  
そのきさらきの 望月のころ

(西行 続古今和歌集)

# 蛭 飛 ぶ

会 長 坂 上 勝 朗



私ごとで恐縮ですが、この春、四百年近く続いた父祖の墓を丹波は旧葛野村（かどのむら、現氷上町）から東京板橋区へと移しました。

東京へ出て来て六十余年、その間この古いお墓には全くとご無沙汰を続けて、わが跡取り息子の無責任さに先祖ご一統には、怒りを通り越して、あきれかえっておられたことだろうと思いますが、これでなんとか先祖供養ができるかと安堵しているところです。新しい墓石には十歳の孫娘を煩わせて、彼女の字で家名を刻みました。不謹慎だとの誹りそしもあるかと存じますが、いろいろ考えを巡らせた結果こんなことになりました。

さて、この田舎の墓地はその昔、といいましても昭

和二十五（六年）までは、蛭の一大生息地で、その季節には実に見事な景観を呈していました。蛭の飛び交う頃になりますと、宵闇の迫るのを待ちかねて、子供たちがでんでに竹ぼうきやら紙袋を持って、この墓地の前に広がる田の畔道に繰り出して行くのです。竹ぼうきは、蛭を打ち落とす道具のひとつで、たいていはありあわせの竹ぼうき。紙袋は、捕った獲物をいれて持ち帰る容器。はじめのうちは田んぼの上を飛び交って、子供たちの餌食になっていた蛭たちも身の危険を感じてか、どんどんお墓の方角へ逃げて行ってしまう。そこで子供たちは蛭を捕るのを諦めます。なぜかつて、お墓には「幽霊」が出るからです。

こんな情景を、思い浮かべながら、お坊さんの唱えてくださる性根抜きのお経を聞いていましたら、ふと河野裕子さんのあの歌が脳裏をかすめました。「蛭飛ぶ貴船の沢に若かりしわれらが時間は還かえることなし」あまりにも遠くに行ってしまった時間は取り戻すことはできませんが、これから広がる未知の時間をこそ大切にしたいと思ったことでした。



## 平成25年度「ふるさとの会」開催

平成二十五年度の「ふるさとの会」は十一月十六日（土）十一時より、東京都千代田区の学士会館で開催しました。

総会に先立つセミナーでは「尊厳死～人の生きざま、死にざま～」と題して、丸川征四郎氏（医誠会病院長・市島町鴨庄出身）に「人間としての尊厳を保ちつつ死を迎えること」について氏の経験談も交え、スライドで分かりやすく、また興味深いお話を頂きました。（8ページ参照）

総会では坂上勝朗会長のご挨拶と報告に引き続き、谷口副会長（会計担当）よりの会計報告・監査報告があり、会場より拍手で全ての議案を了承頂きました。

御来賓の紹介では、ふるさと丹波市より昨年はお出で頂けなかった辻市長も今年は元気に参加、丹波市の重点課題とされている企業誘致活動の近況報告を含む市の現況などのお話し、兵庫県東京事務所長の榎本輝彦氏より兵庫県の現況等をご報告いただきました。

その後、満八十歳を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた十二名のうち参加頂いた池田和子さん、北村貞子さん、



丸川先生の講演に聴き入る参加者



祝寿の花束を手に。左から北村貞子さん・池田和子さん。

に坂上会長より祝辞と花束を贈りました。お二方とも未だ現役でお仕事をされている由、その為もあってか、お若くとても年齢を感じさせない見事な容姿とお話に感心するばかりでした。

懇親会は岸本副会長の司会で開会、丸川講師の乾杯でいつもの楽しい宴会がスタート、最初に村山柏原高校校長、柏陵同窓会の谷水会長より丹波の近況などと共にお祝いのお言葉を、今回初めてご参加頂いた藤原敦實丹波市自治振興会長にもお祝辞を頂いた所で、いよいよ会話の輪があちこちに広がりました。今年は過



去にない多数の参加者で会場は狭いばかりの楽しい宴会になりました。

いつもながら、あつという間に予定時間が終わってしまうという楽しいひとときを過ごし、恒例のお楽しみ抽選会は参加者全員にチャンスがあり、空くじ無しで「丹波の山芋」「丹波黒豆」「黒豆・丸大豆の煮豆」などがそれぞれ全員に渡るようにされ、参加者全員何かのお土産を頂いて帰ることが出来ました。お終いに今年の三月より発足した郷友会有志のコーラスグループ「どんぐり会」の初発表会で

はメンバー以外の同好者も飛び入り参加、合唱指揮者の笹倉強先生の指揮で「見上げてごらん夜の星を」他全員で楽しめる輪唱曲も披露され、会場参加の全員での大合唱になり大いに盛り上がりを見せました。

和やかな盛會も来年又元気に会えることをお約束し閉会となりました。

(岡 吉明・記)

# 丸川征四郎氏講演要旨

## 尊厳死〜人の生きざま、死にざま〜

本日は、講演の機会を与えて頂き感謝を申し上げます。小中高ともに劣等生であった私をご存じの同郷の皆さまの前に立って、尊厳死について語るのは大変気恥ずかしい限りですが、早かれ遅かれ訪れる人生の終末期に関わる話題にお付き合い頂ければ幸いです。

私は、この数年は病院の管理職に就いています。それまでの約四十年間は集中治療（ICU）と救急災害医療を専門とし、重篤で緊急性の高い多くの患者さんの治療に全力を注ぎました。その数は優に二万人を



講演する丸川征四郎先生

超えます。集中治療部門の責任者になった頃、朝日新聞のコラムに、集中治療の医師は「消え

〈講師紹介〉市島町鴨庄出身。神戸市在住。柏原高校14回生。神戸大学医学部卒業。兵庫医科大学集中治療部教授を経て同大学救急・災害医学教授・救命・救急センター部長。退職後、医療法人医誠会病院病院長、現在に至る。近畿大学医学部客員教授（救急医学）

入りそうな患者さんの命を灯し続けるために、自分の命を削って注ぎ込む」のだと書いた記憶があります。しかし、今となって心から残念に思うのは、私的には病院業務以外に割く時間がない上に徹夜続きで家庭を不在にしたこと、医師としては治療の甲斐なく死に逝く患者さんの無念さと苦しみを癒しきれなかったことです。私が尊厳死や安楽死に関心を持つのは、それが医学的に重要な課題であるだけでなく、そうした懺悔の念と患者さんの面影が消えないことも理由です。

尊厳死は「人間としての尊厳を保ちつつ死を迎えること」と説明されますが、誰も死を迎えた経験がなく、自身の死へのプロセスで何が尊厳を損なうのか具体的に描けないため、この説明は実際的ではありません。本来は哲学的考察が必要ですが、尊厳が損なわれた状



態は「好まない状態」に包括されるので、好まない治療や状況を明確に拒否すれば自ずと尊厳ある生を経て尊厳ある死を迎えることが出来ると平易に解釈して良いと思います。重篤な病気に陥って意識が無くなった場合に備えて、家族や友人に思いを伝える、あるいは事前指示書（リビングウィル）を遺言のように書き置くのも良い方法です。

しばしば尊厳死と混同される言葉に安楽死があります。安楽死は尊厳ある死を実現する手段の一つです。耐え難い苦痛にもがきながら死に逝く人を世話する身になれば、その苦痛を軽減あるいは除去する措置を講じたくなるのは自然です。しかし、この積極的な措置が、例え尊厳死を実現するためであっても、意図的に死期を早めたと解釈されれば殺人罪が問われます。この両立し難い難問については、昭和三十七年の名古屋安楽死事件を発端に、一定の条件を満たす場合にのみ積極的安楽死（あるいは殺害型安楽死）として認められるようになりました。実施可能な治療を行わず結果的に死期を早める消極的安楽死については、どの範囲まで許容するか国会でも議論の最中です。

重篤な患者さんでは脳機能が完全に損傷されて、脳死と診断されることが少なくありません。医学的に脳死は不可逆な状態に陥ったことを意味し、一〜二か月で死亡します。この際、脳死下臓器移植のために臓器提供が希望された場合のみ「脳死を人の死」と判断します。脳死の捉え方には、脳死状態で生き続けるのは尊厳の喪失なので早く逝きたいとの考えと、脳死になっても家族と一緒に居られるので出来るだけ長く生きていたいを両極端として様々な思いが示されますが、これらに共通するのは「私の思いに沿った生を通して死に至る」ことです。この思いを事前指示書に託すことは既に述べました。

近年、痛み の治療法が目覚ましく進歩し、耐え難い肉体的苦痛を理由に安楽死を選択することはほぼ無くなりました。代わって、精神的苦痛、生命維持の方法、療養する環境などに対する個々人の感性と価値観がますます尊重されます。時間となりました、最後に「自分の死にざまは自分で決める」時代が始まっていることをお伝えして、本日の講演のまとめと致します。ご静聴ありがとうございます。

◎平成二十五年度「ふるさとのかい」出席者

(順不同・敬称略)

〈来賓〉

辻 重五郎 丹波市市長

藤原 敦實 丹波市自治振興会

榎本 輝彦 兵庫県東京事務所所長

井口 正彦 東京兵庫県人会・幹事

村山 未生 柏原高校校長

谷水 克己 柏陵同窓会会長

荻野 祐一 丹波新聞社社長

〈祝寿〉昭和8(1933)年生まれ

池田 和子 北村 貞子

〈講師〉

丸川征四郎 医誠会病院病院長

〈会員〉

○青垣町(4名)

足立悦雄 飯田光雄 鴻谷正博 田村公平

○市島町(17名)

荒木輝雄 石橋順子 井出恭子 大野富士夫

木辻照男 高見秀史 鶴田ゆき子 藤田千治

藤田 純 藤田純子 丸川健三郎 丸川宥次郎

有川寛子 有川由里子 石川陽基 山本喜則

吉見弘文

○柏原町(19名)

足立美都子 池田和子 池畑廣士郎 里 陽平

上村愛子 大野善三 岡 吉明 岡 洋子

北村貞子 大野亮祐 河本幸子 小竹政孝

高尾久子 竹内恵美子 徳田八郎衛 三木 亮

三觜洋子 吉田素子 吉竹 覚

○春日町(4名)

金出一郎 木呂子恵美子 久下善生 原 利充

○山南町(13名)

池田 忍 植木十和子 梅田重二 大野義昭

岸本里子 久保良雄 下井源治郎 勢川武彦

仲 一聰 中居篤子 原谷洋美 藤原ひさ子

渡邊 貴美子

○氷上町(26名)

足立明子 足立謙悟 堤 康子 足立松子

足立吉雄 足立義雄 天野清子 安達健一郎

井上 巖 上 高子 上田道代 上野重喜 上野忠明

岸本 勲 岸本敏子 岸本卓也 小森 敏

坂上勝朗 谷口浩章 葉山 勝 藤田玲子

藤平美千代 本城英明 山岸幸子 渡邊隆男

渡邊也寸美

○西脇市(1名)

笹倉 強

○多可郡(1名)

笹倉郁子

# 会 計 報 告 書

(平成 25 年 7 月 1 日～平成 26 年 6 月 30 日)

関東水上郷友会  
 会計理事・谷口 浩章  
 原谷 洋美

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	2,071,547	郵便貯金 1,271,547	出 版 費	993,219	『山ざる』44号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	157,260	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	800,722	総会関係支払
年会費収入	424,000	延210名	会 議 費	132,528	役員会等
総会費収入	560,000	83名	支払手数料	22,680	振替手数料
役員会費収入	142,000	36名	消耗・備品費	73,840	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	232,000	延 70名	繰 越 金	1,864,739	郵便貯金 1,064,739
広告料収入	535,000	延 48名			定額貯金 800,000
冊子代收入	80,304				振替貯金 0
そ の 他	137	利子			
合 計	4,044,988		合 計	4,044,988	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成26年 8 月 9 日

会計監査

中居 美子 中居  
谷 敬三 谷

# 祝寿の方々と紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる31名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、7名の方から回答頂きましたのでご紹介します。(誕生日順)

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年 昭和9年・甲戌・1934年〉東北は冷害、西日本は干害、関西は室戸台風の痛撃と全国的な大凶作、特に東北では娘の身売り、欠食児童が続出し、行き倒れ、自殺など惨状をきわめた。「たたかいは創造の父、文化の母である」の書出



昭和9年、東北大飢饉・岩手県の子ども達(日録 20世紀(講談社)より)

しで始まる陸軍省発行のパンフレット16万部が配布され、政党や言論界から「軍による政治闘争」として批判された。来日した米大リーグとの試合で全日本軍は完敗、日本初のプロ球団が生まれる契機となった。

- ① 昭和9年2月11日
- ② 氷上郡山南町(現丹波市山南町)
- ③ 昭和28年4月
- ④ 大学入学のため(卒業後も東京在住)
- ⑤ 昭和42年夏、妻と北アルプスで遭難したことが強く脳裏に残っています。

上高地から槍ヶ岳へ登山(7/30)し、喜作新道を燕岳まで行く途中、とある雪渓で突然、落石(径約30センチ)が妻の頭に当たりました。幸い軽傷でしたので天上沢へ降りたところ、川筋が崩れ通行不能でその夜は河原で野営し、翌日(7/31)は北鎌尾根で寒さの中、飲食物はほと

## 野村 節三様

## 祝寿の方々と紹介

んど無く二日目の野営をしました。翌日(8/1)、さらに猛烈な雷雨に遭って全身びしょ濡れになり、道に迷いながら元の尾根へ登って夕闇のヒュッテ大槍に辿り着き、翌日(8/2)に徳沢小屋まで降りて安堵しました。あの日には松本深志高校生11名が西穂高独標付近での落雷で遭難死したことを後で知ったのですが、その雷を頭上で受けた自分達が下山できたことは誠に幸運だったと痛感し、無理な登山行動を大いに反省した次第です。

⑥早くも傘寿の歳になって、正に「光陰矢の如し」を実感しています。あの「東日本大震災」をはじめ様々なことが浮かんで来ますが、これまでに

交流した多くの方々のご厚情に感謝し、これからも生き甲斐をもつて暮らせれば幸いです。

### 瀬々 妙子様

①昭和9年2月15日

②柏原町

③昭和33年4月

④22歳で父死亡、中井書店の経営補助役を兄に引き継ぎ、25歳より自立を東京に求め(生前父の状況に付添い教科書会社を知っていた)大日本図書



(株)にアルバイトとして第一歩を期す。(当時、女性は25歳で定年のきまり)

⑤東京オリンピックの頃、テレビを下宿に備え、刻々と変わる原宿の表参道に息吹を感じた(当時明治通りより奥まった小川の見える2階の下宿に母と過ごしていた)。竹下口を通り、原宿から有楽町が通勤経路であった。当時のつましい竹下口、落ち着いた静かな表参道は見る影もないが、小川も埋め立て、ファッションの道路に変わっているとか。第二の故郷を失った思いです。(本籍として残したのを不思議に感ずる)

⑥戦後、最後の女学校受験を空腹で迎え、学力の低下とさげすまれながら、高校併設中学

## 祝寿の方々と紹介

校を卒業し高校に進んだ。傘寿を迎えられる平和の有難さは一人であるが、今戦前に戻ろうとする世相に当時の親達のようになすすべもなく、子孫の成長期を戦中にしてはならない。同じ過ちを繰り返しては、と特に思っている。

### 安達健一郎様

①昭和9年7月15日

②氷上町井中

③昭和29年3月



④大学入学の為

⑤平成3年に自分の家を建て直す際に展示場に行つては、家の形状、建築資材、住設品を見て来て参考にし、稚拙な設計ながら建築資材等吟味した家が無事平成3年に完成し、入居したことです。素人設計ですので、目をみはるところはありませんが、設計費用をけちりましたから、見た目より実質重視と自慢しております。

⑥暴饮暴食をしないで家内の作つてくれる食事を好き嫌いなく食べてきたことと、先祖伝来の健康な遺伝子を貰つて来ているのでしょうか、コレステロールの薬を日に一錠飲んでいただけで、元気に暮らしております。毎日感謝です。

### 岩槻 邦男様

①昭和9年7月15日

②旧市島町（鴨庄村）

③昭和58年4月1日

④京都大学から東京大学への転任（昭和56年4月より兼担で東京へ「通勤」）

⑥医学の進歩に支えられて想定外の長生きをし、せっかくの生命を有効に生かしたいと念じています。昨年で常勤的な仕事は打ち切り、研究の原点に戻った生活をしています。

### 近藤 龍夫様

①昭和9年9月26日

②市島町（生まれは大阪）

## 祝寿の方々と紹介

- ③ 昭和42年
- ④ 会社の転勤
- ⑤、⑥は本文33頁を参照。

### 井本 義一様

- ① 昭和9年10月17日
- ② 柏原町
- ③ 昭和39年7月16日
- ④ 転勤
- ⑤ 昨年来（特に年末）から現在に至る日本の針路にかかわる動向。
- ⑥ 我が日本国の将来に対しての限らない不安について。現在世界中の多くの国に資源問題をはじめ、難しい問題が発生しており、争いは増加傾向にある。「二国で日本国を護れない」より「二国でも仲良く

する国を増やすことが孫達世代にこの国を良くして、護ることになる」と考える。それにしては頭から離れないのは①借金1千兆円を超える我が国が戦争の出来る国になっていいのか、②世界のリーダーたるには的確な判断力と真の謙虚さが肝要だ。

### 勢川 武彦様

- ① 昭和9年11月7日
- ② 山南町谷川



- ③ 昭和34年3月下旬
- ④ 勤めている会社の組織が大阪から移転したのに伴って集団上京してきました。
- ⑤ 人の世にまこと立つべく現身うつせみにまこと立つべく
- ⑥ 80歳と言ってもまだ平均寿命に達していません。でもここまで生きてこれたことに感謝あるのみです。



(撮影：岡吉明さん)





# 懇親会 スナック

撮影：岡 吉明









# ふるさと随想

(撮影：徳田八郎衛)

## 生まれ故郷訪問―戦争の記憶

丸 川 健三郎 (市島町)

わたしには故郷が二つある。生まれ故郷(徳島市)と育った故郷(丹波市)である。生まれ故郷を離れたのは小学三年生のときだったから、どちらの故郷にも、それぞれに沢山の思い出がある。その時は一九四五年(昭和二十年)六月、勿論、太平洋戦争の最中、我が国の敗色がいよいよ濃くなってきた頃のことである。我が家が丹波へ引っ越したのはいわゆる戦争疎開で、徳島市に空襲の危険が迫っていると予測(うわさ)があったからである。我が家の引越しのすぐ後、七月には予測通りに徳島市は空襲を受け、地域の六割が壊滅するという大被害を受けたのである。

\*幼稚園の卒園生名簿\*

長らく疎遠になっていた生まれ故郷との縁が復活したのは、幼稚園(徳島師範学校付属幼稚園)の卒園生

名簿がきつかけであった。思いがけず入手した卒園生名簿に懐かしい友の名を見付け、勇をふるって電話をかけたのが始まりである。

私は既に古稀間近の高齢者になっていた。その後、友達とは東京で再会を果たし、それが今回の生まれ故郷訪問に繋がったのである。しかし、以下では友の話は省略し、いとこ（従兄弟、従姉妹）との再会に話を限りたい。

\*眉山、吉野川、城山\*

徳島市は海に面しており、市街はその三方を海と吉野川と眉山（海抜二七七メートル）とに限られている。そして中心部に城山（海抜六二メートル）がある。これは高くはないが要塞としての価値はあり、徳島城があったところである。城山を中心として半径二キロの円を描けば市街地がすっぽり入ってしまうくらいだから、徳島市はこじんまりとした都市と言えるだろう。海も山も川も子供の足で涉猟出来る範囲にあった。

さて、我が家があったのは西船場町という地域で、眉山の麓である。山裾には春日神社や祇園社、少し登っ

たところには三重塔などがあった。市街は山際まで広がっており、我が家は三〇〇メートルほどで春日神社という位置にあった。このあたりでは祇園社の夏祭りが有名で、祭りの当日には山裾から我が家の近くまで屋台などの夜店が並ぶのが通例であった。

ところで、山に近いということは戦争末期には意外な価値があったのである。空襲の時に逃げ易いという価値である。私の住んでいた間には、実際の空襲はなかったものの、空襲警報は頻繁にあった。多分、阪神地方へ爆撃に行く飛行機が途中で徳島上空を飛ぶのだろう。警報のサイレンが鳴るたびに防空壕に入るのだが、我が家の玄関のたきに作った小さな防空壕では明らかに不十分だった。一度だけが夜中の警報で山まで逃げたことがある。三重塔の近くの社務所に数十人が逃げ込んだが、不安と緊張で異様な雰囲気だったことを覚えている。

このような意外な価値があったので、我が家が丹波へ引っ越した後には、早速従姉弟の一家が移ってきた。この従姉弟は父方から辿っても、母方から辿っても従姉弟という、近い関係にあった。伯父のほか長女（マ

サコさん)、次女(カヨちゃん)、三女(ヨツちゃん)、長男(ミチオちゃん)、次男(タダオちゃん)、四女(カツちゃん)という家族構成で伯母はずでにその前年に亡くなっていた。つまり、父子家庭になっていた。

このとき、小学三年のミチオちゃん以下は祖母のいる田舎へ疎開しており、三女までの四人が我が家の後に住むことになった。疎開しなかったのは通勤と通学の便のためである。そして、そこで徳島大空襲を経験することになる。

#### \*従姉弟との再会―徳島大空襲のこと\*

昨春秋に六十八年ぶりに徳島を訪問したのだが、このときに、上記の従姉弟達は私と妻をホテルでの会食に歓迎してくれた。この会食の世話をしてくれたヨツちゃんとは数年前に神戸で会ったことがあるのだが、他の方々とは正に六十八年ぶりの再会だった。

互いに昔の写真、今の写真を見せ合ったり、近況を訊ね合ったりで、沢山の話があったが、やはり話は戦争末期から戦後数年の苦労が多かった頃へと収斂していった。そして、とくに印象深かったのが昭和二十年

の徳島大空襲の話である。

空襲があったのは七月三日から四日に掛けての真夜中のことであつた。その日の夜、一度空襲警報があつたもののやがて解除になつたらしい。「やれやれ今日はこれでおしまいだ」と皆が眠りについたところで本格的な空襲が始まつた。

徳島は既に六月の初めから散発的な爆弾投下を受けており、市民の間ではいよいよ危なくなつてきたとの感じがあつたが、一方、まさか徳島がやられることはなからうと高を括たかっている人も多かつたようである。しかし、本土空襲は東京、大阪などの大都市が五月までで大体終わつており、六月には県庁所在地などの地方都市へと目標が移つていたのである。

記録によると、この日徳島に飛来したのはアメリカ軍のB 29爆撃機一二九機が主力だったが、他にグラマン艦上戦闘機も何機か来ていた。もっぱら焼夷弾爆撃による街の焼きつくしをねらっていたが、戦闘機からの機銃掃射もあつたらしい。地域の六二パーセントが被災し、市の人口十一万人のうち、被災者約七万人、死者約千人、と云うことである(Wikipedia「徳島大

空襲」による)。

当時を回想した手記によると、市の中心部は焼き尽くされ、全滅と云つていい状態だった。徳島は吉野川や眉山といった逃げる場所に恵まれているので死者は少ない方でないかと思うのだが、それでも空襲が終わった翌朝には、街中あちこちに死体が横たわつていて、悲惨な状況だったようである(徳島市ホームペー  
ジ・徳島市編『語り継ごう徳島大空襲』による)。

#### \*空襲避難―従姉妹の場合\*

このような状況の中で、従姉妹の一家四人は全員無事に空襲から逃げおさせた。しかし、大変ではあった。

警報で真夜中にたたき起こされた四人はまず、近くにあった商工会議所の地下室(防空壕)へと逃げた。しかし、そのとき既に容赦のない爆撃が始まっており、街のあちこちに火の手が上がっていた。会議所の向いの家にも焼夷弾が落ちて盛んに燃え始めた。危険を感じた四人はさらに眉山に向かって逃げることにしたが、頭上に迫る爆撃機の爆音と飛び散る火の粉、さらには戦闘機の機銃掃射で倒れる人もあって、生きた

心地がしなかったという。そのとき、ヨッチャン(当時小学六年生)が怯えたのか、いきなり走り出した。そして、たちまちに暗がり人と人混みの中へと見えなくなつてしまった。

伯父さんはマサコさんとカヨちゃん(共に女学生)に「二人は決して離れないように」と厳命した後、ヨッチャンを追いかけて走つた。

このように一家がばらばらのまま暗い山の中へと逃げ込んだのである。このとき多くの人が山へ逃げたのだが、山も安全とは言えなかった。マサコさんの言によれば、目指していた山の中腹の三重塔にも焼夷弾が落ち、たちまちに燃え始めたらしい。進むもならず退くもならず、山の中をさまよつた。爆撃は二時間ほどで終わるのだが、夜が明けるまでは動くことも出来ず、繁みに隠れていた。山から見下ろした街は、一面の火の海だったそうである。

夜が明けて、人々は山から下り始めた。マサコさんは春日神社まで降りてきたところで、運良くお父さん(伯父さん)に出会うことができた。そこで、三人でヨッチャンを捜すのだが見付からない。仕方がない

ので我が家の方へ帰つて来たところ、そこでヨツちゃんを見付けた。

我が家は跡形もなく焼け崩れており、井戸のコンクリート囲いばかりが残っていたのだが、その側にヨツちゃんが一人ぼつんと立っていた。そして三人を見るやいなや、泣きながら駈けてきたとのことである。

以上はマサコさんの言だが、ヨツちゃんは「私は泣いていなかったよ」と言う。何しろ六十八年も前のことである。白黒の付けようはない。伯父さんは既に亡くなっているし、カヨちゃんもあいにく入院中で会食には参加していなかった。それはともかく、ヨツちゃんを見付けたとき、伯父さんはどんなに嬉しかっただろう。一晩中探していたはずである。それを思えばこちらの胸も熱くなる。

この空襲では徳島の数万という人が焼け出され、突然に家財も、その夜のねぐらさえも失われるという事態になった。それぞれに糧と宿を求めて街の外へと歩き出したことだろう。ヨツちゃん達四人も祖母とミチオちゃん達のいる田舎へ向けて歩き出した。幸いその田舎はそれほど遠くなく、徳島市の南二〇キロ弱の所

だった。途中、見ず知らずの民家で籠を借りてご飯を炊かせてもらったりしたそうだが（お米は少し持ち出していた）、なんと夕方方までに田舎にたどり着いたのである。

\*懐かしい故郷\*

ホテルでのヨツちゃん達との会食の翌日、昔の記憶を頼りにあちこちを歩き回った。春日神社のあたりも散策した。神社の神域は昔の雰囲気そのままに留められているように思えた。三重塔の方へも登った。勿論、焼失した塔はなかったが、嬉しいことにその途中に石のお地藏さんを見付けた。これは私の記憶にしっかりと焼き付けられていたお地藏さんである。昔のままの温顔で、誰が世話をするのか知らないがお花も供えられていた。私は、ひよつとしたらこのお地藏さんがヨツちゃんを守ってくれたのかも知れないと思った。

（昭和12年徳島市生まれ、市島町喜多出身／北海道大学  
名誉教授／東京都江東区在住）



## 丹波の主要地点の標高と

### 私の思い違い

谷 垣 一 宏（川西市在住）

古希に突入しましたが、六五歳頃から毎週大雨でない限りは水曜日と土曜日の出勤場所は丹波の故郷の畑と決め込み、野菜作りの真似事で息抜きをしております（職業的には今も中途半端な現役です）。

ここでは、自宅から丹波の故郷の実家までの片道六五kmの週二ドライブを通じての「不思議」の一つであった「丹波の標高と私の思い違い」について記してみます。

自宅を出て二五分も走ると大阪府能勢町天王地区（五〇軒程の集落）に入りますが、この辺りは一月下旬から三月にかけては、多い時は四〇〜五〇cmの積雪で、それが根雪となつて溶けないことから、国道沿いでも雪が残っていない日は少ないといつてもよいほどの土地であり、「ここは大阪府のチベットかよ」とつ

ぶやきながら車を走らせております（昔は寒天作りが盛んだったとか）。この集落の標高は五二四mもあり、私の自宅付近（標高四二cm）との標高差は丁度五〇〇mであり、これだけでも気温の差は三度違うことになります（標高一〇〇mにつき〇・六度の違い）。この天王地区を過ぎて峠を下ると篠山市ですが、篠山は能勢ほどでなくても意外に雪の多いところですよ。少なくとも丹波市よりも。

何故に丹波市より篠山市の方が降雪・積雪が多いのか、私には大きな疑問でした。小さい頃から、「福知山線の下り列車に乗って南下するほどに開けて行き（＝標高も低くなつて）、宝塚や大阪といった都会に通じている」と思って来ました。従つて、篠山市は丹波市の南に位置することから、局地的例外はあつても、丹波市より標高は低く、雪も少ないものと思ひ込んでおりました。

このようなことがあつて、丹波の主要地点の標高を調べてみました。次頁の表をご覧ください。（国土地理院マップで調べたものですが、調べ方によつて多少の誤差を伴いますが、許容ください）

【丹波周辺の標高】

主要地点	標高
① JR篠山口駅	199m
② JR下滝駅	126m
③ JR柏原駅	109m
④ JR黒井駅	86m
⑤ JR丹波竹田駅	46m
⑥ JR福知山駅	18m
⑦ 丹波市役所（水上町成松地区）	101m
⑧ 丹波市青垣町・大名草公民館	186m
⑨ 粟鹿峰（丹波の最高峰・青垣町）	962m
⑩ JR宝塚駅	45m

【参考：関東地方の標高】

主要地点	標高
⑪ JR東京駅（中央区丸の内）	4m
⑫ 東京都庁（新宿区）	41m
⑬ JR八王子駅（東京都八王子市）	110m
⑭ JR千葉駅	11m
⑮ 成田空港駅	37m
⑯ JR横浜駅	4m
⑰ 箱根登山鉄道・宮ノ下駅	410m
⑱ 東北本線・さいたま新都心駅	12m
⑲ 西武線・所沢駅	75m
⑳ 西武線・秩父駅	233m

このことで、私の思い違いに気付きました。同時に、いろいろな発見がありました。

『山さる』誌会員の皆様で丹波の土地勘がある方、この標高データをご覧になってご自身のイメージに合致しておりますでしょうか。

(1) JR篠山駅の標高は一九九m、JR柏原駅は一〇九mで、篠山駅の方が九〇mも高い（私の想いと逆）。  
↓丹波市より篠山市の方が降雪・積雪が多い要因の一つはこれだ！

(2)丹波市内の山南町、柏原町、水上町の主要道路沿い

の標高は大部分が一〇〇m前後とフラット。

(3) JR石生駅（標高九八m）近くの「水分れ（本州で最も低い中央分水界辺りの標高は一二三m）」を起点に、由良川水系の竹田川に沿った春日町、市島町の標高は一駅毎に低くなり、JR丹波竹田駅は四六mで、柏原駅との標高差は六三mにも。更には、竹田駅の次駅のJR福知山駅の標高は一八mと低く、昨年の九月、台風による集中豪雨で福知山市が水浸しとなった際、なかなか水が引かずに、水浸しの状態が数日続きましたが、これは標高が低いために水

はげが悪いためだと、うなずけます。

(4)上述の「水分れ」を起点にした西の山筋沿いの水上町・青垣町の中で、丹波の最高峰「粟鹿峰（九六二m）」を有する旧・神楽村地区（丹波市のチベット）の「大名草公民館」の標高は一八六mであり、JR柏原駅より七七m高いことになりましたが（意外に標高差は小さい）、JR篠山駅の一九九mに比べれば一三mも低い。

↓「篠山市の市街に近いJR篠山口駅の標高が、丹波市の高地である青垣町の旧・神楽村の大名草集落地点よりも高いのか」と。これは私の思いとは全く異なります。

(5)JR宝塚駅の標高は四五mで、JR竹田駅(四六m)とほぼ同じ。

以上の①～⑤の事例、皆さんの想定に近いものですか、信じられない点がいくつもありましたか？ 興味をもつてご覧いただけたのであれば幸いです。

蛇足になりますが、私は職業柄(統計調査機関)、生活者・消費者の意見・生活実感・生活実態などの人データを分析することで自分の思い違いに気付くことが多々あり、そのことで自分の仕事に興味を持ってやってきましたが、“標高”のような地形データ、自然現象データなども自分の思い違いを正してくれて、実に面白いものです。

〈氷上町旧幸世村棧敷出身／柏高14回生・現職：統計調査機関の運営(アンケート調査などの企画・分析・データ処理・統計解析業務)〉

## 丹波柏原を懐かしむ

谷 垣 尚 (柏原町)

昭和八年八月十八日、私達一家は父の転任に伴って京都府宮津町から丹波柏原へ移ってきた。当時柏原町は人口五千人、戸数一千戸の織田藩の城下町で由緒ある遺跡や歴史的な建造物が色々と残っていた。藩の公邸跡は小学校の校舎として使用され、藩校の名前を受け継いで崇広尋常高等小学校と呼ばれ生徒は毎日長屋門を潜って通学していた。

兄が小学校五年生、私は三年生、弟は一年生で、妹はまだ幼稚園入園前であった。兄の五年生の級は丁度学校の唱歌の時間に「われは海の子」を習っているところであったので、級友達に「われは海の子宮津の子、電燈会社の所長の子」と替え歌で囃されて一寸した人気者になっていた。

柏原は周りを山に囲まれ、小学校の裏は大内山から清水山へ、中学校の校庭は八幡山から入舟山へと続く

ていた。北中の性徳寺から一本道を降りて行くと左手に柏原駅舎の屋根が青く、正面八幡山の中腹には赤い三重の塔が見えて来て、山々に囲まれている様子をよく眺めることができる。

私の家は屋敷の大手通りにあつて小学校の方を見ると大内山が迫つており、反対側へ下つて行くと旧商店街に出て、右へ廻れば役場や天然記念物「木の根橋」を通り、八幡神社の長い石段へと続いている。八幡様の裾野の小川の辺りに中学校の同級生（40回）の有名な歌人、上田三四二君の歌碑（同期青木俊夫君の撰）が建っている。小学校から中学校へと進む間に日本は支那事変から大東亜戦争へと突き進んで行った。国旗を振つて柏原駅頭へ出兵兵士を見送っていた私もいつしか中学校を卒業して陸軍へ入つていた。

終戦となつて、重爆のパイロットになつていた私も柏原へ帰つてきた。父母は妹と共に元気で私達が次々と復員帰郷するのを待ち迎えてくれた。大阪・神戸などの都市は空襲を受けて焼野原となつていたが、柏原は昔に変わらぬ山々に囲まれた町であつた。

父母達はその後もずっとこの家に住み続けていた。

私は柏原のこの家を根拠地にしてあちこち出かけ、何かあると柏原に帰つてきた。柏原はいつしか我が故郷となり、又墳墓の地となつていた。

久しく柏原を遠く離れていると妙にあの丹波の山中の柏原が懐かしい。何かがあると、つくづく柏原は我が故郷であると思う今日この頃である。

（大正13年生まれ、柏原町出身／現職…会社顧問、習志野市在住）



（撮影：岡吉明さん）

## 我が出発のとき

藤井住夫（氷上町）

今から五十数年前の昭和三十三年の春です。私は高校を卒業するとすぐに就職のため上京しました。

当時、新幹線はまだ走っていませんでしたので、私は福知山駅から夜行寝台（出雲号東京行）列車に乗りました。

春とは言え三月末のまだ肌寒い夜でした。東京は中学の頃からの憧れでした。幸せになれる場所、夢が叶う街と想着っていました。でも明日からの生活を思うと、不安と希望で胸が高鳴り、翌朝、東京駅に到着する迄、一睡もありませんでした。自分で決心したことでしたので、それなりの覚悟はしていたのですが、心細くてたまらなかつたのです。それでも時間は止まってくれま



せんでした。そしてその翌朝、終着駅東京が私の人生の始発駅となりました。丹波から出てきた田舎者の身には、東京は何もかも、珍しいことだらけでした。

その年の秋にオリンピックを控えて、東京は、いや日本中が湧き上がっておりました。就職した会社の社長さんや、職場の先輩達（いずれも丹波出身）から「がんばれよ！」と暖かい励ましの言葉を掛けてもらい、少しずつ勇気が湧いてきました。ちょうどその頃、井沢八郎が唄う『あゝ上野駅』が流行っていました。あの唄にも随分と励まされ、背中を押してもらいました。今でも私の人生の応援歌です！カラオケに行くと最後はいつもこの唄を歌います。

勤めた会社は製品を造れば造つただけ売れました。日本中が好景気の真つ只中でした。毎日が忙しく働きました。それは生き甲斐のある毎日でもありました。東京オリンピックが開かれ、カラーテレビが普及して、東京の街中は自動車と人で溢れかえっておりました。

昭和四十年代、世の中が繁栄の一途を辿つたその時代を私も一緒に走り出しました。しかし、大都会東京には危険な道も沢山ありました。上京してから三

年目頃、私も甘い誘惑に負けて勤めていた会社をやめようとしたことがありました。その時の社長さん（同郷の大先輩でもある）に親身になって忠告、意見をいただいたき、なんとか辞職を思い留まることができました。あの時、道を踏み外していれば今日の私はなかったと思います。今はもう亡くなられましたが、田口正男社長は私にとりまして親とも慕う大恩人なのです。いつでも人生の指標にしてまいりました。

現在、私は自宅近くの野菜農家でアルバイトをして働いています。子供の頃、慣れ親しんだ畑でほうれん草や枝豆、ジャガイモや里芋などの野菜作りに毎日励んでいます。青空の下、新鮮な空気を思いつ切り吸って、汗だくになって身体を動かしております。ストレスなんか今の私には全く無関係です。

「無事、これ名馬なり」という諺が有りますが、私のこれまでの六十八年間、平々凡々の人生でしたが、病気一つせずに健康で過ごして来られたことに大変満足しております。丈夫な身体に産んでくれた親に、そして私を正道に導いて下さった田口社長に心より感謝しております。残りの人生も背伸びしないで、細く長

く生きて行こうと考えております。

五十年前に東京駅を発車した私の「人生列車」は元気に走り続けておりますが、まだ路半ばです。もつともつと走り続けます。

一晩中、背中で聴いた寝台列車の響き、朝もやの立ち込める東京駅で見た朝日の眩しさを今でも私は決して忘れません。

この六月には柏原高校卒業五十周年記念同窓会が開かれます。私も出席しようかと思っております。

「ええもんでんあー、いつでも帰れる故郷があるのんは」

（昭和21年氷上町三方生まれ／㈱東京ニュースター勤務、退社後、コンビニ（ファミリーマート）経営／埼玉県狭山市在住）



（撮影：岡吉明さん）

# 丹波への想い

西川 宣孝（青垣町）

## 一、故郷とのかかわり

郷里を離れ、上京して五十六年の歳月が経ちました。十八歳の時に、伯父曰く「長男は家族の一大事に万難を配して帰省できる態勢を整え、常に懐に交通費三万円を携帯して生活しなさい」と諭されて故郷を出ました。

上京以来今日に至るまで、お盆には墓参と菩提寺の施餓鬼会にお詣りし、正月は菩提寺と氏神様に新年の参拝とほぼ欠かさず帰省して、長男の務めを果たして

きました。

子供には、国内外への家族旅行を楽しむ家庭が増える時代になっても、丹波への帰省旅行を優先する親の姿勢に不満を募らせ、親子の葛藤もしてきました。

最近、夏には丹波の自然を満喫させようと孫を同伴して帰省しております。お蔭さまで親子三代の丹波詣でが続いております。

今に至っては、丹波の留守宅を維持してくれた実妹と故郷との付き合いを大事にしてくれた妻に感謝しています。

最近では、世の中が変化し価値観も多様化するなかで、これから自分亡き後に丹波の墓守を含めた故郷や親戚などの付き合いをどのようにしていくべきか、家族にとって大きな悩み事になりつつあります。

## 二、丹波での同窓会

東京では、郷友会・柏陵同窓会・氷上ゴルフ会・在京の高校・中学の同窓会など、丹波出身の皆さんとお目にかかる機会があります。

丹波在住者とのつながりは、佐治中学校（第八回生・現青垣中）の同窓会を卒業以来二年毎に恩師を囲んで開催しています。

地元の同級生たちの都会組への配慮と地元組の同級生の絆による永年にわたる尽力の成果であります。

六十歳までは、日帰りの会で中学時代の想い出、仕事や家庭にかかるその時々の様子を語り合いました。

六十歳（十五年前）からは、一泊二日の宿泊同窓会を催しています。この会は、それぞれの地域に在住する者が当番幹事となり、城崎・六甲・氷上・篠山・東京などで催してきました。一泊ですが寝起きを共にする旅を通し、大勢でお互いの人生を深く語り合うことも出来たし、丹波在住の人たちが、多様な趣味や娯楽を楽しみ、若々しい姿を拝見出来ました。都会で時間に追われる自分と比べうらやましくもありましたが、おかげで楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

東京では、「古希の修学旅行」と称して、二十七名が参加してくれました。柏原駅を出発し、新大阪で阪神地区が合流し、車中で和やかに修学旅行気分を味わいつつ、東京駅で関東組と一緒に一泊二日の旅でした。

一日目は浜離宮やお台場（フジテレビ）を散策し、ホテルでの宴会・二次会・三次会と深夜までくつろぎ、翌日は観光バスで東京タワー、浅草寺、スカイツリー、隅田川舟下りの観光を楽しみ、お土産を両手に帰郷し

ていきました。

この旅行を契機として私は、丹波や阪神在住者たちと親近感が一層深まりました。

また、私たちの年代は、近代化で便利な世の中になっているとは言え、なかなか多くの費用と時間をかけて旅をする機会が少なかったのです。

旅の後日談に、丹波の人たちからは、孫たちと東京の話題も多くなり、テレビの映像を通して家族団欒の輪が広がり喜んでいると感想を頂いたし、また東京・丹波間を時間と費用をかけて往復し「同窓会」に出席する在京組の努力に理解を示してくれた方もいました。

今では、帰省の機会をとらえてはミニ同窓会もあり、丹波への道のりがますます近くなり、帰省が楽しいものなっています。

故郷「丹波」をいつまでも近しく想えるのは、丹波の同窓生のお蔭であると感謝し、いついつまでも継続できることを念じています。

〈昭和14年、青垣町田井繩生まれ／元地方公務員〉



# 八十年を振り返って

—青春のふる里に思う—

近 藤 龍 夫（市島町）

柏原高校五期生は強力な幹事団のおかげで毎年春に同窓会（につばち会）を開いている。昨年は「卒業還暦」と銘打って柏原で開いた。来年は「祝傘寿」の会を宝塚で盛大に行う予定だ。

私は仕事の都合もあって、これまでの出席率はよくない。でも「卒業還暦」となれば何が何でも出席しなければとはせ参じた。

新横浜から新幹線と特急列車を乗り継げば、横浜の自宅から柏原まで、なんと四時間足らずで着いた。今さら何をと言われるかもしれないが、六十年の歳月は丹波と横浜の距離をこんなにも短くしてくれた。高校の修学旅行では、柏原から東京まで夜行列車で十五、六時間かかったのではなかったか。

私は小学四年の時、大阪から今の市島町に疎開した。

翌年戦争は終わったが、そのまま高校卒業まで市島で暮らした。多感な青春時代を丹波で送ったことになる。

昭和二十二年（一九四七年）、義務教育となった新制中学第一期生として村の中学に進み、勉強よりスポーツに励んだ。野球、陸上、卓球と多種目をこなし、野球では郡の大会で何度か優勝した。陸上は四百メートルの郡代表として県大会にも出た。

昭和二十五年（一九五〇年）柏原高校に入学し、二十八年に卒業した。ちょうどこの時期、お隣の朝鮮半島では世界史を塗りかえた朝鮮戦争が火花を散らしていた。でも、丹波の地は平和そのものだった。春、校庭の片すみにあつた大きな桜の木が満開となり、花吹雪のもとで仲間と将来を語り合った。夏は野球部員として汗をかき、まだ、銀傘の復活していない甲子園球場で県予選を戦った。冬、雪が降ると一日数本しかない列車のダイヤが大きく乱れ、汽車通学組は薄暗くなつた寒い教室でダイヤの回復を待った。柏原にはたしか映画館が一軒しかなく、畳を敷いた古い映画館で、ストーブで暖をとりながら、高峰秀子出演の「細雪」を見たのを思い出す。

先生方も人情味ある方たちばかりだった。良き友にも恵まれた。高校時代の友との交流、教えを請うた先生方の言動が、その後の人生に少なからぬ影響を与えているように思う。

空気よし、水よし、人情よし。青春時代を過ごした丹波は私にとつて心のふる里である。そのおかげで、身心ともに健康で傘寿を迎えることができた。

私は大阪で大学生活を送り、台湾留学を経て朝日新聞社に入った。高校時代から政治、国際問題に関心があり、記者の道を選んだのだが、その道は甘くはなかった。厳しく気の抜けない毎日だった。でも今思い返せば楽しく、やりがいのある有意義な仕事だった。

振り返れば数々の歴史的瞬間、歴史の舞台を取材し、記録に残すことができた。一九七〇年代から八〇年代にかけて、足掛け十三年、北京、香港に駐在した。その間、中国大陸はもとより、東南アジアを守備範囲として動き回った。

一九七四年三月、上官の命令がない限り投降しないと戦後二十九年間、フィリピン・ルバング島のジャングルに潜んでいた小野田寛郎陸軍少尉の救出作戦を取

材した。ジャングルから軍服姿のままマニラに移送された小野田少尉は、長いジャングル生活にもかかわらず、しつかりとした足取り、精悍な面持ちで記者会見に応じた。相手の体調や心理状態を考慮することもなく次々と出る質問に、一言一言、噛みしめるように答えていた小野田少尉の表情が忘れられない。

七五年三月、ベトナム戦争末期のサイゴン（現ホーチミン市）で、ベトナム（南ベトナム民族解放戦線）の砲撃を受け、取材先の前線から命からがら逃げ帰ったことがある。取材し記事を書くのも大事だが、わが身を守るのにも必死であった。戦争のむごたらしさ、悲惨さを目のあたりにし、戦争をする人間の愚かさを改めて知った。

なによりも、毛沢東、鄧小平時代の中国の歴史的出来事を目撃し、記録に残すことが出来たのは、生涯の誇りに思っている。

一九七八年秋、北京市長安街西単のレンガ壁に絶対的権力者だった毛沢東批判の壁新聞が張り出された。毛沢東死後二年目のことである。やがて批判されるであろうと思っていたが、あまりの早さに驚いた。

これを機に、今の経済発展の原動力となった「改革開放政策」が、じわじわと中国全土に広がっていった。この政策を指揮、指導したのが鄧小平である。それ故、彼は中国近代化の総設計師と言われる。鄧小平を間近かに取材した回数は数百回に及んだ。彼の一挙手一投足から中国政治の方向を推測することもできた。

今、日中関係は国交正常化後最悪の状態にある。一九七八年八月、日中は平和友好条約を結び、共存共栄を願った。鄧小平は、この条約締結に尽力し、批准書交換のため、その秋、日本に初めてやってきた。そのとき、彼はいま問題になっている尖閣諸島の領有権問題について「いまの世代は知恵が足りず、問題を解決することができないが、次の世代は我々より利口だろうから、きつと解決してくれるだろう」と、いわゆる棚上げ論を展開した。見識と度量を持ち合わせた大物政治家だったから、国内での批判、突き上げを恐れることなく、自論を展開したのである。

毛沢東、周恩来、鄧小平と言った大物政治家が国の舵取りをした時代は去り、いまは保身で精いっぱいの小粒な政治家の時代となった。日本も同様だが、日中

関係後退の背景にこの指導者層の変化、交代が影を落としてるように思えてならない。

日中平和友好条約は今や有名無実化し、日中関係の将来を心配する声は日増しに強まっている。国は隣りの国が気に入くわないからと言って引越すわけにはいかない。中国とはこれからも付き合って行かざるを得ない。だとすれば、仲良く、気持ちよく、互いにプラスとなる付き合いをしたい。

それには「彼を知り己を知れば、百戦殆（あや）うからず」（孫子）にあるように、相手を知るとともに己をわきまえる、彼我の実情を客観的に認識して事を運ばねばならない。五千年の歴史があり、国土は日本の二十六倍。そこに十三億人が暮らす中国。基本的にこのことをまず頭に入れて、中国とのつき合いを考えたいかねばならない。

かつて日本はいろいろと理由はあったにせよ、中国大陸に軍を進め、戦火を拡大し、中国に多大な損害を与えた。この事実が消すことはできない。いまなお、直接の戦争被害者が中国には大勢いる。中国が言う「歴史認識」とはつまり、この事実を指す。戦後六十九年

も経って、なお過去に捕らわれていては、前に進めないではないか、そうも思いたくなるが、歴史はそう簡単に処理できるものではない。したがって、われわれは過去を反省し、二度とこのようなことはほしくない明確な姿勢、態度を示し、そのことを相手に理解してもらう努力をしていかなければならない。ただし、負い目からいじけたり、卑屈になつてはならない。日本政府は、これまで中国をはじめアジア諸国に対し、機会をとらえて過去の戦争についての謝罪をしてきた。だが軽薄な政治家の言動がその誠意を塗りつぶし、新たな不信を招いてきた。こんなことを繰り返しては前へ進むことはできない。

だが一方、中国も最近こそ若干のぶれがあるものの戦後一貫して平和の道を守ってきた日本の現状、そしてその歩みをもっともつと理解する努力をしてもらいたい。反日教育などを展開し、つき合いをむずかしくするようなことは避けてもらいたい。

中国は国内総生産（GDP）で日本を抜き世界第二位の経済大国となった。その経済力を背景に「中華民族の復興」をかかげ、富国強兵路線を突っ走ろうとし

ているようにも見える。ベトナムやフィリピン、そして日本の島の領有権をめぐる、力による解決をはかるうとするなら、国際世論は中国に味方しないだろう。ともあれ、いまこそ日中双方は頭を冷やしてお互い謙虚な姿勢で、偏狭なナショナリズムを越えて、将来のために、一日も早く関係改善に努めるべきではないか。

新聞社を卒業したあと、私は千葉の私立大学の教壇に立った。留学生を含む若者たちに現代中国を講義した。留学生には親日家にならなくとも知日家にはなつてほしい、そして祖国と日本の掛け橋になつてほしいと説いた。そのあと、大学、短大、高校を擁する私立学園の運営に当たり、平成二十五年その任を辞した。日本の将来にとつて、経済も大事だが、教育はもっと大事であることを身をもって知った。

青春のふる里丹波。あの平和な原風景を思い浮かべながら、八十年を振り返ることができた。改めて感謝しつつその幸せをかみしめている。

（昭和9年大阪生まれ、市島町出身／元・英文朝日社長、前・千葉敬愛学園理事長／横浜市在住）

# 西山泊雲と小川芋銭

西山 裕 三（市島町在住）

家業の西山酒造を営みながら、高浜虚子の教えを受け、俳誌「ホトトギス」の俳人として知られた西山泊雲（一八七七—一九四四）。茨城県牛久に住み、河童の絵を多く残したことから「河童の芋銭」として知られた日本画家、小川芋銭（一八六八—一九三八）。泊雲の長男と、芋銭の次女が結婚し、私が生まれた。このため、二人は私の祖父になる。

私が書庫を整理していた時に、ブリキの箱にどっさり入った古い手紙を見つけた。その数、一七九通。いずれも芋銭が泊雲に宛てて送ったものだった。大正七年（一九一八）から昭和二年（一九三七）にかけての手紙で、文面を明らかにすべく小川芋銭研究センター（茨城県牛久市）に調査を依頼した。二年半ほどかけて全容がわかり、資料が届いた。そのことが丹波新聞で掲載されたことが機縁となって、『山ざる』の

誌面をけがすことになった次第である。手紙の文面にもふれながら二人の間柄について書こうと思う。

泊雲の本名は亮三といい、長男として生まれた。生来、文学志向が強く、外に向かつてはばたきたいという気持ちを持っていたようだが、商売一途の父親は亮三が文学書を読むことに理解を示さなかった。三度も家出をし、自殺未遂事件を起こすなど、不安定な青年時代を送ったのは、内なる情熱と旧家の家族制度とはざまに苦しんだゆえであろう。

のちに俳句と出会い、心の安定を得た泊雲は田舎にとどまり、家業の酒造業にいそむが、はばたきたいという思いは完全に消えることなく、心の奥底にうずいていたのではなからうか。だからこそ、泊雲は、名がどろく一流の人物と親しくするよう努めたのだと思う。そんな人物のひとりが芋銭だ。

芋銭と知り合ったのは、同じく一流の人物だった日本画家の平福百穂の推挙がきっかけとなった。大正四年、当時、国民新聞で挿絵を描いていた百穂が泊雲宅に滞在した折、泊雲が「わが国の画壇でどういう人の



小川芋銭

局、翌年四月まで泊雲宅に変更して長逗留になったのか。泊雲の長男の謙三



西山泊雲

滞在となった。この年の八月に丹波を訪れた。最初は、短期間のつもりだったが、結局、翌年四月まで泊雲宅に変更して長逗留になったのか。泊雲の長男の謙三

絵を評価されますか」と尋ねた。すると、百穂は「常陸の牛久沼の畔に、自分よりも一〇歳ぐらい年上の小川芋銭という人がいる。この人の絵となら、私の絵何枚とでも取りかえる」と答えたのである。芋銭が四七歳、泊雲が三八歳のときだった。泊雲はさつそく、この百穂の言葉を書き添えて、短冊一二枚を芋銭のもとに送り、絵を描いてもらった。これが縁となって、二人の交友が始まった。

大正七年、芋銭は初めて泊雲宅を訪問したのを皮切りに、足しげく丹波を訪れるようになる。なかでも大正一五年は、長期の滞在となった。



石像寺に伝わる小川芋銭の作品「丹陰霧海」

と結婚した芋銭の次女、桑子、つまり私の母親は生前、丹波新聞の取材に「関東は平野のため山がないし、霧もない。その点、丹波は珍しかったのでは」と答えている（丹波新聞一九八九年一月一日付）。丹波と言えば、霧

もその特色の一つ。母の言うように、丹波霧は芋銭の絵心をくすぐったと思われる。滞在中に「丹陰霧海」と題した作品を創作していることから、それがわかる。

泊雲宅に滞在中、芋銭は、昼間は近くの石像寺に出かけ、庫裏の二階を「烟霧楼」と名づけて画室とした。この部屋の窓から外をのぞくと、一面に広がる山野が一望できた。芋銭は、窓辺にたたずみ、霧がたちこめる風景を飽かずに眺めたことだろう。石像寺には今

も、芋銭が描いた「丹陰霧海」の下絵が残り、本堂に掲げられている。石像寺の裏山の中腹にある巨岩、磐座から霧の流れる丹波の峰々を描いた作品で、第十三回院展に出品された。

芋銭は、朝昼晩と食事のたびに一合ばかりの酒を時間をかけて楽しみ、夕餉は泊雲と一緒に食卓に向かった。また、地元の人たちとともに石像寺で重箱を広げ、月見を楽しんだこともあった。

さて、冒頭の手紙である。昭和二年八月九日に書かれた手紙にこうある。

「去年従弟の家大阪の大丸横町を出て丹波竹田の泊雲居に這入ったのは明十日の午前十一時頃であった俗悪子大阪の混雑から逃れて四周翠微の丹波に入った悦を追想しあの時はあであつたこうであつたなど思ひ浮べ居り候 一年は早きものに候……」

同年八月二〇日の手紙にはこう書いた。

「御來示の如く昨年は御同伴丹後に遊び亦塵雲霧をひらきて石像寺山に登り千里一白の大景に接し候 一宮祠前の盆踊りも思出し候 清さんはことしも盛んにをどり候ひしならん 青き柚の香もなつかしく候 や

がて素晴らしき曼珠沙華は咲きほこり竹田河原に炎を彩り可申候……」

同年九月十一日の手紙には、「昨夜は名月にて南風微雲をさへ吹払ひ底前影を踏むに水を歩するに似たり 昨年石像寺山の観月を想起し興深く存入候 但し友はなく只一人樹下石邊を逍遙致し候……」とある。

丹波での日々を懐かしむ文面から、芋銭にとつて丹波での暮らしがいかに楽しいものであつたかがわかる。

「芋銭」とは一風変わった名前だが、「芋が食べられるだけのお金があればいい」という思いから名付けたものとされる。それほどに利得に淡泊な、高潔な人物であつたようだ。私の母、桑子は、芋銭のことを自分の親でありながら神様のように話していた。前述の丹波新聞で、母は芋銭の人柄について次のように語っている。

「崇拜している良寛さんのように自然に生きた人でした。お金や名誉とは無縁で、とらわれることを嫌っていました。心ができていないのに、きれいな絵を描



小川芋銭が西山泊雲に宛てた手紙

すこともたびたびでした」  
母親が、芋銭を敬愛していたことがうなずける話だ。  
冒頭に一七九通の手紙が見つかったと書いたが、実は去年の、新たに手紙が見つかった。

これも小川芋銭研究センターで調べてもらったところ、その中に芋銭が桑子に宛てたものがあつた。書かれた年ははつきりしないが、昭和一〇年か一一年、結婚間もないころの桑子に嫁としての心構えを説いたものだ。

「丹波えこしてハ心も身も軽くして少しも家の手助けする気ではたらくべく候 此善き習慣をつけることは若きうちにかぎることなれば必ずつとめていたすべく候 其許の心は明るく少しの邪推をまじうゑむことはよろこばしきことながら 猶進んで若き身を働らかんところがけ候事 唯今第一の心懸に候 是は心を苦しめずにさらさらしたる心もちにて手近きものよりはじめること二候……」。さらに追伸として「母はいろいる気をもミをれば 気をもまぬよう二母の心をなぐさむべく候」とある。

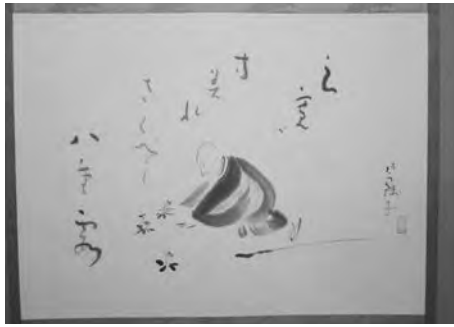
芋銭の父親としての側面が垣間見られて興味深い。無欲で高潔な芋銭と、泊雲。おたがい田舎者としての朴訥さがあり、その共通項が二人を結びつけたのはなかるうか。その絆は深く、私の父（謙三）と母（桑子）だけではなく、芋銭の三男が泊雲の長女を妻とし



た。二重の姻戚関係が結ばれるほど、親密な間柄だった。

芋銭は、泊雲が昭和九年に出した句集の装丁をするだけでなく、後記を寄せている。そこには、「吾友西山泊雲子を思ふ時、直に山嶽の丹波を想起すると共に其古武士的風格を想わせるのである……君は酒造業の傍古るき以前より俳句を嗜み、之を性情陶冶の具とした。則君の俳句は君の宗教とも云へる……」とある。

この文にもあるように、泊雲にとって俳句は宗教でもあったようだ。ただ宗教として自らの拠り所とするものの、生活とは切り離して考えていた節がある。私の父、謙三は、泊雲の遺伝子をしつかりと引き継ぎ、「小鼓子」と号し、俳誌「草紅葉」を主宰する俳人でもあったが、泊雲は晩年、息



西山酒造場に伝わる小川芋銭の作品

子謙三に「俳句はほどほどにしておけ。俳句に夢中になり過ぎると、商売がおろそかになる」と諭していたと聞く。

拙宅には、ふすま絵などの大作を含め、一〇点以上の芋銭の作品があるが、作品を傷めることなく後世に残すには、拙宅に置くよりも専門の施設で保管してもらうのが良策であろうと、茨城県近代美術館に寄託している。拙宅にある芋銭の絵は、ただ一つ、良寛を描いた小品だが、良寛は芋銭が崇拜していた人物であることを思うと、芋銭の人となり浮かび上がってくるような気がして、その絵に接していると、改めて祖父芋銭に対して敬愛の念を抱く。

最後に、芋銭の手紙だが、氷上町の植野記念美術館では芋銭展の開催に向けて準備を進めておられるようだ。もし芋銭展が実現すれば、そこで手紙を公開したいと考えている。

(昭和18年、市島町生まれ／西山酒造場5代目)

# 丹波の先人が残した

## 文化遺産「鐘ヶ坂隧道」

野村 節 三二（山南町）

◇はじめに あの前未曾有の大災害「東日本大震災」から早くも三年四カ月が過ぎました。当地の復興はようやく緒についたばかりで、三陸鉄道南リアス線（盛―釜石）の全線再開通後は海岸防潮堤と新小学校の新設工事や全壊を免れた三陸公民館の改修工事で、ダンプカーや重機が広い被災地を忙しく往来しています。

さて、私は今年三月に『北里柴三郎と後藤新平』と題した本を上梓しましたが、その執筆の動機や出版までの経緯は「本書の出版に当って」と「まえがき」に記述しましたのでここでは省略します。本書は歴史的背景に立った北里・後藤という偉人の足跡と深い絆を主軸に記述したものです。

ところで、この二人と丹波との直接的な関係は無かったのですが、本書には間接的に丹波と関わった人

物が登場します。その人物とは幕末・明治時代の皇族軍人・有栖川宮熾仁親王と軍人政治家・西郷従道です。

この有栖川宮のことを調べていると西郷従道と公家出身の政治家・三條實美と共に丹波の「鐘ヶ坂隧道」に関わったことが分かったのです。そして、このトンネルの掘削・開通には丹波出身の公共事業家・園田多祐氏と政治家・田艇吉氏が尽力したことが伝えられています。

一方、内相・後藤新平と共に国政に努めた田艇吉氏の弟・田健治郎氏は丹波出身の明治・大正時代の官僚政治家として、また、「関東氷上郷友会」の設立に尽力したこともよく知られています。田健治郎氏は本書に度々登場しますので詳細は本書に譲りますが、寺内内閣で逡相に就任し、のちの「関東大震災」直後に成立した第二次山本内閣では司法相・農商相として内相・後藤新平と共に「帝都復興計画」の策定に尽力しましたが、「虎ノ門事件」で総辞職したことは惜しまれます。ここでは「鐘ヶ坂隧道」について述べることにします。

◇鐘ヶ坂 「鐘ヶ坂」は現在の国道一七六号線の兵庫県丹波市柏原町上小倉と篠山市追入の市境（かつては

水上郡と多紀郡の郡境）にあり、江戸時代の浮世絵師・安藤広重による「六十余州名所図絵」の一つに「丹波鐘坂」が描かれているように、古くから桜の名所としてもよく知られた峠です。また、峠の南西約七五〇mには金山かみヤマ（標高・五四〇m）があり、そこには織田信長の命で丹波制圧のため明智光秀が天正六（一五七九）年に築いた「金山城」跡があります。

「鐘ヶ坂」へは私も柏原高校併設中学校時代に一度行ったことがあり、金山の頂上真下には「鬼の架け橋」と呼ばれる巨岩があったことも記憶しています。

◇鐘ヶ坂隧道 さて、古くから難所といわれていたその峠に、明治時代になってトンネルを掘削することが計画され、今から百三十五年前の明治二二（一八七九）年に時の多紀郡長・園田多祐氏と水上郡長・田艇吉氏ほか七名が発起人となって、「鐘ヶ坂隧道開鑿之義願書」（建設工事請願書）が兵庫県へ提出されたのです。

そして、翌明治一三（一八八〇）年に工事許可が下りて着工されました。その工事には二八万枚の煉瓦が使用され、その煉瓦は上小倉に設けられた煉瓦窯で、

鹿兒島から呼び寄せた煉瓦職人によって造られたとのこと。また、総工費は約四万円で、その半額は多紀・水上両郡民の寄付に依ったといわれています。こうして、工夫延べ六万三千人を要して、着工から二十年十ヵ月後の明治一六（一八八三）年、幅三m、全長二六八mの煉瓦工法による立派なトンネルが完成したのです。

このトンネルは「鐘ヶ坂隧道」と名付けられ、煉瓦工法のトンネルとしては日本最古で、現存する道路トンネルでは日本で五番目といわれています。そして、このトンネルの篠山市側口に有栖川宮熾仁親王による揮毫「事成自同」、また、丹波市側口には三條實美による揮毫「鑿山化居」の銘板が掲げられ、同年十月の「鐘ヶ坂隧道開通式」には西郷従道が参列したと伝えられています。

明治一六年といえば、わが国では近代化や欧化主義が推進された、いわゆる「文明開化」の最盛期で、この年の秋にはその象徴ともいえる華麗な装飾を施した「鹿鳴館」が東京日比谷に開館され、「鐘ヶ坂隧道開通式」の翌月に「鹿鳴館落成祝賀会」が盛大に開催されました。

このような時期に一地方の丹波に当時としては最先

端の一つである煉瓦工法によるトンネルが完成し、しかも、それに関わったのが有栖川宮熾仁親王（東征大

総督、兵部卿、元老院議長、鹿児島県逆徒征討総督、左大臣、陸軍大将、のち陸軍参謀総長等を歴任）、三條實美（外国事務総督、右大臣、太政大臣、のち内大臣、首相等を歴任、公爵）、西郷従道（近衛都督、参議、陸軍卿、農商務卿、開拓使長官、のち海相、内相を歴任、元帥海軍大将、侯爵）という明治初期政界の錚々たる人物であったことは正に画期的なことだったと思われまます。その辺の経緯をご存知の方はご教示下さい。

ところで、日本の近代化の一つに西欧の建設・建築技術の導入があり、それが煉瓦工法でした。現存している明治初期の煉瓦造りの建物としては最近「世界遺産」に指定された「富岡製糸場」（明治五年）が有名です。そのほか、旧・東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）第一、二号館（明治二三年）や敦賀港駅ランプ小屋（明治一五年）があります。従って、この頃に完成した日本最古の煉瓦造りのトンネル「鐘ヶ坂隧道」（明治トンネル）はわが国トンネル技術史にとつて極めて価値の高いものと思われまます。それ故に、「丹

波の文化遺産」の一つとして保存し、是非永く後世に残してもらいたいものです。

因みに、丹波に現存する煉瓦造りの建物としては山南町上滝に「旧・上久下村営発電所」（大正十一年、現・上久下村営発電所記念館、有形文化財）があります。また、その真下を流れる篠山川の川岸で「丹波竜」の化石が発見（平成一八年）され、一躍丹波の名所になったことはまだ記憶に新しいところです。

なお、「鐘ヶ坂」には、昭和四二（一九六七）年に完成した「鐘ヶ坂トンネル」（昭和トンネル：幅七・五m、全長四五五m）と平成一七（二〇〇五）年に完成した「新鐘ヶ坂トンネル」（平成トンネル：全長一・〇二km）があります。このように、「鐘ヶ坂」峠には時代と共に変遷した三つのトンネルがある全国でも珍しい場所といわれています。ここで、「鐘ヶ坂隧道」建設に関わった丹波の先人・園田多祐氏と田艇吉氏について述べておきます。

◇園田多祐 園田多祐氏は幕末・明治時代の公共事業家として知られ、文政一三（一八三〇）年に丹波国篠

山藩領大山村（現・篠山市大山宮）の代々大庄屋の家に生まれ、同藩の渡邊弗措ふつそに学びました。

明治維新後は区長、多紀郡長、兵庫県会議員等を歴任し、前述のように、多紀郡長の時に「鐘ヶ坂隧道」建設に尽力しました。のち第三百三十七銀行初代頭取に就任しました。この銀行は昭和一七（一九四二）年に神戸銀行（現・三井住友銀行）と丹和銀行（現・京都銀行）になりました。園田多祐氏は晩年、藍綬褒章を受章し、明治三二（一八九九）年に六十九歳で他界しました。

◇田艇吉 政治家・田艇吉氏は嘉永五（一八五二）年に丹波国柏原藩領下小倉村の代々大庄屋の家に、父・田文平と母・長喜の長男として生まれ、幼時、村医・長澤順方に師事し、十二歳で小島省齋に入門して若年ながら村政に参画していたといわれています。

明治一二（一八七九）年、二十七歳にして第一期兵庫県議会議員に当選し、その後、水上郡書記、水上郡長等を歴任して、衆議院議員に当選しました。その間に「鐘ヶ坂隧道」や「阪鶴鉄道」の建設・開通に尽力

し、明治三七（一九〇四）年に阪鶴鉄道㈱の取締役社長に就任しました。阪鶴鉄道（大阪―舞鶴）は主として現在のＪＲ福知山線の前身に当ります。

また、田艇吉氏は松鶴と号し、南画の画人としても知られています。大正時代は讃岐丸亀出身の近藤翠石に、晩年の昭和初期は丹波水上出身の安田鴨波とその子・栗郷に師事して南画に精進し、優れた作品を残し、昭和二三（一九三八）年に八十六歳で永眠しました。

このような田艇吉氏の功績を顕彰するため生前の昭和一二（一九三七）年に柏原町の八幡神社下に銅像が建てられました。が、「太平洋戦争」中に金属供出され、戦後の昭和四一（一九六六）年に福知山線柏原駅前再建されました。その台座の銘板「田艇吉翁」は元首相・若槻禮次郎による揮毫です。

以上、拙著『北里柴三郎と後藤新平』に登場する人物と関連して、丹波の二先人の尽力によって成された「鐘ヶ坂隧道」の話をもとめてみました。が、遠く離れた丹波のことが懐かしく想い出される昨今です。

（昭和9年、山南町岡本生まれ／北里大学名誉教授・理博／岩手県大船渡市三陸町在住）

# 丹波を撮る

## 春日町黒井を往く(1)

写真と文：徳田八郎衛



← J R 福知山線黒井駅前も商店が消え寂しくなりましたが、新たに登場したお福の像が迎えてくれます。

↓ 黒井川に架かる黒井橋は、氷上高校生の通学路。昭和3年架橋との銘があり、当時の「自動車化時代」を反映しています。



← 昭和 37 年にバイパスが造られるまでは、これが福知山や柏原へのバス・トラックが往来する国道 175 号でした。57 年に新たな春日バイパスが登場し、バイパスも旧国道と呼ばれています。江戸時代から存在する、この由緒ある街道の正式名称は無いそうです。すれ違いが一番困難だったのは、この辺りです。

# 丹波を撮る

## 春日町黒井を往く(2)



←この古道？沿いの黒井郵便局も隣の伝統的な家屋も健在です。この通りに白壁の屏や庭に囲まれた邸宅が少ないのは、昭和初期の国道拡張工事によるものかと思うのですが、すでに大正時代、この程度の道路幅であったという町民もおられます。



←バイパス新設の際に移転した店もありますが、老舗「竹田屋」などは古道沿いの本拠を残したまま進出しました。手前の祠は、横町愛宕神社です。安政の大火の後、防火に靈験ある京都の愛宕神社から分祀されました。小山・芝町・本町・横町・仲町・上ヶ町等の各町内に祀られ、大火のあった3月22日には町ごとに集まり兵主神社へ祈願します。



←古道周辺をウロウロすると、あちこちで立派な参道のある寺院や小さな祠、地蔵に出会います。城下町というよりは門前町ようです。もちろん物流の要所ですから、佐治銀行、神戸銀行などの金融機関や劇場も設けられる商業の町でもありました。

# 丹波を撮る

## 春日町黒井を往く(3)



←バイパス（今は旧国道）沿いに建てられた旧春日町役場は、今も丹波市春日庁舎として大活躍。福祉部・産業経済部・建設部・農業委員会事務局などの組織がすっぴりとここに。北にそびえるのは城山。野面積の石垣で有名な黒井(保月)城址だけでなく、猪ノ口山全体が国指定の史跡となっているので緩やかな登山道や休憩施設の新設は難しく、但馬の竹田城址のような集客ができないと嘆く声も。



←庁舎2階からは、白雲なびく千丈寺砦が展望できます。かつて稜線には早馬を走らせるほどの連絡路が整備されていたという観察も。足弱の観光客に猪ノ口山へ登ってもらうのは難しいが、この庁舎カスーパーの屋上を説明図付の展望台にできないでしょうか。



←毎朝8時20分にラジオ体操開始。「お客様も一緒にどうぞ」のアナウンスは流れないので、関東からの来庁者は遠慮して傍観。8時25分に課ごとのミーティングが始まり、8時30分に課業開始となります。

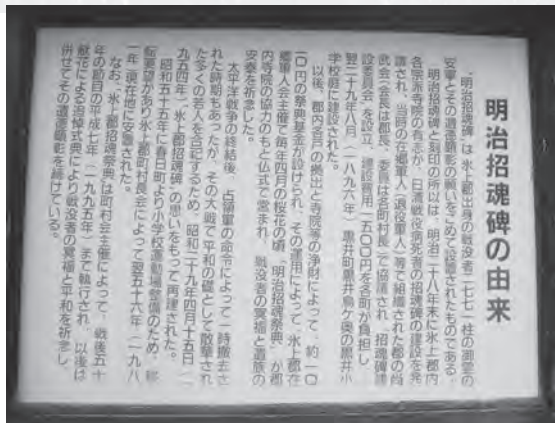


# 丹波を撮る

## 春日町黒井を往く(4)



←終戦とともに旧町村の忠霊塔や忠魂碑は占領軍の命により撤去・破壊されましたが、明治29年、郡内の諸宗派寺院有志によって黒井小学校校庭に建立された、氷上郡出身日清戦争戦没者を祀る明治招魂碑は破壊を免れ、昭和29年に招魂祭が再開されます。その後、校庭拡張に伴ってここ春日町役場側へ移され、戦後50年の平成7年まで旧氷上郡全体の招魂祭として毎年桜花爛漫の4月に祭事は続けられました。



### 明治招魂碑の由来

「明治招魂碑」は氷上郡出身の戦没者一七七一柱の御霊の安寧への追慕の思いを込め建てられたものであり、明治招魂碑と黒井の所以は、明治十八年春に氷上郡内各宗派寺院の有志が「日清戦役戦没者の招魂碑の建設を希望され、当時の各宗派人選役員人等て組織された幹事の尚武生会は、委員は春日町長、之協議され、招魂碑建設委員会を立ち上げ、建設費用一五〇〇円を町が負担し翌十九年八月（一八九六年）黒井町黒井倉ヶ原の黒井小学校庭に建設された。

以後、郡内各戸の集出と寺院等の浄財によって、約一〇〇円の祭典費が認められ、その運用として、氷上郡内各宗派人等主催で毎年四月の桜花の頃、明治招魂祭典、以前内寺院の協力のもと仏式で営まれ、戦没者の冥福と遺族の安寧を祈念した。

太平洋戦争の終結後、占領軍の命令によって一時撤去された跡形もあつたり、その大正と昭和の儀として撤去された多くの若人を追悼するため、昭和二十九年四月十五日（一九五四年）氷上郡招魂碑の碑文をもつて再建された。

昭和五十五年「春日町より小学校運動場整備のため、第一学区の多くの水、敷設町長等によって翌五十六年（一九八一年）現在地に設置された。

なお、氷上郡招魂祭典は町村主催によって、戦後五十年の四百の平成七年（一九九五年）まで執行され、以後は併せてその遺族の慰霊を続けていく。

←町村会主催の氷上郡招魂祭でしたが、郡内から集まる参列者を黒井の人々は鼓笛隊や仮装行列で歓迎しました。今は献花による追悼式典のみとなっています。なお黒井地区の招魂碑は、小山自治会の区域にあり、やはり法要が行われています。



←庁舎側に春日歴史民俗資料館（左）と春日郷土資料館（右）があります。前者は、春日町内の歴史資料や文化資料を展示し、古文書だけでなく古代遺跡や城址での発掘品も見られます。後者は、懐かしい民具や農機具を沢山集めて展示していますが、土日祝しか公開されないのが残念。遠い山南庁舎（教委）の管理下にあるので特別参観を申し出るのも躊躇します。

# 丹波を撮る

## 春日町黒井を往く(5)



← 著名な興禅寺にも山門から楼門までの長い参道がありますが、その山門に接して黒井幼稚園の入口が並んでいます。宗教法人運営の幼稚園には、京都や鎌倉の有名な社寺仏閣に隣接、あるいは境内に設けられたものが少なくありませんが、丹波の公立幼稚園で、このような環境にあるのは稀でしょう。



← 斎藤利三の下館であったとされる興禅寺です。赤井一族の下館も多分これであったろうとされていますが、確証はありません。楼門前の休憩所と手洗いの存在を、城山を目指す登山者に伝える案内板がこの撮影場所に立っています。



← 黒井小学校の北斜面からは沢山の石碑が子供たちを見守っています。校庭の拡張工事に伴って移転したものもありますが、これほど多くの碑に接しながら子供が育つ小学校も珍しいのでは。先述の招魂碑も、以前はここに建っていました。

# 丹波を撮る

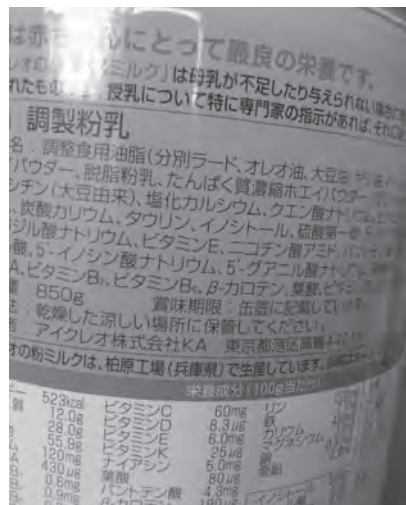
## 首都圏で出会った丹波



←若い世代に人気絶頂の「東京ベイエリア」豊洲（江東区）。この写真では3・4階の駐車場しか写っていませんが、この街を代表する商業施設「らぼーと」に東日本大震災の直後、突如出現したのが「丹波のおいしい牛乳」。福島だけでなく茨城、埼玉、千葉と関東一円の農産物が風評で消費者に忌避され、店長が近畿、中国地方から必死で入荷を図った結果だと聞き、複雑な心境に。



←だが3年経った今も、我が「丹波のおいしい牛乳」一兵庫県丹波市の牛乳一」は入荷されています。やや高い値がついていますが、真価が評価されたのでしょうか。しかし全国から出荷された強豪がひしめき合っています。東京五輪まで「こぼっとくれーよ」。



←ここは野田市最大の病院、キッコーマン総合病院です。乳幼児に処方される粉乳の缶を眺めていたら、何と「柏原工場（兵庫県）で製造しています」との表示が！だが、関西に詳しいと自認する方が「これは大阪府の間違いであろう」と講釈していたのでガックリ。

## 東京と丹波に歌の懸け橋を！

—日本人として私らしい歌の道を行く—

声楽家

カーザ・ディ・マッジヨ主宰

### 足立さつきさん

●インタビューー

岡田昌子

上 高子



《プロフィール》 ソプラノ歌手。春日町出身。世田谷区在住。柏原高校32回生。武蔵野音楽大学卒業後、同大学院修士課程修了。尚美音楽大学短期大学付属音楽教室講師時代にニッカ椿姫新人賞取得。イタリアのミラノへ2年間留学。1998年、團伊玖磨作曲「夕鶴」をロシアで公演、喝采を浴びる。今年、丹波で合唱団「コーロ・ディ・マッジヨ」を立ち上げ、主宰。

—桜新町にある高級お好み焼きレストランの店内にてお話を伺いました—

#### ◆二人三脚の母を超えて華やかな歌姫に

—丹波にお住まいのお母様がご逝去されました

**足立** 79歳でした。丹波でもコーロ・ディ・マッジヨを立ち上げ、女性合唱団で教えることになっていました。月に1〜2回は帰省することになり母も楽しみにしている矢先でした。本当は母が音楽家になりたかったのですよ。ピアニストの道を諦めて小学校の音楽の先生になり、校長まで勤め上げた後はコーラスの指導をしたり、短歌を始めて自费出版したり、愛犬と整理整頓した黒井の家で一人暮らしを楽しみ、希望通り皆に迷惑をかけることなくあの世に旅立ちました……。

——立派なお母様だったのですね。

**足立** 父も教師（音楽専科）で音楽的環境が整っていましたが、父は私が小学6年生の時に亡くなったものですから、その後舅姑を看取り、苦勞しながら、そんな様子は見せませんでした。私と弟を育て、大学院まで出してくれました。

——ピアノストではないけれど母のプロになる夢を娘が叶えました。

**足立** ただ、大学卒業後は丹波に帰り音楽の先生になることが母との約束でした。でも、卒業後は更に勉強を続けたくて、学生時代から指導を受けていた大谷冽子先生のオペラ研究会に参加しながら尚美音大付



撮影・飯田研紀

属音楽教室で講師をしていました。これから先どうなるのかと心配ばかりで前途洋々とほども思えず悶々

とした日々でした。27歳になりました。そんな折、第3回ニツカ椿姫新人賞にチャレンジしてみないかと大谷先生に薦められ、また、勤めている学校を辞してのチャレンジを母に相談したところ、背中を押してくれて、運良く優勝することが出来ました。そして翌年1987年2月にオペラデビューを果たしました。バブルの最盛期で、企業では文化事業への支援が当たり前のコンサートが一杯あって、文化活動するには本当に良い時代でした。時代に助けられて次から次へとコンサートがあり遣り甲斐がありましたね。

——オペラに疎い者がインタビューしてすみません（笑い）。

**足立** いえいえ、芸術は個人の嗜好に寄りますもの。オペラは400年前にイタリアで誕生し、貴族や経済人などの芸術パトロンが支え、ヨーロッパやロシアで繁栄してきました。音楽ばかりでなくバレエや絵画などの芸術が上流階級から民衆に流れ、人々の日常生活に根付いてきました。だから日本でも柵に飾るだけのものではなく床に下して奥ゆかしさを取っ払い、もつと身近に楽しむ為にプロが近づき、聞いて下さる方達

も近づいてもらって喜びを深められたらいいなあと、それを理想にしています。もちろんそこには様式美を守った上での表現を貫かねばなりません……。――歌を始められたのはいつ頃ですか。

**足立** 最初はピアノでした。小2の時から中西覚先生（丹波出身柏高卒）に師事し、毎週日曜日に先生のご自宅がある西宮へ通いました。母の強い信念があったればこそですが、私も嫌いではなかったので休まずに通うことが出来ました。途中から声楽をやってみたらと先生に薦められて武蔵野音大の声楽科へ進みました。そこでは、笹倉強先生の息子さんと同級生でした。また、笹倉先生は母の先輩に当たるんですよ。



撮影・飯田研紀

――ご縁があるのですね！ それにしても小2から本数も少ない福知山線に乗って、乗り換えもあつて

の西宮ヘレッスンとは！ やはり子どもの好きという才能と子を支える親の熱意と信念がプロへの扉を開くのですね。

**足立** 不思議なものです。デビュー後は練習、練習の大変な毎日でしたが、ただ、この状態に甘えていいのかもしれない、1991年にはミラノへ2年間留学しました。

――海外のプロの方の音量は半端じゃないですよ。足立 「私は日本人！」 いろんな意味で痛いほど違いを感じましたね。イタリアで学生としての日々を過ごす中、日本人のオペラ歌手として何を勉強すべきか、改めて考えました。悩みながらも留学を終えて帰国し4年経った頃、團伊玖磨先生との出逢いがありました。歴代のプリマドンナが演じてこられた「夕鶴」のつう役を仰せつかり、等身大の日本人、鳥ですが（笑い）、その役に取り組んで1998年のモスクワ公演で幸運にも大好評を得ることができました。自分らしく歌い演じたことで自信にもつなりました。それまで歌ってきた西洋のオペラも、改めて自分の目で見、感じながら演奏できるようになれたと思います。

——日本女性の良さを歌い上げ、また自分らしく歌えるようになられた。

**足立** 男女同権の世界で頑張る母を見て育ってきました。音楽の世界では男女の違いがあつて当然で、女性らしさを如何なく発揮してこそ美しさが際立っていきます。男女それぞれの「らしさ」という力があつてのことで、男女の違いを崇め、互いの良い所を讃え合つてこそ成り立つ世界です。また、国の違いもそうです。優しさや強さ、気配り等は日本人女性の特徴そのもので、そのような特徴を表現できたらと願つて努力して来ました。

### ◆歌うことと育てることの楽しさを伴侶に

——ソプラノ歌手の醍醐味とは。

**足立** ソロシンガーとして人前で歌うことは生きていく実感があり喜びです。人様に私の歌を聴いていただけで自己満足的にも（笑い）最高のものがある。声楽家になつて本当に良かったと思います。小さい時は人見知りでしたが、最近では舞台の上からコミュニケーションが取れるようになりました。お客様の反

応や息遣いを一つの空間で共有し味わう喜びがある。コーラスの指導でも同じで指導者冥利に尽きます。

——東京でも丹波でもコーラスの指導をされているとか。郷友会でも去年の3月に「どんぐり会」を立ち上げ笹倉先生にご指導いただいています

**足立** 今また全国的にコーラスのチームワークアップが凄いですね。トップダウンではなくボトムアップで、専門的なことをするのはなく、一人一人の自分らしさ自分の魅力を出すこと、自分らしさを捕まえた時に素晴らしい力になります。コーラスのチームワークの良さは飛び出るのではなく丸くすること、本来の自分の声で表現すること、少しづつ皆が満足することではないかと思っています。そして、今頃になつてなのですが、両親からもらった教える側の喜びがあることも知りました。実は今年に入ってメンタルベシクスの勉強をしました。いろいろと挫折してきましたので、自分が出来ない時にどうしたかを教える側になつた時に考えることが必要でした。その結果、丹波に帰省する度に、母とのコミュニケーションがスムーズになりました。相手の話を聞いて聴いてあげるだけ

でいいですよね！

——自分の心を見つめ直すことで心が通じ合える、と。

**足立** 音楽を通してつくづく感じることは共感と気付きです。本を読んだり、いろんな方とお話をしたりで様々な気づかせてもらっています。いつも崖っぷちで（笑い）ゴールが見えません。毎日1〜2時間の発声練習。ライブでは何が起きるか分からないので、コンディションを整えるための抑制・節制した生活を送っています。

——やはり継続は力になるのですね！ 今後の抱負をお願いします。



**足立** おこがましいのですが、昔から丹波と東京の懸け橋になりたい、それが役目かなと考えていました。今それが実現できつつあるように思います。丹波との往復で、イイとこ取り（笑い）をさせていただいています。今日の取材では、

お二人の先輩から、私の方が元気をいただきました。

——お忙しい中、お時間を割いていただき有難うございました。

### インタビューの言

岡田昌子（人間関係士・元臨床心理士）

母とともに能力を磨き、プロの世界で自分らしさを模索しつつ飛躍され、今また両親の歩んだ教える道へと活動を拓げられています。華やかさと先生つぼさが同居した、気さくな素敵な方でした。今後の公演会を楽しみにしています。

上 高子（認定NPO法人アジアの新しい風理事長代行）

西洋文化の粹であるオペラ歌手として、日本人のアイデンティティとの狭間で葛藤があるとのこと。私もNPO活動で、世界標準と、日本標準の折り合いをテーマとしているため、お話が大変興味深かったです。ますますのご活躍を祈っています。

### 〈今後の演奏会予定〉

- ・平成26年11月21日〜27日イタリア・フィレンツェ一都市滞在ツアー
- 11月23日フィレンツェのボルゲーゼ宮殿内にてリサイタル
- ・平成27年1月13日神戸松方ホールにてリサイタル
- ・平成27年1月15日初台オペラシティーホールにてウイン・シュトラウス・フェスティバル・オケとの共演



特別レポート



## 丹波を襲った豪雨被害

国土地理院が撮影した市島町前山地区の山崩れ現場

8月16、17日に丹波市を襲った集中豪雨で、市内は広範囲な土砂崩れ、川の氾濫などがかつてなかった程の甚大な被害に見舞われた。61棟の家屋が全壊または大規模半壊、半壊し、中でも市島町は58棟に及んだ。同町徳尾で全壊した家屋で老夫婦が生き埋めとなり、夫（79歳）が死亡、妻（73）も重傷を負った。浸水家屋は1662棟（うち床上241）に上り、569カ所の農地、林地、河川、道路で冠水、崩落、土砂堆積などが起きた。また市島では寺院25カ寺のうち約半数が本堂の全壊などの被害を受けた。

今回の豪雨は局地的なのが特徴で、被害は市島町の前山、竹田、美和地区、春日町船城地区、氷上町幸世地区などに集中。また山林に近い多くの中小河川が決壊したり、せき止められて水路外に水を氾濫させた。

電気、水道、電話などのライフラインも大きな被害を受け、前山地区の土砂に埋もれた鴨坂浄水場エリアは、給水タンクなどで復旧したもの、一部地域は今なお通水していない。またJR福知山線は石生―福知山間が10日間に渡って不通となり、市島―福知山間の塩津峠を初め道路も各地で寸断されて、迂回通行を



水流で崩壊した前山川と国道175号の合流点にある  
八日市橋=市島町上竹田で



前山川が埋まり、激流が土砂や流木を押し流し民家を  
破壊した=市島町谷上で



本堂の中に土砂が流入した石像  
寺。市島地域の10力寺以上が被  
災した=市島町中竹田で

写真は丹波新聞社提供

余儀なくされている。(数字等はいずれも9月3日現在)  
丹波市はボランティアセンターを開設し、平日で  
400〜500人、土日曜は1500人近い人が救済  
活動に入り、9月4日に延べ1万人を超えた。また縁  
者、関係者などを含め広く義援金を受け付けている  
(10月31日まで)。

振込先は「丹波市豪雨災害義援金」(口座番号  
丹波ひかみ農協本店 普通00001290、中兵庫  
信用金庫本店営業部 普通0788048、みなど  
銀行柏原支店 普通3495108、ゆうちょ銀行  
00970161203171)。現金書留は郵送料  
無料(〒669-4192 丹波市春日町黒井811

市役所春日庁舎 福祉部生活  
支援課宛)。寄金には税制措置も  
ある。問い合わせは☎0795  
-82-1001(代表)へ。

(丹波新聞社 小田晋作記)

1階の天井近くまで堆積した土砂  
＝市島町鴨阪で



被災した鋳物工場の泥をかき出すボランティア。数百万円の炉2基が使用不能に  
＝市島町大杉で



山からの土砂は水路を埋め、集落の  
道路に雨水とともに流入した＝春日  
町稲塚で



土石流に押し流され2台の車が重なった＝  
市島町谷上で



天井近くまで入り込んだ土砂をスコップ  
でかき出すボランティア＝市島町谷上で



床下にもぐり込み土砂をかき出すボ  
ランティア＝市島町乙河内で

## 児童養護施設「睦の家」

萩野 祐一

(丹波新聞社社長)

明治初期、孤児の救済に生涯を捧げた人物が丹波にいた。大野唯四郎である。私財を投げ出し、自宅と大阪に児童施設をつくった唯四郎は、児童福祉の先覚者と言われている。そんな先人を輩出した丹波に昨年春、児童養護施設ができた。「睦の家」とい、青垣町の神楽小学校の近くにある。施設にいる30人の子どもたちは地元（注）の学校やこども園などに通い、地域の人たちと交流するなど、元気に過ごして



愛育堂のあった市島町石原に立つ石碑

いる。唯四郎の足跡を振り返るとともに、「睦の家」の日常や、児童養護施設が

抱えている課題を紹介したい。

唯四郎は天保10年（1839）、水上町上新庄に生まれ、23歳のとき、市島町石原の豪農、大野家の養子に入った。このとき、大野家はたくさんの借金があったが、唯四郎は、養子に入るにあたって持参してきたお金で返済した。

明治元年（1868）、初めて難民の子を引き受けた唯四郎は、明治8年、同志の協力を得て大阪に、今も運営されている児童施設を設立。翌9年、孤児救済の資金を得るため、4日間にわたって家財道具のせり市を決行した。親類縁者が「なんてことをするんだ」と唯四郎に詰め寄ったが、唯四郎はこう答えたという。「難民が群がり、浮浪児があふれている状況にあつて、暖衣飽食をむさぼることはできない。人間は人間として生きねばならない。それは、万物に対する愛念を実行すること。難民を救済するのは天地の恩に報いる道だ」。

明治12年、市島町の自宅に「丹波愛育堂」という施設が完成。私財をすべて整理した唯四郎は家族を親類に預け、自らは隣家に借り住まいした。賛助者

昨年4月に開設した「睦の家」



「睦の家」内の食堂

を募るための諸国遍歴で越前の永平寺を訪ねた際、大雪のため道に迷い、亡くなった。溪谷に転落したためと言われている。45歳。明治17年のことだった。唯四郎は、「私が今、まいている種は、百年たれば必ず見上げるような大木になっているはずで」と話していた。悲運の落命から今年でちょうど130年。百年以上が過ぎたが、唯四郎を輩出した丹波の地に児童養護施設「睦の家」が昨年4月に誕生した。

睦の家は、神楽保育園の跡地を活用して開設。朝来市山東町にある社会福祉法人「南但愛育会」が運営している。南但愛育会にとって2つ目の児童養護施設で、兵庫県内では30番目の施設という。睦の家の太田浩之施設長によると、児童養護施設に入所している子どもは全国で3万人ほど。6割近くが虐待を受けてきた子どもだという。

睦の家の定員は30人で、現在、3歳から18歳まで定員ちようどの30人が生活している。太田施設長は「本来、あつてはならない体験をし、傷ついた子どもが多いですが、施設では家庭の子どもと変わらず、子どもらしく過ごしています」と話す。地域の文化サークルに入っている子どももいる。地域の子どもや大人でつくる太鼓や童謡のサークルに入り、発表会にも出演している。

睦の家は、地元自治会に加入しており、夏祭りや秋祭りなど、地域の行事に参加。地域の清掃活動には職員が参加して汗を流すだけでなく、空き缶拾いなどには子どもも加わっている。福祉関係などの各種団体との交流もあり、施設で「ぼたもちパー



花見を楽しむ子どもたち



水遊びを楽しむ子どもたち

「ティー」をしたり、一緒に花を植えたこともあった。施設の近所で、子どもがイタズラをしたため、職員と一緒に謝りに行くと、「また遊びに来いよ」と声をかけられたそうだ。太田施設長は「地域の一員として見ていただいているようで、ありがたく思っています。地域の中に、子どもたちの大きな家があるというイメージを持ってもらえればと思います」と言う。お菓子や衣類、現金などの寄付もある。昨年12月には、「真っ赤なお鼻のトナカイ」という名前でクリスマス電飾が施設の玄関前に置かれていた。そんな睦の家だが、児童養護施設が抱えている大きな課題は、睦の家にものしかかっている。

それは退所後の自立だ。

太田施設長によると、原則として高校を卒業すると施設を退所しなければならぬ。そのとき、自立の支度金として支給される公費は8万円。親の支援が得られない子はさらに20数万円がもらえるが、合わせて30万円ほどでアパートを借りて生活しなければならぬ。このため、就職を希望する子は、寮のある会社での就業を目指すという。でなければ、生活が難しいからだ。

進学する場合は、親の支援を受けるか、それが無理ならば、受けられるだけの奨学金を受けることになる。進学は、一般家庭の子どもと比べて厳しい状況にある。

太田施設長は「退所後の自立支援は、切実な現実的問題」と言い、「そうした実態を含め、社会的にあまり知られておらず、偏見を生みやすい児童養護施設について正しく知っていただきたい」と訴えている。

唯四郎がもしも生き返ったならば、どんな行動をとるだろうか。

小南泰葉さん  
メジャーデビュー

丹波からメジャーデビューしたシンガーソングライターがいる。小南泰葉さん。インディーズから2012年に「嘘憑キズム」でEMIミュージック・ジャパンよりメジャーデビューした。大阪が拠点だったので、東京の私たちになじみが薄いかもしれない。最新作品は3月発売の「怒怒哀楽」。2014年8月24日には丹波の森公苑ホールで初の凱旋公演をした。

モーグルW杯出場は  
青垣の畑田萌香さん

福島県猪苗代町で開催された「2014 FIS フリースタイルスキーワールドカップ 福島猪苗代大会」のモーグル女子に、丹波市青垣町口塩久出身で福知山成美高校スキー

部所属の畑田萌香さんが初出場した。畑田さんは、上村愛子、村田愛里咲、星野純子の五輪日本代表らと寝食を共にする強豪選手。丹波の青垣から世界的レベルのスキーヤーが誕生するなんて驚き！

丹波の黒豆、  
世界ブランドに

丹波の黒大豆が日本貿易振興機構（ジェトロ）の重点輸出促進農林水産物「加速的重点プログラム」10件に選ばれた。今年度から香港や台湾などの東南アジアへ輸出されるという。世界のあちこちで丹波の黒豆が高く評価され、食べられるとしたら嬉しい。

丹波に大相撲が  
やって来る

大相撲が丹波で開催される。10月20日に丹波市制10周年を記念してのこと。開催場

所は市島町上田にある愛育館。場所当日は、午前8時に開場し、公開稽古、午前11時から人気力士とちびっこ相撲、それから各段力士の取組の開始となる。相撲甚句、初切り、土俵入り、弓取り式など内容も盛りだくさんだ。その前売り券が今発売されており、マス席は1万円を超えるものの、徹夜組も現れるほどの順調な販売状況らしい。

葛西選手のジャンプ  
スーツは丹波産だった

丹波市氷上町横田にミズノアパレルテクニクスはある。この会社は、ミズノ（大阪市）の100%出資の子会社。トップアスリート向けの1点物アイテムの製造を担っている。ソチオリンピックのスピードスケート、スピードスケートショートトラック、ジャンプ、コンバインドのユ

ニフォームなどはこの会社の商品。葛西選手や高梨沙羅選手もまたミズノアパレルテクニクスの商品を使っている。この会社、実はスポーツ界ではもの凄いハイテク商品製造会社で知られ、丹波が世界に誇っている会社なのだ。

やっぱ、今年も強い  
氷上高女子バレー

神戸で行われた県高校総体で氷上高女子バレーボール部が準優勝した。これで35年連続の全国大会出場。長きに渡って兵庫の代表の座にある氷上高校は大いに郷土を有名にしてくれた。ここでリベロとしてレギュラーの吉見海さんは市島中学の出身。吉見小学校3年生のときに「吉見少女バレーボールクラブ」に入部したと言う。残るは20数年ぶりに全国制覇を祈りたい。

（井徳正吾）



## 四国八八か所車遍路紀行

山本喜則（市島町）

以前テレビで見たスペインのサンチャゴへの巡礼路を歩く人々の姿に感銘し、いつか自分もと、独学でスペイン語の勉強を始め、その後友人とも検討したが、結局実現に至らず。国外が駄目なら国内ということでは、以来四国八八か所めぐりへの関心が強まった。三年前には車で四国を周遊した際、衝動的に足摺岬の三八番札所から三四番までを逆回りで巡ったこともあるが、当時はお参りの詳しい作法も知らず、いでたちも不十分だった。

遍路の目的は人それぞれで、よく言われる八八の煩惱を洗い流す境地には未だ達せず、宗教心が強いわけでもないの、あえて言えば、古稀の記念に何かにチャレンジしたかったのと、温泉マニアとして未踏の湯に入りたかったからである。当初は歩き遍路のつもりだったが、春にスキーで痛めた左膝に不安を抱えて



いたので止むなく車遍路に変更し、梅雨も明けた七月半ば過ぎに急に思い立って出発した。

一日目…前日、春日町国領で妹夫婦がやっている料亭辻判にて宿泊後、朝四時前に立ち、七時前に徳島の一番札所霊山寺に到着。門前の店にて白衣、輪袈裟、口ウソク、線香を購入（他に、頭陀袋、経本、数珠、納経帳、納め札等が必要）して身支度を整え、仁王門をくぐって本堂に向かう。早朝の為か参拝者も少

なかつたが、緊張しながら読経（開経偈、般若心経、御本尊真言、光明真言、御宝号、回向文）を済ませて



一番札所霊山寺と筆者



大師堂に向かい再度の読経。その後、納経所にて納経帳にご本尊の墨書きと朱印を戴く。以降は順調に廻り一七番（但し、一二番は時間の関係で翌日回し）まで終える。初日にしては上々のペースだが、疲労激しく、車中泊の予定を取りやめ、遍路宿に泊り、宿の主人や同宿者より情報入手。（立ち寄り湯…神山温泉）。

二日目…一二番と一八番から二三番まで。一二番焼山寺へは宿より約五〇分のドライブで後半は狭い山道だったが、早朝ゆえに対向車も殆んどなくスムーズに到着。二一番の太龍寺では突然の雷雨のためにロープウエーが止まり頂上にて一時間半の足留め。温泉を併設した道の駅にて車中泊。（薬王寺温泉、穴喰温泉）。

三日目…二四番から三五番まで。早朝に室戸岬に移動し、弘法大師修行の地といわれる御厨人窟に立ち寄る。高知周辺は以前観光しているのでひたすらお寺参りに専念する。（ホテル泊）（黒潮温泉、はるの温泉）

四日目…三六番から四三番まで。三八番金剛福寺は三年前に初めて遍路の空気に触れた懐かしい場所であり、心を籠めて読経する。（車中泊）（一本松温泉、臥龍温泉）。

五日目…四四番から五八番まで。四五番の岩屋寺では駐車場から本堂に至るひと気の無い参道を約二〇分歩いたがその間靈気を強烈に感じた。本堂周辺は千葉館山の崖観音に似ている。五五番南光坊では大師堂前に正座して読経し、その後涙を流しながら何かを語り合う中年夫婦の姿に心打たれる。(車中泊)(湯の浦温泉)

六日目…五九番から六九番まで。六〇番横峰寺は日本百名山の一つで西日本最高峰の石鎚山(八年前に登頂した)の中腹にあり、かなり細く険しい有料の林道を延々と走った後、駐車場から更に二〇分間の歩きで、中々の苦行。六六番雲辺寺への往復のロープウェイから讚岐平野の景観を楽しみ旅の疲れをしばし癒す。(車中泊)(琴弾温泉)。

七日目…七〇番から八二番まで。七一番弥谷寺は駐車場から本堂まで五四〇段の石段の登りだったが、朝の運動と思い一気に登る。七五番善通寺は弘法大師誕生地の聖地であり、広大な境内に圧倒される。(ホテル泊)(高松クレーター温泉)。

八日目…八三番から八八番まで。八四番屋島寺への行き帰りに壇ノ浦の景観を楽しんだ後、丁度正午に

八八番大窪寺に到着し満願成就の読経。境内は予想外に閑散としており、あっけない幕切れの感もあったが、ひとり静かに結願の喜びに浸る。夕方フェリーにて和歌山に移動。(ホテル泊)(白鳥温泉)。

九日目…早朝高野山奥の院に詣でて同行二人の遍路の旅を締めくくる。その後、丹波へ戻り一泊後墓参を済ませて帰路についた。

時期的に歩き遍路の人は少なかったが、足摺岬で出会った青年がスケボーを抱えていたのが今風で印象的だった。弘法大師・空海が四国霊場を開創して一二〇〇年目の年に無事念願を果たせた事を、これもお大師様のお蔭と感謝するばかりである。合掌。

(昭和19年、市島町中竹田新道員生まれ/現在千葉市美浜区在住)



## 役人の応対が柔らくなつたわけ？

形田恒夫（山南町）

皆さんの感覚で「十数年前から役人が少し優しく親切になつたような気がするが、どういう風の吹きまわしなのかな？」といった思いを持たれたことはないでしょうか。

役人が変わった!! その理由を私個人の経験も踏まえて考えてみました。かつて役人から「お国が決めたことだから、私に不満を言われてもどうしようもない」というような応対を受けたことはないでしょうか。役人は多くの場合、上から目線の言葉使いではなかつたでしょうか。こういったことについては当然の役人は「そんなこと絶対なかつたよ」と思われているかもしれない。しかし一般的に市民は申し訳なさそうに下手にでるような話し方をしますが、下手にでられると役人もついつい偉そうぶつた話し方になつてしまったのも当然であつたかもしれません。

それがある日を境に激変したわけです。

二十年前の平成六年十月三十一日施行の『行政手続法』が役人（以下、公務員）の行動規範の一つとしてスタートし、その日から公務員の一般市民への応対の変化が始まりました。行政手続法は一般市民にはなじみのない法律ですが、市民生活には色々と規制緩和の良い影響もでています。ただ公務員にとっては大きな変化をもたらすものであります。

行政手続法の骨子は五十年前に出来上がっていましたが、二十年前に突然国会を通過し、法律が施行されました。北海道庁を相手に、ヤマト運輸が小口配送業務の許可申請を、五年間未処理のまま先延ばしされたことに対し、「いくらなんでもやり過ぎだろう」と訴訟を起こし、ヤマト運輸が勝訴したことが一つのきっかけになつたようですが、更に諸外国には分りづらかつた悪評の行政指導を法律上明確にすることも併せて行政手続法が出来上がったようです。

行政手続法の何が公務員の応対を親切丁寧なものに変化させたのは何かを考えてみますと、

①裁判所が公務員のやり過ぎを違法と判断した。

② 行政指導の有効範囲を明確化した。

③ 公務員の行動規範を法律で制定し、公務上の行動に法律違反が認められた場合は、法律で処罰されることになった。

等々がある。それ故に、当法律施行前に国家・地方公務員に対し、その主旨と言葉使い、応対を親切丁寧にするよう指導が行われたものと思われまます。

ここで、官僚らが法律・政令等以外の行政執行時の抛り所であった「行政指導」がどのような法律になったか行政手続法第三十二条・三十五条を紹介します。

(行政指導の一般原則)

第三十二条 行政指導にあつては、行政指導に携わる者は、いやしくも当該行政機関の任務又は所掌の事務の範囲を逸脱してはならないこと及び行政指導の内容があくまでも相手方の任意の協力によつてのみ実現されるものであることに留意しなければならない。

2 行政指導に携わる者は、その相手方が行政指導に従わなかつたことを理由として、不利益な取り扱いをしてはならない。

(行政指導の方式)

第三十五条 行政指導に携わる者は、その相手方に対して、当該行政指導の趣旨及び内容並びに責任者を明確に示さなければならない。

2 行政指導が口頭でされた場合において、その相手方から前項に規定する事項を記載した書面の交付を求められた時は、当該行政指導に携わる者は、行政上特別の支障がない限り、これを交付しなければならない。

さてここで比較する意味で、行政手続法施行以前の行政指導という規制の実態の一部を案内致します。

(一) 中央省庁の官僚が作成した規制をともなう指導要綱で、通称は通達〇〇号として公布され運用されている。その影響力の大きさは法律と同一レベルの扱いであった。通達は立法院の国会を通過していないにもかかわらず法律がごとく運用されたのが実態であった。

(二) 通達の総数約一〇〇〇〇件以上とされ、国民生活には大きな規制となっていた。

(三) 結果として通達を発行する権利が天下りを生み、企業、業界団体と中央省庁の高級官僚の癒着が問題となる原因の一つでありました。

第三十二条と第三十五条の内容からも、従来の公務員の攻撃的な行動や上から目線の言葉使いを制限することができ、時折みられた「俺が法律だ」とか「役人をコケにすると次回立入り検査、許認可申請書の審査において仕返りするぞ！」といったトラブルは避けられるようになった。

行政指導は任意の協力が基本となり「従いたくない」と言えば強要できないこともあり、行政側からはほとんど規制はなくなっても同然となった。多くの許認可申請手続き等も市民の声を優先され、スピーディな応対となったものと思われる。

(昭和23年山南町生まれ／横浜市泉区在住)



(撮影：岡吉明さん)

## 生涯の趣味になった標語づくり

村岡 孝 司(柏原町)

田ステ女の生家近くの柏原町屋敷町に住まいする、いわゆる投稿マニアです。

短歌、俳句、川柳等をたしなむ人は多いと思いますが、小生は比較的短文で雑学と言いましようか、これといったルールもなく手軽、気軽に応募できる標語(スローガン)、キャッチフレーズ、ネーミング、クイズ、プレゼント、懸賞等々なんでもござれ……。

簡単な募集なら手当たり次第に応募する。サラリーマン時代よりむしろ忙しく感じるくらい充実した老後をすごしています。

四十数年前の昭和四十五年二十七歳の時、当時の水上新交通安全協会の交通安全標語の募集を知り、初めて挑戦いきなり入選、これに気をよくしてその後毎年応募するも落選が続く。その後様々なジャンルの募集が満載された懸賞情報誌が創刊されその中の特に手

軽にハガキで応募できる標語（スローガン）、キャッチフレーズ、ネーミング等を選び応募していましたが五〜六年鳴かず飛ばずで落選続き、家内からもハガキ代が勿体無いからやめるようにと言われる始末です。

数ある趣味の中でもこれ程費用が少なくて済み、適度に頭も使い呆け防止にもなり、強いては標語を通じて微力ながら社会に貢献できるものと思い、生涯の趣味へと考えるようになりました。

二十七歳からはじめた標語づくりも四十数年になります。最初のうちは低迷状態が続いていましたが次第



に入選、入賞の報が届くようになり少しは自信めいたものを感じるようになってきました。募集情報誌やインターネットを駆使し、全国各地の自治体や各種団体などの作品募集に応募していますが、どんな趣味でも全国にはその道のつわものが出て中々思い通りにはいかないものですが、粘り強く挑戦してきた甲斐もありお陰さまで近年では年間二十五〜三十回程の入選を果たせるようになりました。

招待される表彰式でライバルに出会うのも楽しみの一つです。これまで八百三十回を優に超える入選回数、獲得賞状枚数四百三十枚、この中には日本の公募では最大級の応募数を誇る「全国交通安全スローガン」で最優秀賞の内閣総理大臣賞（二度受賞）をはじめ、文部科学大臣賞、特命担当大臣賞、総務庁長官賞、警察庁長官賞、林野庁長官賞ほか、各都道府県の知事賞、各種団体の会長賞等。様々な賞を頂戴し、副賞には賞金、商品券、ギフト券、図書カード、特産品等が贈呈され、年金暮らしに少なからず潤いを得ているので昔応募に反対していた家内も今では応援をしてくれています。

表彰式の招待には家内同伴で小旅行を兼ねて出席するのが楽しみの一つになりました。

周辺からは趣味と実益を兼ねて素晴らしいと誉めて頂きますが、作句にはそれなりの苦心がいろいろあります。大学習ノートにしたためた試作、応募作の標語等がぎつしりと！ その数は四十数冊にも及びます。

作品を考えるときは比較的スムーズにひらめくこともありますが、長考を要しても満足がいかない場合は手持ちの「標語・スローガン辞典」、「標語の上手なつくり方」などの本を参考にすることもあります。最近はその時代の流れに沿った新しい感覚で斬新な言葉を取り入れた作品が求められていますので、電車内や地下街の広告ポスターからヒントを得たり、テレビコマーシャルやインターネットから流行の言葉を参考にすることもあり、どこか出かけるときはいつもペンとメモ帳は持ち歩くように心がけています。

また、作品を作るときに気をつけていることは、

▽過去の入選作品の傾向を調べる

▽分かりやすさ、読みやすさ、覚えやすさ

▽できるだけ命令口調は避ける

▽漢字とひらがなをバランスよく（ポスターに使用される場合がある）使うことなどです。

それに募集要項には、主催者側からの要望が必ず入っているのです、それらをよく理解して的外さないよう気を配ります。このようにして仕上げた応募作品が多数の中から選ばれ、それがポスターやチラシ等に印刷され、人の目にふれ、少しでも社会のお役に立つのかと思えば嬉しい限りであります。

新聞等の取材でよく今後の目標を聞かれますが、一応生涯入選回数一千回、賞状五百枚と答えています。今後この目標に向け健康に留意し残された人生を社会に貢献できるような標語づくりに費やすつもりです。

最後に八百数十回の入選の中から思い出と言います。どうか、代表的な作品をご紹介して失礼いたします。思い出に残る代表的な入選作

▽昭和45年 水上郡交通安全標語（初入選）

「お母さん 急がず握ろう 幼児の手を」

▽平成8年 時の記念日「時を守る標語」（最優秀賞）

「時を守る マナーを育てる 街ぐるみ」

▽平成16年 第29回全国育樹祭のテーマ（最優秀賞）

「萌える緑に ひろがる未来」

▽平成16年 京都産業会館の愛称（最優秀賞）

「きらっ都プリザ」

▽平成18年 第61回のじぎく兵庫国体スローガン

（最優秀賞）

「ありがとう、心から・ひようごから」

▽平成21年 全国交通安全スローガン

（内閣総理大臣賞）

「渡れそう 今なら行けるは もう危険」

▽平成23年 全国交通安全スローガン

（内閣総理大臣賞）

「行けるかな 渡れそうでも 待つ勇氣」

▽平成25年 函館市路面電車百周年キャッチコピー

（最優秀賞）

「二〇〇年の 歴史を乗せて 夢・未来」

▽平成26年 丹波市制10周年キャッチフレーズ

（最優秀賞）

「人かがやいて10年 夢きらめいて未来」

（昭和17年柏原町生まれ／丹波市在住）

## 最近の政治に思うこと

荻野 哲 男（柏原町）

最近今まで経験した事のない、という表現で気象情報報道されたり、事件や事故が知らされているように見えます。また今回、国民を二分するような集団的自衛権を行使出来るように、安倍政権はあの手この手を使って閣議決定に持ち込みました。どんなきれいな事を使って、戦争になれば、また戦争に参加すれば殺し合いになるわけです。

私の頭にすぐ浮かんでくるのは小学生の頃、日の丸小旗を振って、柏原の沖田と新井村の境にある挙田という広場で出征兵士のお見送りをし、兵士が戦死されて英霊となり、白木の箱で帰還された時も旗を振ってお迎えした事です。

国民は、天皇陛下の為に「海行かば、水漬<sup>みず</sup>か屍<sup>かばね</sup>」山行かば草生<sup>くさ</sup>す屍、大君の辺にこそ死なめ、かえりみはせじ」と歌っていました。お国の為にと命を落とした



人達は悲しい青春だったと思います。もう、しばらく戦争が続いていたなら私にも召集の赤紙が来たと思います。

今は戦争を知らない人が日本の国の舵取りをしようとしています。二度と国民が悲しい思いをしないようにして欲しいものです。これからの安倍政権は自衛隊を国防軍とし、予算をつぎ込むものと思いますが、それより福島原発を収束するように努力する事や三陸地方の復興の遅れに力を入れて頂きたいと思います。

浪江町の海岸には津波で打ち上げられた漁船が五〇隻以上が手つかずのままです。このまま放つて置いて良いのか、つくづく思う今日この頃です。

(昭和11年柏原町田路生まれ／18歳から50歳までアパレル会社(株)ニュースター)に勤務、退職後はコンビ二(ファミリーマート)を経営し、63歳で辞める)

## ドイツ・ポーランド・スイスを訪ねて

大野 芳 美(山南町)

昨春秋ドイツ、ポーランド、スイスを旅した。夫が結婚前一九七四年から約五年駐在したハンブルクを訪ね、お世話になった方に御礼を言う事が目的でした。併せ、私の知人も尋ねた。

◇ハンブルクー代理店訪問と元同僚との再会―

夕刻ハンブルグ到着後、港を見下すホテルへ。途中黒人デモの集団が見え、運転手さん曰く、北アフリカからの人達が移民を求めるデモで、日常化していると

の事。  
アルスター湖畔の閑静な住宅街にあった会社と、共同出資欧州拠点として一時期販売会社が設立され、この会社の一室で勤務した。この代理店とは、ほぼ四六年取引関係が継続し、担当で関与した夫にも嬉しい事

で、元上司の方のリーダーシップで相互信頼関係が築けた御蔭と常々言っている。社長、担当役員に丁寧に迎えられ、工場案内や担当の方の現況説明があった。



欧風日本食レストランで、皆さんと夕食を取り、翌々日は、来日時、我が家に一泊されたご夫婦に、港の近くの魚料理レストランに案内され当時の話と食事を楽しんだ。

元同僚女性にも会えた。夫、入社直後一九六八年から彼女が約一〇年前に退社するまで、常に良き仕事上のパートナーであったとの事。ハンブルク三日目の夜、再会を祝し会食。彼女から当時の写真アルバムを贈られ、お互いに変わらないねと懐かしんでいた。翌日午後、三人で約二時間半のハンブルク

港巡り。其の後メールでは是非クロアチアと一緒に誘われ楽しみにしている。

夫は、アルスター湖畔の元事務所やアパート、市庁舎、倉庫街等を案内してくれた。

#### ◇ベルリン

列車で、ベルリン駅に到着。ホテル投宿後、歩いて観光客で賑わう統一ドイツの象徴のブランデンブルク門へ。門前から東へ延びる大通り、「菩提樹の下」と言う意味の「ウンター・デン・リンデン」通りを散歩。夫が学生時代ドイツ語講読でこの壁がテーマの悲しい物語を読み、この界限を訪れたいとの想いと、又知人（故人）が、流暢なドイツ語で熱唱されていた「菩提樹の下」の光景をゆつくり楽しみ念願叶った様子。

#### ◇ポーランドの美しい都クラクフとワルシャワ

部屋からヴァヴェル城が一望出来、眼下にヴィスワ川という好立地の静かなホテル。夫の知人の案内で、ヨハネ・パウロⅡ、コペルニクス等の学んだ歴史あるヤギエウオ大学、城や教会、ユダヤ人街等を見て廻り、

観光客で賑う中央広場の近くで、ジューレック、ピエロギ等、地元料理の味を楽しんだ。翌朝、岩塩の採掘地、ヴェリチカ岩塩坑に案内して頂いた。地下通路を降りて行くと岩塩で出来た様々な像、礼拝堂、博物館らしき一角もある想像以上の歴史遺産であった。翌日、ワルシャワ市内観光。シヨパン博物館、美しい町に、そして若い人達の流暢な英語に感動。中東欧の入り口としてのポーランドは、最近脚光を浴びており、訪問をお勧めしたい国の一つである。

◇フライブルクの知人を訪ねて

ワルシャワからフランクフルト経由「黒い森」の西部の大学の街フライブルクに到着。日程変更で急遽予約したホテル、大聖堂ミユンスターの石畳広場前のレストランの二階の宿へ。急な日程変更を受け入れて下さった知人に連絡しホテルで再会、夜は彼行きつけのイタリアレストランで夕食をとり、話が弾み楽しい時を過ごした。

翌朝、前の教会の鐘の音で目を覚まし、窓外のロマネスク様式とゴシック様式が混在した荘厳な教会に感

激。大聖堂前広場では、午前中朝市が立ち、近郊農家の新鮮野菜、果物、花、加工肉製品が並び、浮き浮きする様な光景でした。街の中心から徒歩一五分の高台にある知人宅を訪ねた。日本の掛け軸や屏風、杯のコレクション等、和洋が見事にマッチし素晴らしいインテリアであった。彼は絵も上手で、ドラムを叩く粹人でもある。夜は、フライブルク大学で独日文化協会の日本紹介コンサートを鑑賞。日本人女性の素晴らしい演奏・歌唱と女性がドイツで活躍されている姿に感動。

翌日は、黒い森最大の湖ティティゼーに、彼自慢の白いポリシエで案内頂いた。アウトバーンを走り、沿道の光景を満喫。季節柄、森に囲まれた湖は、ボートに乗る人も少なく静かでしたが、対岸は、保養地で賑わっていた。私は名産品のカッコウの時計を買い、夫は子供の頃から憧れていた念願の「ハット」を買い、似合うと言われ満足気。夜、元サッカー選手



の日本人オーナー経営の和食レストランで食事。三人とも美味しい日本食に大満足。

◇ミュールハイムの元ドイツ人上司との再会

夫のハンブルク時代の現地上司で、長年の友人。数年前に、賑やかなハンブルクを離れ、フライブルク近郊のフランス国境に接し、スイスにも近い、温暖なドイツ南部の静かなミュールハイムに転居。地元の人々を楽しみ、近隣の町や近隣諸国へ愛車ベンツを駆り訪問されている。ご夫妻には、夫駐在中は、家族同然にお付き合い頂いていた様である。



ご夫妻にフライブルクのホテルに迎えて頂き、途中教会に立ち寄り、フランスと国境をなすライン河の橋を渡り、フランスの小さな街のご夫妻行きつけのレストランで昼食を頂いた。夕食前にお宅を拝見し、お二人が愛飲されているワイ

ナリーに案内され、ワイン数種類を試飲した。其後、ご夫妻行きつけのレストランで歓談、美味しいドイツ料理で、当時を懐かしみ話が弾んだ。

◇チューリヒの知人を訪ねて

列車でチューリヒへ。ホテルで迎えてくれた知人と、早速彼の愛車ボルボを駆ってチューリヒ近郊の北部国境にあるラインの滝へ。幸い晴天で、滝の飛沫がくつきりと虹を描きだしている様は、見事なものでした。



翌日、チューリヒからベルン経由ビスプで下車し、バスでサス・ファイの溪谷を縫い山頂に向う。昼時、小学生の集団がバスに乗って来た。自宅に戻り昼食を取る為との事。アルペンの山頂にバスで上り、山肌にブドウ畑が張り付く様があり、山頂の雪渓が迫りくる雄大な光景に感動。山頂の街を歩き、シーズンオフで観光客も少なく、人々の静かな営みを垣間見

る事が出来た。山頂のレストランで近隣のワイナリーの赤ワインを頂きながら昼食。バスで上った道を下りながら、高みから、下界の光景を見るのも絶景だった。

三・一一の地震、福島原発のお見舞いを受け、スイスでも原発核廃棄物問題は検討されており、地下一二〇〇m迄掘削した様々な場所を検証後、三カ所が検証評価対象となつているとの事。地元の反対などもあり、最終処分地決定迄一〇年近くかかり、地下壕ができるのは二〇五〇年頃と言われているとの事である。

#### ◇おわりに

今回、知人との再会の旅で、優しい心遣いに触れ、温かい思いを頂いた。傘寿前後の引退後のお三方が、其々毅然とゆつたりと人生を愉しんでおられる様は、私達のこれからの生き方を示して頂いた様に思う。この旅でお会いし、お世話になった方々、再会の労を執つて頂いた私の元上司や友人に感謝です。其々異なる分野の方々と交流出来、非常に有意義で、贅沢な時を過ごせ満足な旅でした。

(昭和23年生まれ、山南町／元会社勤務)

## 丹波人の東チベット見聞記

徳田 八郎衛 (柏原町)

昨年はスイス、今年は東チベットという丹波以上に峻嶮な山地での営林の苦勞を聞きました。正確には中国雲南省北端の迪慶チベット自治州香格里拉県と徳欽県です。だが本稿では林業談義は割愛し、メディアが触れない話題を記します。ここは私が半世紀前から訪れたかった願望の地。一九五九年三月、ダライ・ラマ14世のインド出国を中国に遠慮する日本メディアが小さく扱ったのに対し、海外メディアが一斉にチベット特集を組み、中国軍のチベット解放の実態や歴史・文化・地理を解説してくれたのが動機となりました。

それによるとヒマラヤ山脈の峠を越えてネパール、ブータンから入れる中央チベットよりも、横断山脈に遮られ南方からの出入りが困難な東チベットの方が未知の世界です。その後、ラサ周辺は鉄道や航空機で訪問可能となりましたが、当地へは昆明から3日もバス

を乗り継がないと入れません。世界遺産指定を受け、ようやく数年前、香格里拉県に空港が開設。

英文でしか読めなかったヒルトンの「失われた地平線」の完訳が新潮文庫から刊行されたのも同年秋。その舞台は明らかに、山また山の当地でした。

## 1 消され行くチベット文化

北京で統合政策（漢化政策）を推進するエリート官僚たちは「日本の高校生でも李白や王維の詩を誦じるのに辺境の国民は詩聖の名も知らない」と嘆き、当地の壮年は「チベット文化を知るのは我々四〇代以上の世代だけ。三〇代以下はチベット語を話せても読み書きできない。今の児童は小1から県庁所在地の全寮制学校で生活させられるから話せないし、漢人として育てられている」と憤る。どちらの主張にも言い分があります。芦田小や遠坂小が統廃合されてバス通学になるならまだしも、親から離され英語で教育を受けるとなれば、どんな騒ぎになることやら。

当地ではウイグル自治区や中央チベットほどには官憲と民族文化維持との闘いは激しくありません。峻嶮

な山地では厳しい監視が難しいのか、開豁地域と違って谷間や天空の村には漢人の移住も少ないためか、寺にも住宅にもダライ・ラマ14世の写真は掲げられ、若き日に14世を国境まで護衛した戦士も、剣を抜いてその功を語ります（写真1）。村の共産党委員も日の出前の聖山礼拝は欠かせませんが、次の世代ではどうなるか？



写真1 ダライ・ラマ14世の元衛士

## 2 日本語学習への圧力

当地の人々は、チベット人も漢人も日本人には友好的でした。とはいえ習政権主導の全国的な反日運動の

中で、公的教育機関や専門学校での日本語学習は無事に行われているだろうか。私の最大の関心事でした。幸い露骨な嫌がらせはないものの、恒例の「日本語スピーチコンテスト」は、どこでも「自粛」していました。これが日本語や日本文化の学習自粛にまで至らないかと案じています。

ところが大型書店の政治経済コーナーで反日書籍を探しましたが北京等と違って見当たりません。「売れない本をいつまでも置くのは損ですから。日本の書店も同じでしょう？」とのことでした。一方、韓国との連携を訴える本は多数ありました。これは売れるのか？

### 3 不思議な中国製大型車

中国製のバスもトラックも度々無料の給水場で停車し清浄な山水を後部のタンクに給水します（写真2）。



写真2 ブレーキに冷却水？



写真3 聖なる梅里雪山へ五体投地

ブレーキには水が必要で、まめに給水しないとブレーキが効かなくなるとか。平原地域では見られない風景です。

一か月悩まされた微熱が高度四三〇〇メートルの高地では一挙に消え、現地青年に倣って聖なる梅里雪山（雲南省最高峰、六七四〇m）に五体投地を繰返すと（写真3）腰痛も消滅するという不思議な秘境でしたが、一番不思議だったのは、このブレーキ給水でした。

（昭和13年満州奉天市生まれ／柏原町出身、浦安市在住／（財）平和・安全保障研究所 客員研究員）

# 首都直下地震に備えて

片瀬 範雄（市島町）

## 一. はじめに



六四三四名の尊い命を奪い、阪神間、特に神戸の街を壊滅的に破壊した、あの忌まわしい阪神・淡路大震災から既に二〇年が経過しようとしています。

その後、日本列島は地震の活動期に入っており、平成二三年に発生した世界で四番目のマグニチュード9という巨大な東日本大震災の悲惨な様子は、既に先輩諸氏が本誌に寄稿されているとおりです。

神戸の時、私は神戸市職員として、被災した市民の皆さんと一緒にインフラの復旧・復興、そして生活再建に携わった体験から、人知では避けられない自然災害に対して、命を守る、家族を守るために、事前に備えることの大切さを訴える語り部活動や被災地の支援

などを行っています。

神戸の体験や東日本の復興の支援に取り組む中から学んだ一端を書くことで、三〇年以内に発生する確率が七〇パーセントと言われる首都直下地震への対応の参考にしていただければと一文を認めました。

## 二. 首都直下地震とは、そして事前の備えは

地震は二つのタイプがあり、プレート型であった東日本大震災と直下型であった神戸の地震とはかなり異なった点もあり、それぞれ適した対応が求められます。

揺れる周期は直下型の場合は〇・一秒から二秒程度と短く、ガタガタという揺れ方で、木造家屋や低・中層のビルや学校、土木構造物に被害を及ぼし、一方、プレート型は二〜六秒程度と長く、東日本の時に皆さんが体験されたようにユツサユツサとした揺れ方がいつまでも続き、高層建物により大きな支障を与えます。また石油タンクなどはスラッシング現象が生じ、十勝沖地震の時は火災を起こしています。

首都直下地震の大きさは、神戸の時と同じマグニチュード七・三と予測されており、地震エネルギーは、



大津波を発生させた東日本の約千五百分の一くらい小さいのですが、皆さんがお住まいのごく近くを震源とするだけに、直接構造物に地震動が伝わるのです。直接構造物に地震動が伝わるのです。従って津波対策もさることながら、首都直下地震に備えて減災するために次のことが大切と考えます。

一点目は、家の耐震化ですが、昭和五三年に宮城県沖地震があり、それを契機に昭和五六年に耐震に対する建築基準法が大幅に改正されています。神戸の時の激震地域においては、この改正以前に建てられた家の倒壊率は五〇パーセント近くあったのです。

それら倒壊した家は、戦前から建っている日本古来の木造瓦葺きで縁側の広い住宅や戦後の材料不足の中で建てられた住宅、そして昭和三〇から四〇年代に都市化が急速に進む中、マイホームとして手に入れた採光や外観を重視した建売住宅などが壊滅状態でした。

死亡原因は、家の下敷きとなり八三パーセントの方が圧死や窒息死され、倒壊した家の柱や梁に挟まれ救出出来ない中、直後に発生した火災のため、家族の眼の前で意識があるまま無念な焼死を遂げられた方が

一三パーセントおられるのです。従って家が倒壊しなければ九六パーセントの方は犠牲になることは無かった可能性があります。

皆さんの多くは、三〇から四〇歳代の昭和五六年以前に、ニュータウンに家を新築された方やマンションにお住まいの方も多いと思いますが、このような被害から免れるために、健康診断を受けるように一度家の耐震診断を受けて家族の命を守って欲しいと、震度七の中で被災しながら辛うじて命を失うことが無かった体験からお願いします。

結果、耐震性が不足する時は、面倒でも耐震補強をするなり、二所帯住宅への建て替えなどは如何でしょうか。それが出来ない時は、横揺れに少しでも耐え、壊滅的なグチャグチャな隙間の無い破壊を防ぐよう、学校にみられるような斜材を入れたり、分厚いベニヤ板で壁の補強をして景観は損ねますが、命を守る方法を考えて下さい。

地震の発生確立の予測は出来ても、何月何日との予測はまだ出来ませんし、空が急激に赤く染まるなどと予兆現象が取りざたされますが、何ら科学的な根拠は

ありません。

緊急地震速報の研究も進んでいます。現段階では遠くで発生する地震に有効ですが、遠くで発生する地震に有効ですが、私たちが住む直下で生じる地震にまだ対応できないのが現状です。

倒壊家屋の下敷きになった人は、ドーンと言う音を聞くと同時に、数十センチ放り上げられ、あつと思つた瞬間、家の下敷きなつていたので。

プライバシーも無い、食事は毎日パンと弁当のみ、毛布も無い、水が出ないと下水道の機能は無くなり、トイレは使えない、体の悪い方に福祉事務所も無い、そんな過酷な避難所に数ヶ月も生活することを逃れるために耐震化の重要性を認識して下さい。

二点目は、東京の地盤を見た時、武蔵野台地の比較的堅固な地盤や隅田川や荒川沿いの三角州など元々は沼地や農地が人口集中に伴い宅地化された土地、海を埋め立てた土地などがあります。武蔵野台地を除き、六甲山麓の扇状地で阪神高速道路の橋梁を倒壊させ、多くのビルや木造家屋を被災させた地域の地盤と似通った部分があり、被災の恐れが大了。また河川

を埋め立てた土地に建つビルが、液状化により倒壊したと同様の被災が発生する可能性は高いのです。

また、武蔵野台地に開発されたニュータウンで大きな谷を盛り土して出来た土地は、地すべりが生じ、斜面に被害が生じる可能性があります。

ただ、家が建つたまま地盤の補強に莫大な対策費用をかけても効果が薄いと言わざるを得ません。しかし家を耐震化しておけば家は傾いても命を失うことは無いでしょうし、建て替えられる際に地盤の地震対応を考えられては如何でしょうか。

三点目は、家具の倒壊やテレビが飛んできて直撃され亡くなる事例があつたことも参考に、家具の固定や、家具が倒れ出口を塞がないよう使いやすさを優先しないことも命を守ることにあります。

四点目は、枕もとには情報や暗闇の不安感を取り除く携帯ラジオやスマートホン、ガラスの破片で足を傷つけないようスリッパを置くなど、負担に感じない簡単な日常の備えも大切です。

五点目に非常食の準備ですが、非常食品の使用期限を気にするより、日ごろ食べている保存の効く餅や

ソーメン、ラーメン、チーズやソーセージ、数本のペットボトルなど少し多めに買い溜めをした備えの方が気分的に楽かと思えます。

直下型地震の被災地域は、東日本のように広域では無いので、道路などインフラの耐震化がしてあれば、数日辛抱すれば食料は届きますから、買占めパニックに陥らない心構えも必要と思います。

### 三、不幸にして地震に遭遇したら

東京の街を歩きますと、まだまだ路地に面して古い長屋や木造アパートが連続している様子を見ます。関東大震災の時、犠牲者十万人余の九割は火災旋風で亡くなられており、今回の予測でも火災旋風の犠牲者が多いと警告が発せられています。

神戸の時は震災当日だけで百件以上の同時火災が発生しており、水道も途絶する中、消防力では対処できませんでした。原因は通電火災と思われる電気関係もあります。ガスは震度五を感じてガスを止める装置がついています。電気は逆にすぐに通電するような回路が私たち使用者の要求で整備されています。倒れた

ストーブや金魚鉢から当然出火の可能性はありますから、家を離れる際は絶対ブレーカーを落とす、風呂の水を貯めておいたり、消火器を備え初期消火に努め、折角耐震化した家を火災から守って下さい。

次に、六百万人ともいわれる帰宅困難者の問題が大きく取沙汰されています。災害時の連絡の有り方について家庭内で事前に話し合いをしておき、伝言ダイヤル「一七一一」で安否確認を行い、余分な電波を発しない、鉄道駅に集中することや車を使わない自粛した行動も要求されています。

そして、まだ揺れが大きい時に大きな重たい非常持ち出し袋を背負って逃げるより、布団を被りとにかく安全な所へ一時避難をする、揺れが収まってから耐震化した住宅に帰り、大切なものを持ち出せば良いと思います、あわてずに行動する心の備えも大切です。

以上いろいろ書き連ねましたが、発生確率が高まる首都圏において生活される方々が、事前の備えを拡充されるよう、そして万一被災しても自律した被災者になっていただくことをお願いし、拙文を終わります。

(昭和18年生まれ、市島町出身／元神戸市職員／神戸市在住)

## P 国の電気通信網計画

前田 武彦（春日町）

昨今、路上でも車内でも、人々は携帯に夢中である。私は、車内でもほとんどの乗客が黙々と指を動かす光景に異様さを感じられ、そして携帯各社のその普及への凄まじい競争と電波網の発達に、ただ驚くばかりである。

かくいう私も、実は現役の頃の遙か昔、P 国の電気通信網計画に係わったことがあって、ドイツの教育制度に「してやられた」という苦い経験を被ったのである。しかも、ドイツ、日本ともその教育制度、環境は少しも変わっていない。P 国の J I C A 事務所に赴任し、技術協力を担当した時のことである。

その頃、N T T の K 専門家を中心に郵政省、K D D などの数名の専門家グループにより P 国の国家電気通信網の開発調査が進められていた。その内容は、P 国の電話設備を整備近代化するもので、当時の概算見積

もりで百数十億円の円借に繋がるものであった。その頃の途上国の電話交換機はアナログ方式でデジタル方式に変換移行しているときで、日本の技術は、特にデジタル交換機は世界の最先端をいつていると評価を受けていた。電話交換機などは一旦据付けられると、そのメンテナンスに同種の部品、機材が使われることになり、長期に亘って、貿易上有利になるわけであった。従って先進国、特に日本とドイツは自国の製品の世界普及に鎊を削っていたのである。

そのやり方は、途上国に対しては、援助により通信の国家整備計画の作成に技術協力し、借款を供与して製品の浸透を図っていくというものであった。

P 国には日本の電々公社に相当する政府機関があり、その総裁（元軍人で P 国大統領の信任が厚かった）は大変な親日家であった。だが、局長クラスのテクノ官僚はほとんどがドイツ留学組で、当然のことながらドイツシンパであった。彼らは、日本の援助により P 国内の電話設備が日本式に組み変ってゆくのを快く思っていなかった。ことあることに抵抗し、日本方式の導入を阻止し、ドイツ方式に変更しようとしてい

た。その頭目はA計画局長であった。いかにも鼻っ柱の強い強情な人物であった。

これは、ドイツの国際協力のうまいところでもあり、ドイツはまずその国の法律、制度にのっとったドイツ中等学校を設立し、優秀な現地の若者をどんどんドイツ本国の大学に留学させていた。まず教育から協力していくのである。留学した彼らはドイツの若者と友人となり、優秀な彼らは帰国してP国の中枢部に入って行き、生涯ドイツシンパとなり、ドイツと良好な関係を保って行くのであった。少ない経費で強力な親独派を育てているのである。

一方、日本はどうかといえば、日本の受験教育をそのまま持ち込み、勿論現地の就学児童は受け入れられない。日本人学校を終了しても、当然現地国の資格は得られない。極めて閉鎖的で、多感な時代の青少年の絶好の交流の機会を断っているのである。

私は、現地に現在のような日本人学校を開校するのではなく、現地の法律、制度に基づいた日本学校を設立し、帰国時（進学、就職）に不利のないよう、法的整備と受け入れ体制を整えるべきであろう、と思う。

ガラニイ語、ケチュア語、スワヒリ語、タガログ語等々を話せるような子供達が学べるような教育制度の方が国にとつて有益、と思うのであるが。

ところで、数年に亘った調査は最終段階になり、P国側の局長クラス十数名を日本での研修に受け入れることになった。ところが、彼らは約束の期日になっても日本へ出発しようとしなかった。日本のJICAはもとより郵政省、NTTなどが迷惑を被ったのは言うまでもない。

私はK専門家とP国公社の総裁を訪ね、「P国が一方的に研修員の訪日を中止するのは遺憾であり、日本の関係機関は大変迷惑を受けている」旨を伝えた。

総裁は「知らなかった」と大変恐縮し、私の眼前で訪日予定の局長達を呼びつけ「どの飛行便でもよいから今日、明日中に出発しろ」と激しく怒鳴りつけた。

総裁の前で直立不動のA局長の足は震えていた。そして、局長連中は慌しく日本へ出発して行った。

だがこの案件は、日本との円借の交換公文直前に、ドイツからP国にとって有利な借款条件が提示され、

技術的経済的に日本の方が優れていたにもかかわらず、彼等によって又もや抵抗されひっくり返された。日本が作成した国家電気通信計画はほぼドイツに採用され、日本の担当分の事業は縮小され、円借供与額は大幅に減額された。

春秋の筆法をもつてすれば、経済協力も教育によって左右される、ということであろうか。

(昭和15年、春日町生まれ／前 緑資源公園アジア地域砂漠化  
防止対策調査団団長)



(撮影：岡吉明さん)

## 折々の記(11)

井本義一(柏原町)



○歩き始めて77年余、昨年5月より右手杖との三本歩行を始めだが、右手に力が入り、痛い左足に余計な負担をかけているような思いが先だつ日々。どうも

しつくりせず積年の二本足のバランス歩行に10月半ばから戻して現在に至る。

週5日乗車駅まで30分の歩行時のみの両足ふくらはぎのしびれ痛みにも慣れてきた。問題はリュック(約3キロ)を背負って歩くと足と腰が連動するのか、若い正常時とは違って腰の曲がりが大きくなり、人目が悪いのでこれを正そうとするせめぎ合いの日々だ。医師からは曲がつて来た腰を無理に伸ばし過ぎないように、と注意されておりこの案配が難しい。杖は万に備えて左右の手に持ち替えもち替え歩いている。駅の

下り階段では必ず使用している。

腰の曲がりには正常時には考えられない一連の動作に、鬱陶しく、もどかしさやつらさを実感している。なんでもない布団の上げ下げや、洗面所の床下敷物を足が上がり引つ掛ける、カーテンの開け閉め時、掃除機をかける時など……。「曲がってなければなー」嘆きの日々だ。歩幅も左足ふくらはぎの筋を痛めている関係で、バネのある歩きが出来なくて、どうしても左右一歩一歩が小さく速足が不能となった。

負け惜しみ、諦観をもつての遅い歩みも、この年になると、もう急ぐことはないのだと自分に言い聞かせて、適正スピードを頭に入れて歩いている。特に急ぎ過ぎると膝とふくらはぎを痛めそうで怖いのだ。自分の安定スピードを継続するために、一歩一歩痛みをなだめるように「丁寧に、静かに、ゆっくり」と心の中で呪文を掛けつつ歩いている。習慣になった。もう一点は腰の曲がりには、下方前視界が良好、転倒防止に体勢を整えやすいと発想を転換した。転んで骨折して、寝たきりには絶対ならないぞと自分に誓っている日々だ。

昔バタンキュー、今ピンコロで何時まで続くか判らないが、心の持ちよう（つまり気持ち）で、痛みや苦しみに耐え続けることを学習している昨今だ。それにしても、強いのは人間（自分）の身体（特に足）だと認識感謝。今日パソコン遠隔操作男逮捕。（25・2・10日）  
○八十路を前にして諸先達の含蓄深い言葉Ⅱ文章が頭から離れない。その①病気に對しての心構え。「……病気も健康の対極ではない。病気になるかどうかの危ういバランスの中で、健康に留まっているに過ぎない。健康は病気を、若さは老いを、寿命は死を内に含む。そこを考えて生きれば、いざという時に人生をポジットイブ（積極的・前向き）に生きられるのです……」が  
ん研究者の黒木登志夫氏が、20年2月22日付朝日夕刊「人生の贈りもの」で発表された。  
加齢とともに、ちよつとした病気にもクヨクヨする気の弱いわたしは、このスタンス（姿勢）に100%納得、その後折に触れて思い出して開き直り立ち直り、現在に至るも大病もせずに（明日のことは不詳ですが）過ごさせて頂いている。

その②社会の動きについての考え方。「……確かに

自分は日本が好きだし、日本人としてのアイデンティティー（自意識・独自性）を持っている。代表監督として日の丸を背負って戦った経験もある。でも本質を見れば、尖閣問題もばかっているなど。お互いに固有の領土と言うけど、いつから固有なのだと。地球の歴史46億年を460メートルとしたら、ホモサピエンス（人類）の歴史20万年はわずか2センチだよ。……この問題でけんかするか、話し合うしかない。じゃあ戦争をするのか。私はしたくない。……地球を救いたいとか、人類を救いたいとか、そこまでは考えていない。自分の3人の子供の時代まで争いを残したくない。いい社会、いい地球を残したいと思うだけ。子供たちのためと考えると、どんな問題でも答えはシンプル（単純）に出る。例えば原発もそう。何が次の世代にプラスになるのですかと。……「サッカー前日本代表監督・現中国の杭州绿城チーム監督岡田武史氏が、25年1月9日付朝日インタビュ記事「中国サッカーとともに」で。これを読んで、今の両国の我（国）欲の強さは個人のそれと比較すべくもない中での、確執の行き着く先はどうなるのか？ 例えば両国艦船の未来永劫に続

くと思われるせめぎ合い費用ロス（無駄使い）資金を、両国国民の幸せのために使うといった発想の転換を出来ないものか？ 岡田氏の言われることを両国の為政者はどう受け止めたであろうか？ どうせ言っても詮無いことなのだろうか。また昭和の戦争時代のように、こうした問題を自由に議論できない世の中にはなつて欲しくない。何が大切で何を優先するか首相T P P交渉参加表明の今日。（25・3・15日）

○石原裕次郎と同年のわれわれより早く偉大な大鵬が1月19日、72歳で逝った。彼らの大口マン（物語）とは雲泥の差だが、八十路を前に私の小さなロマンも終章入りを実感。「もう（終章に入ったか）」「まだまだ」の考え方、気合の入れ方を選択（チョイス）する昨今だ。4月12日（下記高校同窓会）「まだまだ」で臨む。懐かしの友垣と相見（まみ）える喜びをこれからも続けたいと思う。（以下ハガキの文字数で書けなかったことを補記する）誰もがそれぞれのロマンを歩む、あるいは「持つ」と言うべきだろうか。悔いのない完結に向けて自分しか出来ないことを日々積み重ねたい。「1・23日記」4月10日～15日の柏原は概して寒かった。



墓参と①中学校同窓会（11日）②高校同窓会（12日）  
③兄弟会（13日）に帰郷。①は小松君に声かけを依頼して、田舎家で男友4、女友6名の11名で。あの63年前の敗戦後の復興に無心に突っ走ったあの頃の顔、顔を鮮やかに思い出し、集まってくれた温かい友情に故郷を実感した。

②喜作にて5回生卒後60年（還暦）記念パーティーで出席率38・6%（案内出状223、出席86名）の大盛会だった。犬、亥年で26〜27年にかけて八十路へ突入年代だ。敗戦後のひもじく苦しい時代環境を乗り越えてきた私たちとしては、高出席率でないかと自賛した。藤原、矢田貝、徳義君、八木さん初め幹事諸兄弟のご労苦に深謝。

③は弟妹（男3、女2）達とその連れ合い3名を含む9名。幼・少・青年時代の兄弟をとりまくビデオ映像を観た後食事（飛鳥で）とカラオケ会へ。末弟進が作成した「井本家絆の会」を前に、玄関前と昼食会場での記念撮影、またカラオケの締めくくりは義妹（末弟の）マジックショーで大盛り上がり終わった。

①〜②を通して限られた時間、場所で心友、親友を

はじめ縁（えにし）の人達と、到底語りつくせない（特に②は事前情報を得て満席状態を予知）と判断して、親書（自称ラブレター・主文書の他健康管理資料などA4判コピー6枚同封）を、ポストマンも務め①で10通、②は20通（うち事前郵送分8通）加えて③に5通計35通自らの思いと生きざまを僭越ながら出状した。

②の出席ハガキを1月24日出状後、①と③の日程が決まり、4月帰郷初日の10日までテンションが上がればなしの連日であった。例えば乗換駅の階段やコンコースで足を捻り歩けなくなり、出席不能になるのではないかとか、一日一日の重さと緊張感が日々の生活に張りをもたらしてくれた。また今回の三つの再会で、わたしなりの元気を差し上げ、また頂いて帰ったことが嬉しかった。この熱い思いは故郷での絆の深まりに繋がるロマン（物語）そのものだ。誰かの「記憶×記録」絆（多ければ深まる）」の言葉を思い出した。考えてみると今回のわたしの身内を含むささやかな再会行動は、ホームベース（出生地）における関東水上郷友会活動そのものであったのではないだろうか？ また安倍総理の「日本を取り戻す」式に言えば「青春

を取り戻し」に帰った6日間でもあった。昔も今も変わらぬかいばらの八幡さんの三重の塔を見ながら、実家を出て本町通りを右折して、石田通り懐かしの谷書店で「山ざる43号」を求めてかいばらを離れた。今日  
帰京日。  
(25・4・15日)

○先月の帰省中に柏原町内のシャッター通り商店街から、一部歯抜け商店街への変貌を見て淋しさに輪をかけたのは、子供の歓声や泣き声を一切聞かなかったことだ。3月7日付丹波新聞に2年後の15年丹波市の人口推計1世帯当り人員で、子供数が1人を割り込み0・9人、25年は同じく0・5人とあったがその前兆なのだろうか。その他寒心に堪えない諸データは紙数の関係もあり省略す。

子供の日の今日、憲法を読み直し必要条文を手許の自修ノートに書いてみた。絶対にはやらない、考えるのも嫌な将来の戦争は、戦闘要員⇨子供⇨若人がいない場合のそれは一体どんな形になるのであろうか？ 次世代にかかわるわが国の行く末を考え見詰め直すには、近代が築きあげてきた国民主権や、基本的人權の尊重と平和主義を盛り込んだ「日本国憲法」に

学ぶこと。「やるなら今でしょ！」と考えたからだ。2カ月後の参議院選挙を前にして尚更。

85年版有斐閣小六法より、書き写した今喫緊の条文から①96条「改正の続き」②99条「憲法尊重擁護の義務」③13条「個人の尊重と公共の福祉」④19条「思想及び良心の自由」⑤9条「戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認」⑥「前文」だ。毎日が日曜日、時間は十分有。じっくり考えて選挙に臨みたい。(25・5・5日)

○高校同窓会后日談↓ささやかな郷友会活動。4月15日付当該記録の自称ラブレターの出状宛者中に、市島町出身(現在県下在住)で、同じ商業科クラスの村上(旧姓山川)迪男君が。当日都合で欠席、手渡し不能となっていたのを、当日事務局を仕切っていた徳義君が転送の労を。この15日、彼から部厚い封書を受信。お互いに気が合い勉強中は賑やかな談笑の明け暮れのみだったので、実に63年を経ての文通スタートとなった。正に感激あれ青春！嬉しい。徳義君に感謝。因みに彼は陸上競技部に所属していたと思う。

当時を回顧する書簡とともに、同封されていたのは10年余修業しているというてん刻(中国の古い文字を

石に刻む書道(一種)作品類。わたしの「義」の字を彫り込んだケース入りの石刻印と、扇型の立具(受け・竹材)①表は縦に大きく朱刻印が押印されていたのは「陰徳」の文字、その下右から左へ「陰徳」の書文字。左側縦に書文字による村上氏の号名とその下に刻印。

②裏面は真ん中に「陰徳」＝「隠れた善行」と説明が。わたしのために大変な手数を掛けて頂いた。とげとげしく、ますます格差が広がる世上で、今や殆ど使われなくなった、この本当に重たい言葉を教示いただいたのはありがたいこと。ピアノ台上に飾った扇型Ⅱを見るたびに彼を思い出すのだ。てん刻印も早速彼への返書に同封した書類(わたしの健康目標関連図)の訂正箇所を活用させて頂いた。

お返しは陸上競技部顧問の芦田憲雄先生掲載の山ざる43号(24年11月号)に、礼状、健康関連情報、肉体作業ボランティアから方針変更した平和台自治会報(25年4月20日号)への投稿文コピを同封今日出状した。(25・6・19日)

○先月29日の小庭の植木の剪定作業を皮切りに。休んだことのない土曜日のスポーツクラブ行きから変更し

たのは、梅雨で各植木が生い茂り、地べたは妻が友人から2〜3株もらったどくだみが爆発的にはびこり、他つる雑草、野鳥が落とした雑木がおい茂って庭内を歩くのが難儀になってきたからだ。降雨日少なく28度〜32度近くまで気温が上がったが、午前中4時間余主木の剪定と地面にはびこっている雑草の除去作業に、曲がった腰と、左ふくらはぎの痛みに注意しつつ、終盤は暑苦しさに口で息をしながら汗みどろになって没頭した。

あと公道に落ちた剪定くずの清掃と、切り落とした枝類を2束結束し終えたのは12時ごろだった。この作業は毎年後半の健康状況を自己判断する指標としている。脚立の上での高温下の重労働(わたしにとっては)やり終えたことに「よし、今年もいける」と自信を深めるとともに、すぐ追っかけて「さて、この作業もあと何年続くものか」と消極的に考えるのも年の所為なのだろうか。ともあれ丈夫に育ててくれた亡父母と、支えてくれる妻に感謝。今日参院選公示日。(25・7・4日)

(昭和9年、柏原町本町生まれ／元・金融機関他勤務)

## 故宮書画複製への挑戦

口述 渡邊 隆 男（水上市町）

東京・上野の東京国立博物館で、「台北國立故宮博物院 神品至宝」展が開催された。故宮博物院は、中国歴代にわたる優れた文化財を多数収蔵する、世界にも類のない美術館である。今回はアジア初の開催となる。故宮博物院に収蔵される書画の複製事業を長年手がけてきた、二女社の会長・渡邊隆男氏に、故宮博物院の魅力と展覧会の見どころについてお話をうかがった

\* \* \*

——渡邊さんは台北の國立故宮博物院との付き合いは長く、一二〇回以上も台北に訪れたことがあるとうかがいました。故宮博物院とのそもそもその出会いについて、まずはお聞かせください。

渡邊 故宮博物院とは本当に深い因縁で、どこから話しをすればいいのか……。昭和三七年、台北陽明山

の麓に故宮博物院が建築されたんですが、私はそのころに書道美術書の出版を始めたんですね。故宮博物院が歴代中国書画の名品をことごとく所蔵しているという話から、ぜひ見たいと思っていました。京都国立博物館長の神田喜一郎先生にお願いして、故宮博物院の副院長・葉公超先生に紹介状を書いてもらった。初めて故宮博物院を訪れたのは、昭和四七年夏のことです。一番びつくりしたのが、范寬の「谿山行旅図」の大幅でした。縦二メートル、横幅一メートル強もある画です。こんなすごい迫力の画が世の中にあるのかと、身が痺れる思いでした。以来、パスポートで数えてみると、台北には一二〇回以上行っています。毎回一週間ほど滞在し、毎日故宮に通う。ざっと数えただけで、六〇〇回は訪れたことになりました。

——当時、故宮博物院の存在は、日本でも有名だったのでしょうか。

渡邊 一般にはあまり知られていなかったですね。戦前戦中は文物の動きについて朝日新聞が時々取り上げました。美術館としての成立の経緯が波乱に富んで

いたから。戦前、日中関係が悪化する中で、戦火を逃れて美術品が北京故宮から運び出されたのは昭和八年のことです。夜陰に乗じて、書・画・彫刻・陶器、その他の文物が箱詰めにして運び出された。黒塗りの木箱に入れて馬の背で運んだ。私はその馬と一緒に歩いた人を二人知っています。那志良さんと牛さんという方です。厳しい管理のもと何十年も文物に付いて歩いた経験から、何を聞いても答えません。

特に陶器は壊れやすいため、テスト用の陶器を木箱に詰めて故宮の三階の欄間から投げ落とし、何度もテストを繰り返し安全を確認した。日本軍に見つからないように夜だけ運び、厳重な防犯対策もしたが、人気がないところを夜な夜な歩くため、運搬中になくなったものも数知れない。それを調べて一度来た道に戻り、かなりの量を回収したという。上海に行ったり南京に行ったり、何十年間にわたり大移動したんです。

文物には「乾隆御覽の宝」や「宣統（皇帝）、嘉慶（皇帝）御覽の宝」などと書かれた北京故宮の印が押されています。街の骨董屋でその印が付いたものが売られたりもしていました。

南京博物院には大量の陶磁器を下ろしました。南京には近くに有名な景德鎮の窯元があり、この地なら陶器は安泰だろうというわけです。今でも南京博物院に陶器がたくさんあるのはそのためです。最後は重慶で数年間。

終戦後の昭和二二年になると、国共内戦のため、またまた移動がはじまる。長距離を何年もかかって運んだ。蒋介石軍が台湾へ渡り美術品も移動した。

日中戦後、蒋介石率いる二百万人の中国人が、基隆港金門島に入港、そこで現地人とのにらみ合いがはじまる。その時に、台湾の林伯寿という大地主が、ご自分の台北の土地を提供し、蒋介石を迎えた。林先生は、台北・台中の市街地を全部ほど持っていた親戚家で、内乱を治めた陰の大人物です。中国書画のコレクターでもありました。郭健氏のお執りなしで林伯寿先生に会うことができました。

——話を伺っていると会長は素晴らしい人脈に恵まれていらっしやいますね。

そうなんです。それはやはり郭先生の存在が大きい

のです。郭先生は、書画家、文人である于右任氏の秘書、政府監察院秘書長を務められた方です。日本大学を卒業、流暢な日本語を話され、政治家岸信介氏や佐藤栄作氏が訪台の際にいつも通訳をされました。この郭先生が故宮博物院の複製を作りたいという私の構想に大きく共鳴され、通訳を買って出てくださいました。書画愛好家の人脈が一举に開けました。郭先生と林先生との人脈が次々と広がり、林先生がお持ちの書画の出版もはじまりました。

林先生には何度も会いました。会う度に、いろんな文人を紹介してくださいました。政治家、軍人、経済人、学者、芸術家。そうすると必ず書画・美術の話題になるんです。人脈が人脈を生み、広がっていったのです。

——その林先生に、故宮博物院の院長の蔣復総さんを紹介してもらったわけですね。

渡邊 そうです。当時林先生は故宮博物院管理委員会の重鎮だった。人望も厚い。林先生の紹介もあって、故宮博物院の名品を見るだけじゃなく、所蔵品の複製を出版する仕事にも繋がったんです。まずは林先生の

お持ちの千金帖（千字文）、次に王世杰先生の寒食詩巻の複製もお許しいただきました。若いからそんなこともお願いできたんでしょう。

「こんな若造が、書なんていうものに興味を持っているとは感心だ」と、そんな感じでした。蔣院長には故宮博物院の大広間でお目にかかりました。「故宮の書画を出版したい。許可をいただきたい」と、いきなり院長にお願いしました。そうすると即座に「それは駄目だ。故宮博物院は国の機関であり、民間の営利事業には加担できない」と断られました。私は申しました。「営利事業ではありません。これは文化事業です。故宮博物院にある名品を広く世界中に知らせるべきですし、後世にも伝えるべき文化事業です」。蔣院長が答えました。

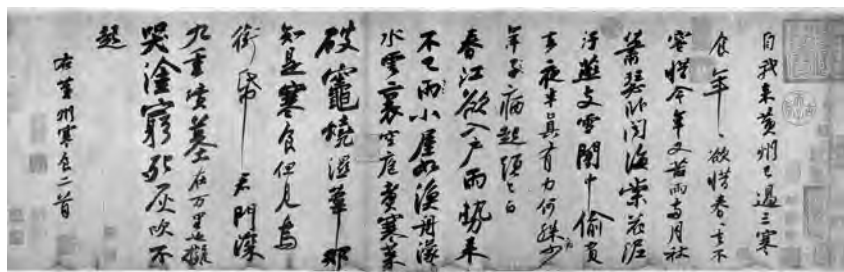
「実はそのことで私たちも困っている。美術品を大勢の人に見せたい。しかし見せると傷んでしまう。我々は永久に保存しなければいけない義務がある。多くの人に見せることと、後世に伝えることと、両方はできない。」私は孫悟空の逸話を出しました。「現物と瓜ふたつの複製を作ります。孫悟空が自分の毛を抜いてひ

と吹きすると、同じ悟空がどんどん生まれる。それと同じことです」。

私は印刷会社と様々なテストをしていました。産毛<sup>うぶげ</sup>まで写る、実物と同じぐらいの精度の複製ができるまで試していたんですね。だから自信はありました。私があまりにもしつこいのと、院長の短気が幸いしました。「可以(よろしい)。三点だけテストに許可をする。」私はすぐに「書も画もあります。大きいものも小さいものもあります。ものによつては複製の仕方も異なりますから、三十点お願いします」。最終的に「勝手にしろ」ということで許可をもらいました。本当に嬉しかったです。人生であれば嬉しいことはなかったですね。

——複製を作成した後、蔣院長に見せられた時、どのような反応だったのでしょうか。

渡邊 持参した複製を机の上に広げると、最初は怪訝な顔をして「虫眼鏡を持ってこい」とおっしゃるんですね。その虫眼鏡でじっと見て、いきなり虫眼鏡をテーブルに叩き付けて怒りはじめた。「馬鹿にするんじゃない。私は故宮の院長だ。蔵から本物を出してき



蘇軾「黃州寒食詩卷」

て、これが複製だとは何事だ」と。

しばらく経つて、郭先生が、「渡邊さん、蔣院長がどれくらいのことを言っている。二女社なら好きな書画を何でもやつてもよろしいと。」

……それ以降は自由に複製の許可をいただきました。本格的な撮影がはじまり、三百八十余件の複製を製作しました。

——故宮博物院の特に優れたところは？

渡邊 歴代皇帝が集めた文物です。他にそういうコレクションはない。皇帝の権力を使って集めた。皇

帝の権力で作らせた美術品。その時代に傑出した作家の作品のコレクション。特級品が集められています。

——今回の展覧会で展示される作品の中で、特にお勧めめは？

渡邊 それぞれ名高いものですが、「黄州寒食詩巻」はよく見ておきましょう。蘇軾という北宋時代の著名な文人が、黄州に流された時の思いを書いた書です。今回の展示品の中でもこれはダントツです。「自我来黄州」ではじまる詩そのものもいいし、もちろん書もいい。都にいたる時は偉い官職についていた自分が、流されて落ちぶれてしまった境遇を、短い詩に書き記している。湿った葦を破れた竈で燃やし食事を作る。その惨めさ。書き出しは少しやさしい字で書きながら、詩の内容と絡んで筆の動きが変化する。書いていくうちに次第に気持ちが入っていつているのが一目瞭然です。書というものは気が入っていく、思い込み、それが書の極意ですが、その深みがよく見てとれる。蘇軾という人は、並びのない詩人ですから、詩文の意味をよく掴んで、鑑賞しましょう。



孫過庭「草書書譜巻」

——蘇軾自身が書いた詩の横には、別の詩文が記されています。これは何を意味するのでしょうか？

渡邊 中国の書画の場合、素晴らしい作品には、後から見た人が「跋・感想」を書く習慣があります。「この書は大変素晴らしい」と感想を記す。跋は誰にでも書けるものではなく、有名な文人だけに許されるものです。これは、書にかけては蘇軾に負けないぐらいいの書き手であった黄山谷の筆になるもので



す。後ろから二行目の頭に「笑我」と書いてありますね。「もし蘇軾が生きていたら、自分のこの跋を見て、その字の拙さを笑うだろう」と書いてあるんですね。この跋がまた黄山谷の傑作といわれているものです。書というものは不思議なもので、時空を超えて筆者と情感を交わすことができるのでしょうか。

——有名な「蘭亭序」の拓本も、今回展示されますね。渡邊 「定武蘭亭序」もいい。王羲之の真筆是一片も現存していませんが、これは王羲之の書と伝えるものを集めて石に彫り、そこから作られた拓本です。中国では昔から、このような名筆の拓本が書道のお手本とされてきたんですね。「五百蘭亭」という言葉があるほど数多くの蘭亭序の拓本の系統があるんです。みんなこぞって王羲之の書を学んだわけです。王羲之の気韻を感じ取ってください。

孫過庭の「書譜卷」も名品ですね。これは王羲之の流れを汲む書論が書かれている。書とは何か。王羲之からはじまり、いかにして書というものが受け継がれてきたか。書に関する歴史と分析が書かれています。

「入木道」という中国では誰もが知っている書道を表わす言葉があります。王羲之の逸話から生まれたものです。天を祭る儀式のため、帝の命を受け、王羲之が板に祝詞を書きました。後になって大工が鉋で削り取ろうとする。しかし、その書は木の奥深くまで達して、削っても削ってもなかなか消えなかった。それほど気が入っていた。書の醍醐味は、いかにその人の気持ち伝わるか、読み取るかなんですね。「黄州寒食詩卷」や「草書書譜卷」に込められた「気韻」。それを感じ取ることをおすすめします。

松本芳翠先生は、「書譜卷」の全臨百回を目指していた。草書入門に必須のお手本です。十メートル以上ある巻物ですから、何千字はあるでしょう。それを一字ずつ鑑賞しながら書いていく。書論ですから勉強にもなるし、真似することでわかっていくことがたくさんある。十回、二十回、……百回、そこまでやってようやく入木道がわかってくる。書というものは本当に難しいものなんです。いくら素晴らしい書であっても一度見ただけではそう簡単にはわかりません。

——その他の展示品はいかがですか。

渡邊 黄庭堅「草書花氣詩帖頁」も面白い。書と水墨画が一緒になった倪瓚の「容膝齋図軸」、枯れた筆致で描かれた、これはいはば枯れ山水の絶品です。水墨画の場合、なるべく筆数を減らして描く。多くを描かずに、たくさんのもを画に封じ込める。これが一貫した中国の水墨画の特徴です。画では、「赤壁図巻」も名品です。

——工芸品についてはどうですか？

渡邊 日本人の感覚にはないですね。おじいさんが作りはじめて、孫が仕上げたなんていう話がよくいわれ、そういう感覚が中国では当たり前なんです。何十年もかけて作った作品を、時の皇帝に献上する。そうした目でみると面白いですね。

——今回の展覧会で作品に触れて、興味を持ち、台北の故宮博物院に行きたくなる人もいるのではないでしょう



范寛「谿山行旅図」

か。

渡邊 あちらにはおよそ七十万点の所蔵品がありま  
すからね。私が最初に訪れた時に見て衝撃を受けた、  
范寛の「谿山行旅図」のエピソードをひとつ紹介して  
おきましょう。二十年ほど前に、日本の画家たち（高  
山辰雄先生、加山又造先生等）と故宮博物院に行った  
時に、この画を再び見たいです。范寛の画の前で、加  
山先生が床にしゃがみこんで胡坐をかき、スケッチ  
ブックにデッサンをしはじめた。じっと模写している  
わけですね。友人の日本画家常岡幹彦さんは、あの画

を見て、手がぶるぶると震えだし、動けなくなつた。以来彼は当分絵が描けなかつた。それぐらいの大傑作です。

故宮の副院長江兆申という有名な画家が、「谿山行旅図」について私に説明してくれたことがあります。「この絵は逆筆で描かれている」と。その言葉を聞いてびつくりしました。普通は順筆、撫でるようにして描くんです。そうではなく穂先を立てて、ごしごしと突くようにして、点から線まで描いていく。初めて見ると、何が描いてあるのか、よくわかりにくいんですが、丁寧に見ていくと少しずつ見えてくるものがある。書と同じで、この画にも気が入っている。気の力がすごいんです。見るたびに見方が変わってくるし、作者が画に込めたいろんな思いが伝わってくるんですね。

——その范寛の「谿山行旅図」は故宮へ行けば見られるのでしょうか？

渡邊 それができないんです。残念ながら故宮にある殆どの名蹟は門外不出で奥深く秘蔵されて「展示禁止品」として滅多に見られないものです。八年に一度

かしか展示されません。しかも数日間だけです。二玄社が作った複製でご覧いただく以外にありません。他の美術館もやっているように、ぜひ複製と明記して複製を常陳してほしいものです。

故宮の文物は、中国の歴史が生んだ文化遺産です。国境を越えて、未来永劫に伝えるべき人類の遺産であり世界中に見せたいものです。精度の高い複製ならばそれが可能です。私がこの三百八十余件の故宮書画複製に半生をかけた目的でもありました。

(昭和3年氷上町生まれ／㈱二玄社会長・関東氷上郷友会  
名誉会長)



(撮影：岡吉明さん)

俳壇……………

ベランダから見下ろすと山ぼうしの大木が見事な華を咲かせています。丹波の庭にも五本あり、花達の半日陰を作ってくれていました。住んでゐる人、どうされたでしょう。

久良 道子（柏原町）

千両や余命は神に委ねをり

蛇穴を出でてこの世の不安かな

明日知れぬ身にも思慮あり葦の角

春宵や思案に余ることの数

父母の来ませこの窓盆の風

花栗や道標古りし坂の町

月冴えて光を返す龍の玉

存門の文身に沁みて秋灯

初時雨逢う瀬短き発車ベル

冬深しまた巡回の靴の音

※

父の五十回忌を迎えようとしている。久々に兄

弟、従弟妹が集う会を今秋、宝塚の弟の家で開くという通知があった。忘れかけた丹波の、あの頃のことを話題にのぼることだろう。

金子 徹（青垣町）

あの頃

母在さば筵に梅をひろげる頃

青田吹く風も乗り込むローカル線

父を恋う遠い記憶に蟹がいる

この町に投網をかけて花火散る

望郷となりて久しき青山河

※

墓参りにも帰らず、丹波は遠くなりにはけりです。囲碁（五段）と、下手な俳句とややましな「小話作りを遊びとして生きております。百まで生きられそうな気がしたり、明日の不安がよぎったりです。

藤原 保（山南町）

万の星 命のかげら ここにあり

垢ぬけて 花壇に立つや チューリップ

やや老いて ジョギング厳し 夏の川

木枯しや 鴉雀も 寂しかる

余命ありて 句作楽しや 花の道

※

近ごろ、相模原市の石老山中腹に、柳原白蓮の菩提寺顕鏡寺の存在を知りぬ。私、現在相模原市に住まいし、「蓮子様丹沢山地に眠りしよ」と詠みました。ご機嫌よう。

小松 京華（氷上町）

泊雲や祖父齊歲月「春なかば」

お母上『風』同人や桃の花

君は旅へ椿山荘の桜かな

（親友は夫の君のご永眠）

白鷺や丹波早苗田恋しかり

（農追究のひとつありて）

「花子とアン」演出に安達もじり

（若き演出家）

今年は妹がロスへ嫁して五十年

※

坂上 勝朗（氷上町）

ロスへ遣る新茶今年で五十年

田植糸しと友の電話の弾みある

そちこちも留守の家なる麦の秋

※

ふとしたとき、母とそっくりな自分を見つけて驚くことがあります。

藤田 玲子（氷上町）

花びらの舞い登りゆく春の風

おだまきの微かにゆれて母偲う

バス中に懐かしき人栗の花

いも虫がだんだん太る炎暑かな

山椒の葉喰われ揚羽が生れくる

柿二つリンゴ一つに絵筆取り

掌は母に似ており筒茶碗

木蓮の花芽朝日に輝きて

毛糸編む米寿の姑や春炬燵

風邪病みの抜けず煮物を焦がしたり

※

亭主の計らいで雛の節句の茶会の床の間は、女雛のみの飾りでした。

上田 道代（氷上町）

女雛微笑み 女ばかりの茶会かな

見上げれば 桜白々闇に揺れ  
降り立てば草の香りの夜の駅

(五月半ば宝塚駅に)

会う約束果たせず手向く菊一輪

(上田の本家を支えた美しい義従姉妹でした)

破られし 不戦の誓い梅雨さなか

雷雲に龍放ちたき心地して

夏空の雲つかむごと 片想い

ネジリバナ鳥の土産か 鉢に咲き

(ある日突然見知らぬ花が。小さいな

がらも花弁は蘭。別名もじずり)

※

我が家の庭の梅、切りすぎて昨年今年収穫0個  
です。キーウィしかり。

島津 和子 (山南町)

露の墓父の苦言がよぎる胸

薫風やラジオ体操一、二、三、

遠き日に住みたる町は閑古鳥

山路や旅の余韻のさめぬ夜

鍬持ちてしばらく時雨にうたれけり

※  
昨年に続き今秋も「ツールド能登400」に参  
加します。平家の落人の里や世界遺産の棚田を  
縫って、ロードバイクで一日百50kmペダルを漕ぎ  
ます。普段の日曜日は、荒川や多摩川でロードバ  
イクに乗っています。

足立 和信 (青垣町)

着膨れて眺めをるなり丹波壺

空海の石鎚山を駅火鉢

刻まれし経文の髭百千鳥

雨けふる昼のしづけさ竹煮草

冬瓜の薄き粉吹きを土間明り



(撮影：岡吉明さん)

## 誄座……………

生物としての人間

上 高子（氷上町）

大抵のことは人口論で説明ができる、という。  
日本の驚異的経済成長は、労働人口が多かったから。

今は扶養人口が多いから経済低調。

先進国はいずれも豊かになりすぎ、高齢者ばかりが増えて困っている。

そういえば、人類は昔から人口コントロールにこれこれ心血を注いできた。

今のように事前にいろいろな方法や手段がないときは、「間引き」があったそうだし、

戦争で男が殺し合うというのも自然界のコントロールだった。

そういえば、中国の一人っ子政策も。

男の欲情を抑えるために、ある原始宗教は男女同衾を禁じ、一定の解禁日があったとか。

イスラム教徒は、女にベールをかぶせて、男から身を守らせる。

日本でも『源氏物語』で知るところによると、千年前の姫君は御簾の陰に姿を隠した。

どうして女ばかりが、人口抑制の弁を担わされてきたのか？

一転現代のグローバルスタンダードは、女の人權を尊重し、自由に街を闊歩させてくれる。

そうすると、あちこちで性犯罪が起きまくる。

人間がまだ、野生動物から進化の途上にあることは、明々白々。

もっと進化を遂げ「草食男子」が増えたらどうなるのだろう。

人類滅亡？

熱暑の夏の夜、枯れた元女は眠れずに、ベッドでグルグルと世情に思いを巡らせる。



歌壇……………

同居して一年半、いろいろとありますが何とかがんばっています。八十路を越えてつくづく自分の年を思いしらされる日々です。

足立 美都子（柏原町）

休日の家族ドライブ習慣となりて一年子と同じ居して

空高く澄みいる見れば頭よりストレスすべて発ちゆく思い

魚に似し真白な雲がふわふわと真向う空に浮かびて消える

迫り来る雨雲さけて運転の子は懸命に車とばせり

吾がためのボケ防止策進行中子らの夕食作る楽しみ

※

歳を重ねますと活動範囲が狭くなってきました  
が、その分、異常気象のこと、政治のこと、まだ

復興半ばにもならない三陸地方のことなどに考え及ぶことが多くなりました。

荻野 哲男（柏原町）

「九条は守らにやいかん」と言う会話隣の席に耳傾ける（意外に若い人でホツとする）

わからんなーなんぼ聞いてもわからんなー平和憲法守らんかいな（丹波弁で表現）

坂道を転る様に改憲を急ぐ理由など無いはずなのに

三年が過ぎたる夏の被災地に瓦礫のあとやひまわりの咲く

背丈より高く伸びたる夏草や浪江の浜に漁船が埋る

家計簿の余白にメモる母の詩 読み返し見る、昭和の匂い（戦争中の悲しい詩である）

※

この春、四百年程続いたわが家の墓を、東京へ移しました。

坂上 勝朗（氷上町）



父祖の墓引く朝石の片裾に咲き初む堇の浅き  
水色

はるかなる時を超へ来てセピア染む母の便り  
の今は悲しも

限界といへる集落過り来て花の盛りのいよよ  
淋しき

雷鳴の中駆けて来し孫娘暫くぶりの姿妖しき

※

昔、春日部村多利診療所の裏山に登ると、下の  
風景がまるで箱庭のように見えました。

木呂子 恵美子（春日町）

丹波より送り賜ひしゆずジャムの香り嬉しき

独り居の膳

裏山に背負ひ登りし幼な妹の掌につぶれたる

茱萸一つあり

※

森の保全に関わりはじめて二十年余りを経まし  
た。ようやく今年七月に、保全された森を安全に  
公開するためのウッドウォークが出来ました。

山本 述子（山南町）

念願の愈叶ひて小網代の森の公開七月二十日  
散策路自然態系生かされて知事初渡り尾瀬の  
如しと

蝶に鳥トンボや蟹と対話せり森の時間は緩く  
流れて

梅雨晴れに白の暈しの半夏生烏揚羽と共に見  
てをり

山奥に鶯の声静かなり棚田に蛙の掛け合ひ響く  
幼き日籾山川に小舟出し父の乗せ呉れしを水  
上に偲ぶ

※

今、あまりの事に言葉もなく、丹波に起きたあ  
りえない天災のニュースに見入っております。前  
山の山を毎日眺め暮らした両親達は、こんな現実  
を信じられないと思います。母がなくなつてから、  
関東にも地震が、そしてまたこんな天災。知らず  
に逝つた母を、せめてよかつたと、思います。

井出 恭子（市島町）

平穏な丹波を愛し逝きし母この天災を知る由  
もなく

天災がないでええなあと言いいし母この現実を知る由もなく

お盆には帰れぬ我に届きたる信じ難き故郷の惨状

※

両歌とも、新聞に載りました。

福田 治子(青垣町)

何もかもごちゃ混ぜにして捨てていた頃が懐

かし分別収集

(岡井隆氏選)

「百円じゃ悲しすぎるよね」という声を聞き

つつ百均のしめ飾り買う

(米川千嘉子氏選)

※

ここ数年シルバーさんに葉刈りを頼んでいる。

数年前は5、6個しか採れなかった梅の実を今年は20キロも収穫。早春の花の時期から土用干しを終えた七月末まで、梅見、梅仕事と堪能している。

原谷 洋美(山南町)

梅の木は葉つばの傘をひろげ立ち緑籠もれる

午後は麗し

ひとつぶづつ梅は黄ばみて落ちはちむ黄落といふひびき寂しき

もぎ頃は六月十日の入梅と言ひきりぬたる水匂ふ母

木守梅もぎわすれたる梅の実は木洩れる初夏のひかりを散らす

不揃ひの梅の採れしは二十キロ彩つき太きを梅干しにする

梅の実の選られ選られて残り梅盆ざるの上に熟れゆきてあり

梅一キロ砂糖一キロ酸つばさの少し勝される夏が来たりぬ

梅を干す真昼の庭に鬼やんま影のみ残しつと見えずなる

盆ざるに雲翳りきて干し梅のひかる産毛の深みゆく午後



## 特産地再興にかける

足立智和

(丹波新聞社記者)

丹波黒大豆、丹波松茸などと並んで、秋の丹波の味覚の代名詞として知られる丹波栗。日本書紀にも朝廷に献上したとの記述があり、歴史的にも丹波の代表的食材だ。近年のスイーツブームを追い風に、ブランド品の丹波栗に注目が集まっている。一方、農業離れで廃園や手入れがされない管理粗放園が増加し、栽培面積や生産量が減少している。兵庫県丹波農林振興事務所が音頭を取り、丹波栗を再興しようと、2011年に「丹波栗再生戦略会議」が設立された。「丹波栗再生モデル大作戦」と銘打ち、3年間の取り組みの成果を踏まえ、産地再生の指針となる基本構想「2020年（平成32）目標」を策定、「日本一の丹波栗産地の復活」に向け、今年度から3年間は、「丹波栗の郷づくり推進事業」に取り組む。2020年（平成32）に栽培面積200ha（9年で50ha増）、生産量200t（同73t増）を目ざす丹波地域の栗栽培の現状と取り組みを紹介す

る。産地再興はなるか。

#### 〈歴史〉

丹波栗の歴史は平安時代にさかのぼる。平安時代初期に編まれた「延喜式」（927年）に、朝廷に栗を献上する国として「丹波」の名前が上がっている。納める量が多かったため、当時、丹波地域が全国最大の栗産地だったことを伝えている。江戸時代には、丹波の栗が有名になり、将軍家に献上されていた。

また、江戸中期の葉草に関する書物「本朝食鑑」（1700年）には、「古より丹波、但馬、阿波の諸州栗子を産す。延喜式の神祇大膳に之を載せたり。今も丹波の山中より出ずるものを上品とす。大きな鶏卵の如し。諸州之を栽培するも丹波に及ばず」と、丹波栗の大きさが記載されている。

#### 〈生産状況と他産地の状況〉

丹波地域の栗の主な品種は、早生の丹沢、中生の銀寄、筑波、晩生の石鍬。近年、鬼皮がむきやすい新品种「ぼろたん」の栽培も一部で始まっている。

栽培面積は1980年（昭和55）の255畝、出荷

量は1979年（同54）の413トンをピークに減少し

続けていっている。出荷量の調査は2006年（平成19）を

最後に行われておらず、最近では、はっきりした数字が

つかめていない。篤農家は、JAに出荷するより高価

格で買ってくれる得意先を持つており、良い栗は直販

している。全体像が見えないなか、数字をつかむ1つ

の資料として、戦略会議は、丹波ひかみ（丹波市）、

丹波ささやま（篠山市）の両JAの取扱量を用いてい

る。2011年（平成23）で49ト（ひかみ30ト、ささ

やま19ト）、2012年（平成24）で62ト（ひかみ32ト、

ささやま30ト）あった。再生会議では、データ最終年

度の2006年（平成18）が75トだったことから、現

時点の丹波地域の栗生産量は微減か、横ばいであると

推測している。

生産者の高齢化や栗の老木化で栽培面積や出荷量が

ともに減る懸念があり、今以上に減っていくと、ブラ

ンド栗としての競争力の低下が心配される。

一方、他産地も粘り強く栗の生産・出荷に取り組ん

でいる。栗の出荷量上位3県は、茨城、熊本、愛媛がトツ

プスリー。2012年（平成24）の全国出荷量に占めるシェアは、茨城が27%、熊本18.5%、愛媛10.4%、丹波地域を含む兵庫はわずか1.7%に過ぎない。

### 〈高値で取引される丹波栗〉

2012年（平成24）産の生栗の全国平均の卸売価格は1<sup>キ</sup>518円（大きいものから小さいものまで全ての平均値、農林水産省の統計）。同価格は、年々上昇している。

丹波栗（京都府を含む）の生栗は、この何倍もの高値で売られており、生栗では国内最高値クラスにある。

特に篠山市の栗は高く大粒の栗はJAの直売所などでキロ2000—2500円程度（2013年）の高値で売られている。生産農家が直売する場合は、それより高値で取引されることも珍しくない。丹波市でも2000円以上で特別大きな栗を売る生産者もあるが、3Lでも1500—1800円と篠山と比べると低めの価格設定だ。それでも他産地と比べるとべらぼうに高い。販路を持たない生産者がJAに出荷しても、3Lならキロ1200円ほどで買ってもらえる。

県丹波農業改良普及センターは、初心者、一般向けの10アールあたりの収量目標を、苗を植えてから13年、成園になった時点で「200<sup>キ</sup>」としている。全国平均価格に置き換えると、収入は10万円あまりだが、丹波でははるかに多くなる。同普及所は、エキスパートには「10アールで480<sup>キ</sup>」と指導しており、篤農家の中には400<sup>キ</sup>を取る人もある。同じものを作っても高値で取引されるのがブランド。丹波栗は強いブランド力を持っている。

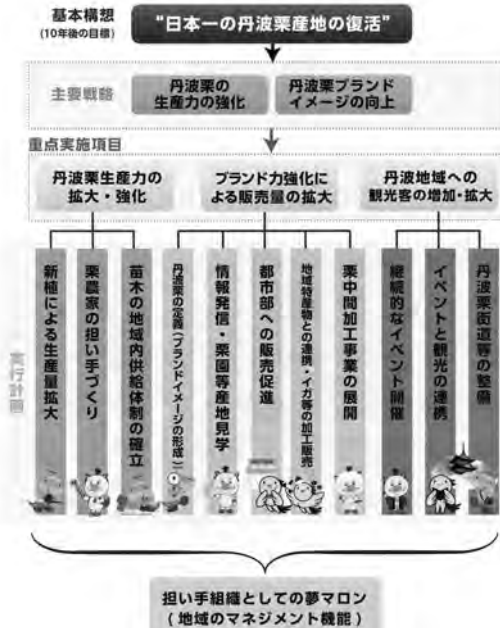
### 〈戦略会議の組織〉

丹波栗の産地復活をめざすにあたり、農業、商工業の連携に、観光も加え「農商工観光連携」をもとに、丹波栗を軸とした活動基盤づくりに着手した。生栗だけでなく、むぎ栗やペーストなどに加工した栗の需要が高い強みを生かし、農業だけに着目せずに商工や観光部門とともに地域おこしにつなげようという目論見だ。会議の構成メンバーには、生産者団体の代表、JA、市、県民局に加え、菓子工業組合、旅館料理・飲食業組合、観光協会などと、多くの関係機関へと広がっ

た。事務局は、農林振興事務所に置いた。

〈丹波栗再生モデル大作戦〉

戦略会議が、2011年（平成23―25）の3年間にかけて取り組んだのが「丹波栗再生モデル大作戦」。まずは栽培面積の拡大をと、当初は3年間で50畝の面積拡大をめざし、丹波市と連携して手厚い助成を設けたが、実績は26・6畝（新・改植18・2畝、大規模せ



ん定8・4畝)にとどまった。排水が良い土地でなければ苗を植えても枯れるため、栽培したいと申し出があった土地を、市、JA、県丹波農業改良普及センターが現地確認するなかで、「おすすめでできない」と答えるケースや、重機を入れて排水対策をすれば栽培可能な土地でも、補助金が一定額以上出ないため、初期投資で持ち出し額が大きくなることを栽培希望者が嫌ったケースなど、ミスマッチが多々あった。当初目標が過大だったこともあり、途中で修正された。

戦略会議の下に実務者でつくる「栽培」「加工・流通・販売」「観光」の3つのプロジェクトチームを置いた。中でも「栽培」プロジェクトチームは、栗園の巡回指導や、栗台帳の作成、計画的せん定処方箋の作成などを担った。県丹波農業改良普及センターは「くり講座」を開講し、生産技術の向上につとめ、ニュースレターを発行するなど、栽培情報の発信をこまめに行なっている。

再生会議は、収穫した栗を冷やしておく大型冷蔵庫や、お湯に栗をつけて殺虫する栗用の浴槽「温湯消毒」の機械の導入、サイズ別に栗を分類する選別機、自動栗皮むき機、むき栗の真空包装機、焼き栗機などの購

## 丹波ブランド紹介



再生戦略会議で昨年度初めて行われた「フェア」をPRするのほり。参加店の店頭に掲示した

入も助成した。  
特に、業務用として料理店や菓子店に販売されるむき栗は、小粒の栗の出口に開拓したい分野。丹波栗は生栗が高値で取引されるため、加工の取り組みが遅れている。他産地の場合、生栗の平均キロ単価が500円程度なのだが、むき栗にして真空パックすると2500円程度にもなる。生栗からむき栗に加工する際に50%のロスが出るが、歩留まり50%としても、十分高値で商売になる。丹波栗のむき栗も同程度の価格で展開を考えている。ブランド力を生かし、さらに高



第1回スイーツコンテストでプロの部グランプリに輝いた「ときわ堂」の作品。商品化され好評だった。

値で販売したいところではあるが、消費者への価格転嫁を考えると、高値にした時に買い手がつか、見極めが難しい。  
〈需要拡大に向けた取り組み〉  
栗を味わってもらおうと、昨年10月に初めての「丹波栗食べ歩きフェア」が開かれた。菓子店、飲食店、栗が買える直売所合わせて38か所がフェアに参加。参加店は、「丹波栗を味わってください」のそろいののぼりを立てPRした。フェアに参加する菓子店、飲食店には、県民局の予算で自動栗皮むき機を導入した生産者のむき栗が、一般的な取引価格より安価で提供された。

あわせて、菓子材料としてのブランド価値を高めようと、丹波栗スイーツコンテストも初開催。辻製菓専門学校講師、有名パティシエが審査員を務め、プ

口の部に14作品、一般の部に46作品の応募があった。プロの部は、地元丹波市の「ときわ堂」（水上町成松本店、ゆめタウン水上内にも店舗あり）の「丹波栗のパイ包み」が選ばれた。一般の部は商品化することが条件で、口コミ等で評判が広がり、通常商品の5倍以上を売り上げた。

### 〈丹波栗の郷づくりへ〉

今年度から2016年（平成28）までの3年間を計画期間とし、「郷づくり推進事業」を展開する。これまでの3年間は、栗栽培への意欲を喚起、栗への関心を高める「呼び水期間」だった。引き続き、丹波栗の生産基盤の整備をはかるほか、丹波栗を生かしたビジネスモデルの創出をめざす。さらに、丹波栗を核とした交流をはかり、丹波栗の再生とともに丹波栗を核とした、農・観・商工連携による地域の活性化につなげていく。

生産基盤の整備では、「10アール以上」の要件を加え、まとまった面積の栽培者に絞って助成することにした。個人の努力には限界があり、例えば栗栽培に取

り組む集落を募るといったことをし、面的に広げようとしている。園整備に10アールあたり12万4000円を限度に助成をする。苗代、資材代、排水対策、獣害対策を含む園地の整備、大規模せん定などの費用に充ててもらおう。温湯消毒機や防除機などの機械購入経費も2分の1を上限に助成する。

新たに、丹波栗の苗木生産体制の整備に取り組む。丹波地域で植えられている苗の大部分は、県外から買っていることから、丹波市くり振興会の河村修治会長 〓 柏原町大新屋 〓 と丹波栗生産組合の足立義郎組合長 〓 青垣町森 〓、同振興会会員で、苗木を育てた経験がある吉竹清志さん 〓 柏原町下小倉 〓 の3人で、「三栗（みくり）園」を立ち上げた。将来は、丹波地域の苗供給、さらには地域外に優良苗が販売できるようにするのが目標だ。

もう1つの柱が、丹波栗ブランドの向上推進。丹波栗と他の栗産地との違いを成分・風味の分析などで調べ、丹波栗の優位性を明らかにするとともに今後の有利販売・PRにつなげる。戦略会議も、販路拡大等の戦略や菓子製品加工科開発等の振興方策について検



討する。また、栗園の実態調査にも取り組む。5本以上または1アール以上を目安に、全栗生産者に対し聞き取り調査を行っており、今年度内に台帳を整備する。面積、本数、収量、販売先のほか、防除、せん定、施肥といった管理状況、後継者の有無までも聞き取っており、丹波栗栽培がこれからどうなっていくのかの予想もつく。

また、栗の収穫量が増えていくことを見越し、ビジネスモデルの創出にも取り組む。関係者が最も期待しているのが、丹波栗に関する全般をコーディネートする組織、会社が生まれることだ。丹波栗のブランド力強化や生産拡大の強化、栗の中間加工事業の展開、販売、丹波地域への観光客の誘致・拡大などを一体的に担う。モデルは高知県四万十市で道の駅「四万十とおわ」を運営する株式会社「四万十ドラマ」だ。同社は、地元のJAから栗を買い、鬼皮をむいて加工、販売する。生だとキロ600円にしかならない栗を渋皮煮に加工することで、250グラム入り（10粒）を3000円で販売している。地元の栗を扱うことで生産者が潤う。売れるのなら、と生産が拡大する。栗

を使った加工品を作ってみようと菓子店も進出してくる、と好循環が生まれている。

### 〈結びに〉

筆者は、「丹波に生まれたからには渋皮煮ぐらい作れなければ」との思いで毎シーズン調理を楽しんでいる。渋皮を傷つけないように、包丁で鬼皮を1つひとつむくのは、結構な手間だ。渋皮に傷がついたらカットして栗ご飯へ。栗ご飯は炊きたてでも、冷えてもおいしい。ごま塩をふりかけると格別だ。

丹波栗の評価は、本物志向と相まって高まっていると感じている。ブランド戦略も立案され、ますます人気が出るだろう。反面、生栗の皮をむいた経験がない人が、地元でも年追って増えているように感じている。最大の売り先は、業者か、「自分で作れないが食べた人」になるだろう。生栗が高いばかりに6次産業化が遅れているのが丹波地域の課題だが、事業化の余地が多分に残されていることの裏返しでもある。丹波栗の再生が、過疎と高齢化がいつそう進む10年後、20年後の地域に明るい未来をもたらすことを願っている。

## 丹波柏原の名彫り物師

—— 中井権次一統の足跡をたずねて

岸 名 経 夫 (柏原町)

◇はじめに

二十数年前、舞鶴の山の中腹にある多称寺を訪れた。飛鳥時代、聖徳太子ゆかりの古刹である。一對の巨大な仁王像と、本殿の拝殿を支える大きく太い萩の柱で有名である。この寺の正面の向拝に立派な竜、唐獅子と象の霊獣が目に入った。板の段をあがって後ろから竜の姿を覗った。左隅に刻印がほのかに見える。目を凝らして視た。彫り物師、丹波柏原城下住人、中井権次正貞、とあった。旬日を経ずして但馬は和田山町枚田の赤渕神社を訪れた。この神社も古いもので、継体天皇の時代の五三一年創建らしい。ここでも中井権次一統の山門にある彫刻を目にしたのであった。それから長い年月が、経過し、中井氏の彫り物についての私の記憶が忘却の深い澁みの中に沈んでいたのであった。

三年前の七月の事だ。友人二人を伴って但馬の大乗寺(別名、応拳寺)を久しぶりに再訪した。寺の女性の案内人からこの寺に、中井一統のすばらしい竜や唐獅子、獏などの彫り物があることを聞かされた。それを見て思わず感嘆の目を見張り、その時から私の胸中に柏原出身の中井一統に対する、畏敬の念と興味が沸々と湧いてきて、いわば、魅せられた魂となつてその作品探索に心が傾いて行つたのである。訪ねて行つた神社、仏閣は二百か所以上に及び、車の走行距離も五、六千キロ以上になった。

◇大工、宮大工、彫り物師、中井一統について

さて、柏原中井家のルーツが段々定かになつてきた。京都市下京区樋之下町の長香寺に大大名に匹敵する巨大な墓があり名墓録に俗名中井正清と書かれている。彼は徳川家康召し抱えの京大工頭初代である。中井家の株内で中井家の血を引く二人の兄弟が京の内裏近くの「中井役所」(大工職を統率した中井氏の公儀事務所)から丹後与謝郡の方へ派遣されていた。その腕を見込まれ、栢原二代目藩主、織田

## ふるさと人物記

信則の時、明智光秀に焼き討ちされた栢原八幡宮と三重塔の造営（一六一五―一六一九）に招請されたものである。また、その後三重塔は文化一〇年（一八一三）、五代中井丈五郎正忠、六代権次正貞、四代君音次男の宮大工、良平、利兵衛親子の協力により再建されたものである。

一方、江戸に目をやれば、徳川家の天下になって十数年、家康の遺言により中井正清により、日光東照宮が一六一七年に創建された。当初は比較的簡素な社殿だったが、三代將軍家光が大改造を指揮し、一六三六ごろ現在みられる壮麗な建築群が完成した。すなわち、唐門、陽明門、拜殿、石の間、そして本殿である。栢原へ定住するようになった、宮大工三代はこの大工町（現在の栢原町新町界隈）に屋敷を準備され、相当な待遇で迎えられていたらしい。四代は中井言次君音（一七二二―一七八七）と名乗り、彫り物師として、主として、竜の彫り物を設え始めた。栢原町の五社稲荷、山南町の日吉神社などに、その名を残している。最初の彫り物師として最高の技量を發揮した、君音の卓越した技能には

最高の評価を与えても過言ではない。

さて次からが、彫刻師として、三人の巨匠が登場する。すなわち、五代中井丈五郎橋正忠（一七五〇―一八一八）、六代中井権次橋正貞（一七八〇―一八五五）、八代中井権次橋正胤（一八五四―一九二八）だ。七代中井権次橋正次（一八二二―一八八三）は、前述の三人にも少しも劣らない技能だが、やや製作数が少ないので、四天王としては言わない方が、いいのだろう。四者とも卓越した技量の持ち主で、人間業ではないような作品を排出している。彼らは、現在でいう、屋号に青竜軒を用いる。正貞の弟に、中井清次良正用、その子、清次良正実がいる。彼らの作品を見るにつけ、単なる木の彫り物と言ってはおられないもので、高度な、芸術品、文化財と言わずして、なんと言うべきかと思うのである。作品を見れば見るほど、その思い、一層深まるところである。九代中井喜一郎（一八七二―一九五八）からは、時代の流れで、仕事も少なくなり、昭和の初めに宮津に移住され、今はその末裔

## ふるさと人物記

十代中井丈夫（一九八八年没）、十一代目として宮津市本町で彫刻店を営んでおられる、中井光夫さん（一九四一―）がご健在である。

さてここで、中井権次一統があのおすばらしい竜、その他の彫刻のデザインをどのようにして会得したのであるうか。このことについて、少し想像を働かせてみた。京都に縁のある中井氏一門は美術品の鑑賞には大いに有利であったと思われる。立派な作品を常に視て彫り物等に応用してきたものと考えられる。たとえば、安土桃山時代の海北友松の雲龍図、狩野永徳の唐獅子の襖絵、狩野光信の相国寺の天井



薬師堂内の天井（1800年頃）  
中井家5代目中井正忠・作

長安寺の天井に設えられた龍の彫刻、天井画ではないのに注目。かなりの厚さの檜の板に彫ったものである。堂内にあるため1800年頃の作にしては保存がよい。（福知山市奥野部）



龍の彫り物（1810年頃）  
中井家5代目中井正忠・作  
（豊岡市城崎町城崎温泉温泉寺）

の竜、中井正清建立の知恩院阿弥陀堂の三体の竜、円山応挙の雲竜図、なかんづく、京都の、天才、鬼才の名の高い、曾我蕭白の雲竜図の与えたインパクトは計り知れないと思われる。いろいろな大作を自らの脳裏に刻みこみ、絵の原図を作り上げ、彫り物に生かしていったことは、六代正貞が常に伝家の絵図帳を、携えていたということに表れていると言っても間違いではない。中井一統は絵心も大したものだったらしい。

# ふるさと人物記



麒麟

中井家6代目 中井権次橘正貞・作  
(篠山市沢田・沢田八幡宮 1810年頃)



大護神社

中井家6代目 中井正貞・作  
(氷上町成松甲賀山 1830～40年頃)

彫刻が同じようなパターンで作成され、それが集団でなされ、秀いでた人物の名前が突出できないこともあったと思わ

さて、これほど素晴らしい芸術品にもかかわらず、なぜ人々の口にながらなかつたのであろうか。予断で申すのを許してもらえれば、次の三つぐらいが考えられる。一つ目は、飛鳥、奈良時代から鎌倉時代にかけての仏教芸術の隆盛はさておき、江戸時代の美術工芸はかなり絵画などへ偏重してしまつたきらいがあるようだ。初期の俵屋宗達、中期の尾形光琳、

晩期の酒井抱一の風神雷神をはじめ、喜多川歌麿、葛飾北斎、そして歌川広重等々の浮世絵、池大雅、与謝蕪村の文人画、円山応挙などの写生画等々。また酒井田柿右衛門等の陶芸など秘かに自分で求めて悦に入れるものだから、度重なる、寛政の改革、天保の改革にもかかわらず、町衆のいや改革主体の武士階級にも、その懐深くに入り込み、大切にされ、流行していったものであろうが、こと彫刻については、神社、仏閣のようなところになかなかたようである。崇拜の対象になかなならず、自分が所有することが、できなかつたからなのだろう。また

## ふるさと人物記

れるのである。

二つ目は、この彫り物は北関東地方に多い、いわゆる「彫り物のための建物」とは異なり、中井家のそれは「建物のための彫り物」が大半である。すなわち、神社、仏閣の付属品であるということだ。人間の信仰の対象は言うまでもなく、神社、仏閣にある。もつと言えば、その中に鎮座する神や仏やその背後の山々であり、神社、仏閣の前後、左右や側面にあるちまちました彫り物など、気が向かないのである、要するに関心がわかないのである。よく視てその作品に接した人は、小さな驚きをもつて記憶



柏原八幡宮（1870～80年頃）  
大神宮内の狛犬の彫り物（明治16  
年奉獻）。中井家7代目・中井正次・作  
（氷上町成松甲賀山）

に留めたことはあつたであろう。

さらに三つ目は、明治政府による国家神道と廃仏毀釈の宗教政策のせいと考えられる、これが最も大きい。地域地域の村人たちの願いを汲んだ、近世風の彫り物装飾は、富国強兵の統一国家政策を狙う政府にとつては、相容れないものであり、国民個人々の心を菊の御紋一つに変えてしまったのだ。中井家九代目が仕事がなくなつて宮津に移られた時期と一致する。

ここで中井一統の彫刻の特徴を簡単に述べておきたい。主体は童であり、鋭利な刃物でのその彫刻は、ひいき目で見ても、ほかの流派の彫刻師の追隨を許さないように思える。聖獣と言われる、唐獅子、獏、そして象が常にそばに設えられている。動植物は言うに及ばず中国の古典に出ている仙人などの彫り物も多い。ともかく、彫刻の数と多彩さは驚くべきものである。やはり実際に自分の目で確かめたいものである。幸いにして、昨年九月にプロカメラマンの若林純氏による『寺社の装飾彫刻、近畿編』が日貿出版社（〒113-0033東京都文京区本郷

## ふるさと人物記

五二二二、TEL〇三一五八〇五一三三〇三）から出版された。近畿地区から選ばれた一〇〇か所のうち三三か所が中井一統の作品であり、名実ともに高く評価されている。一度手に取って見てはいいかでしょう。

### ◇京大工頭 中井正清にまつわるエピソード

さらにここで、初代京大工頭、中井正清についてもう少し、詳しく触れてみたい。彼は、永禄八年（一五六五年）法隆寺大工の子として生まれた。父は名人とうたわれた中井孫太夫正吉で、慶長三年（一五九八年）の方広寺の大仏殿の造営に、大和の国の棟梁たちを引き連れて参加した。この時以来、法隆寺大工、大和大工を率いる力が、父から子へと引き継がれた。特に正清は、非凡な才智の持ち主といわれたらしく、徳川家康の目に留まったらしい。家康は関ヶ原以後、正清に京都大工頭として、飛鳥奈良、そして平安時代の神社、仏閣に高度の技が伝承されている上方の技師たちの業を関東にも持ち込みたく思ったのも、無理もないと考えられる。そう

いうわけで、五畿内近江六か国の支配を任せただのである。たとえば、秀吉が存命中に発願していた法隆寺の大修理の大工棟梁を勤め、思い切った修復を行い法隆寺が世界最古の木造建築として今日も存続するのに貢献している。なおまた、正清は、修復なつた法隆寺の棟札に「番匠大工一朝悉棟梁橘朝臣中井大和守正清」と記している。この橘の銘を栢原の中井家の五代目から中井権次橘云々と言うようになった。正清に対する尊敬の念が感じられる。

さらに家康は、正清に現在世界遺産となつた江戸初期の神社、仏閣の重要建造物を、ほとんど建造させている。すなわち、城郭にあつては、内裏はもとより、伏見城、江戸城（二物件とも修復）二条城、駿府城、名古屋城、神社では、日光東照宮、久能山東照宮、江戸紅葉山東照宮、仏閣については、知恩院、芝増上寺（いずれも浄土宗）などである。期待どおりの仕事をして、大名並みの従四位下、中井大和守正清となつたのである。家康もその仕事ぶりにはいたく感服して、慶長十五年（一六一〇）に「何事も普請の儀、大和次第」と言い切り、全国の大名

から、建築資材など、思いのままに調達できるようになっていたらしい。正清の十三代目、正知氏（和光市在住）が江戸初期の重要文化財は二六〇余あるが、その七%が正清関係だとおっしゃっていたのは印象深い。

ここでさらに、正清およびをその子孫についてのエピソードを二、三紹介しておこう。家康は、江戸初期駿府城においては、加判衆と称する、今でいう、ブレーンを用いていたと言われている。中には、本多正純、板倉勝重、天海、金地院崇伝などがいた。そこに、中井正清も連座していたと言われている。彼は、大の美酒飲みで、家康の前でも、平然と大声を出して、杯を重ねたらしい。家康もそのことを莞爾として受け入れていたらしい。それは正清の大口頭としての技と統率力の偉大さを、十二分に認め、心から可愛がっていた証左であろう。

また、正清は「巨砲」の操作の免許をもち、冬の陣で自分も若いころ携わって勝手知った大坂城の中枢部に砲弾を命中させ、淀君に和睦を申し込ませたり、夏の陣でも、淀君と秀頼の居室に大砲の弾を命

中させ二人を自害させたかもしれないが、今となつては、その事実はわからない。大坂方は正清が一族郎党を引き連れ参戦したのをまことに脅威に感じ、夏の陣が始まる四月に兵、一万余で大和の中井家の村を襲つて、多大の人的被害を与えたらしい。西の真田幸村、東の中井正清の知略戦を彷彿させるような感じで、歴史秘話ヒストリアの格好の材料と、失礼ながら思つてしまうほどの、歴史の裏面史である。

先だつて、京都の中井正清の菩提寺である長香寺を訪ねた。この寺は正清が存命中に方広寺の建築資材の残りをを用いて建立したものである。住職の奥様が墓へ案内してくださり、貴重なお話をしていただきました。正清の墓の巨大さにびっくりしてしまいました。数トンはあるかという、大きな石三つが横に並んでいた。二代目も大きなもので、三代目はぐっと小さいものだった。これら二代、三代以下の人たちが、京都の仁和寺、北野天満宮、東寺の五重塔等々の移築、修理に携わつたらしい。特に、仁和寺の金堂（国宝）、これは、内裏の紫宸殿を二代正侶



# ふるさと人物記

が、(一六二二年ごろに) 移築したと思われる。すばらしいものである。さらに、興味深い話を奥様から承った。どうも三代目の正知の息女が、紀州藩主二代目徳川光貞の側室で、徳川八代將軍吉宗の母、お紋の方だそうである。これもびつくりであった。江戸初期から中期にかけて、中井正清一統は、公儀、徳川家とは切っても切れない関係があるのだと不思議な、縁を感じたものであった。

## ◇中井権次顕彰会が発足

平成二十六年一月三十一日(金)に柏原に於いて総勢七〇人以上の参加者をもって中井権次顕彰会が発足した。権次の彫刻をもとに、各市町村の連携、各神社、仏閣間の交流、地域地域の、文化財の尊重とコミュニケーションの頻度の高まり、彫刻の存在場所のマップの作成、バスなどによる研修旅行等々も視野にいれて、発展させていこうということになりました。関東地区の皆様のアドヴァイス、ご参加、ご援助を心からお願ひする次第です。

## ◇おわりに

名工中井権次の足跡を訪ねて、三年近くが経ったが、まだ訪ねていないところがかかなりある。これからの楽しみである。探訪すればするほど、中井家の彫り物師たちが我々を待っていてくれる感じがこの頃、いや増している。彼らの卓越した技能が、忘れられた歴史の淵から甦り、すばらしい芸術作品として、広く人口に膾炙され、寺社の装飾彫刻が新しい芸術のジャンルに付け加えられることを、強く願っているところです。そして、現代の人々に、潤いを与えてくれることを我々の探訪の意義になればと願っているところです。最後になりましたが、この探訪の旅に、一回も欠けることなく、同行していただいた 進藤凱紀、村上和謙両氏(元柏原高校教師)に心から感謝の意をささげたい。また訪れた先々や、側面から心身ともにサポートを頂いた諸賢にも改めて、深甚の感謝を申し上げます。

(昭和12年、山南町和田生まれ)元柏原高校英語科教諭  
〈中井権次顕彰会 会員募集〉入会金2千円/中兵庫信用  
金庫・柏原支店(普通預金) 068-0782 (口座名)  
中井権次顕彰会

◎寄附者芳名(平成24年度)

安本 義正殿 五〇、〇〇〇円  
 谷水 克己殿 三〇、〇〇〇円

(柏陵同窓会会長)  
 余田 敏殿 一〇、〇〇〇円

(県立永上高校校長)  
 兵庫県東京事務所殿

植木 一夫殿 一〇、〇〇〇円  
 岸本 勲殿 一〇、〇〇〇円

原 利充殿 八、〇〇〇円  
 谷口 浩章殿 六、〇〇〇円

梅田 重二殿 五、〇〇〇円  
 岡林 逸男殿 五、〇〇〇円

荻野 武殿 五、〇〇〇円  
 荻野 哲男殿 五、〇〇〇円

谷口 捷殿 五、〇〇〇円  
 中居 篤子殿 五、〇〇〇円

渡辺 隆男殿 五、〇〇〇円  
 赤尾 正顕殿 三、〇〇〇円

生田 清弘殿 三、〇〇〇円  
 植田 茂樹殿 三、〇〇〇円

上野 重喜殿 三、〇〇〇円  
 白井 小五郎殿 三、〇〇〇円

大野 義昭殿 三、〇〇〇円  
 梶原 やす子殿 三、〇〇〇円

形田 恒夫殿 三、〇〇〇円  
 絹川 正殿 三、〇〇〇円

古倉 徹夫・則子殿 三、〇〇〇円  
 近藤 仁司殿 三、〇〇〇円

笹倉 強・郁子殿 三、〇〇〇円  
 笹倉 鉄平殿 三、〇〇〇円

鈴木 和榮殿 三、〇〇〇円  
 勢川 雅弘殿 三、〇〇〇円

大録 和代殿 三、〇〇〇円  
 高見 嘉都司殿 三、〇〇〇円

千葉 淳子殿 三、〇〇〇円  
 鶴田 宏・ゆき子殿 三、〇〇〇円

南部 光殿 三、〇〇〇円  
 橋本 真二殿 三、〇〇〇円

藤田 純殿 三、〇〇〇円  
 藤田 千治殿 三、〇〇〇円

前田 亘殿 三、〇〇〇円  
 吉竹 覚殿 三、〇〇〇円

渡辺 和代殿 三、〇〇〇円  
 渡辺 昌彦殿 三、〇〇〇円

足立 美都子殿 二、〇〇〇円  
 久呉 道子殿 二、〇〇〇円

澤田 みさを殿 二、〇〇〇円  
 直田 正殿 二、〇〇〇円

畑 雅樹殿 二、〇〇〇円  
 山口 泰男殿 二、〇〇〇円

本城 英明殿 一、五〇〇円  
 足立 明子殿 一、〇〇〇円

足立 謙吾殿 一、〇〇〇円  
 足立 東一郎殿 一、〇〇〇円

足立 義雄殿 一、〇〇〇円  
 池上 忠志殿 一、〇〇〇円

池田 忍殿 一、〇〇〇円  
 稲岡 俊一殿 一、〇〇〇円

梅田 節二殿 一、〇〇〇円  
 岡田 充利殿 一、〇〇〇円

粕谷 迪子殿 一、〇〇〇円  
 門山 壽子殿 一、〇〇〇円

久下 誠殿 一、〇〇〇円  
 坂上 勝朗殿 一、〇〇〇円

勢川 武彦殿 一、〇〇〇円  
 田中 登喜子殿 一、〇〇〇円

中谷 美鶴殿 一、〇〇〇円  
 廣内 卓生殿 一、〇〇〇円

村上 高廣殿 一、〇〇〇円  
 山口 敏之殿 一、〇〇〇円

◎寄附者芳名(平成25年度)

榎本 輝彦殿

一〇、〇〇〇円

(兵庫県東京事務所)

井口 正彦殿

一〇、〇〇〇円

(兵庫県人会幹事)

谷水 克己殿

一〇、〇〇〇円

(柏陵同窓会会長)

村山 美生殿

一〇、〇〇〇円

(県立柏原高校校長)

藤原 敦實殿

一〇、〇〇〇円

(丹波市自治振興会)

荻野 祐一殿

一〇、〇〇〇円

(丹波新聞社社長)

荻野 哲男殿

一〇、〇〇〇円

岸本 勲殿

一〇、〇〇〇円

中居 篤子殿

一〇、〇〇〇円

菊池 洋子殿

八、〇〇〇円

池田 和子殿

五、〇〇〇円

荻野 武殿

五、〇〇〇円

谷口 捷殿

五、〇〇〇円

山口 敏之殿

五、〇〇〇円

青木 良子殿

三、〇〇〇円

足立 和孝殿

三、〇〇〇円

井出 恭子殿

三、〇〇〇円

上野 重喜殿

三、〇〇〇円

梅田 節二殿

三、〇〇〇円

大野 均殿

三、〇〇〇円

大野 義昭殿

三、〇〇〇円

金出 一郎殿

三、〇〇〇円

北村 貞子殿

三、〇〇〇円

絹川 正殿

三、〇〇〇円

近藤 仁司殿

三、〇〇〇円

笹倉 鉄平殿

三、〇〇〇円

鈴木 和榮殿

三、〇〇〇円

大録 和代殿

三、〇〇〇円

高見 嘉都司殿

三、〇〇〇円

谷口 浩章殿

三、〇〇〇円

千葉 淳子殿

三、〇〇〇円

鶴田 宏・ゆき子殿

三、〇〇〇円

南部 光殿

三、〇〇〇円

橋本 真二殿

三、〇〇〇円

藤田 純殿

三、〇〇〇円

前田 亘殿

三、〇〇〇円

吉竹 覚殿

三、〇〇〇円

吉見 弘文殿

三、〇〇〇円

若森 敏郎殿

三、〇〇〇円

渡邊 和代殿

三、〇〇〇円

渡邊 隆男殿

三、〇〇〇円

渡辺 昌彦殿

三、〇〇〇円

池上 忠志殿

二、〇〇〇円

三宅 良夫殿

二、〇〇〇円

山口 泰男殿

一、〇〇〇円

赤井 紀男殿

一、〇〇〇円

赤井 正洋殿

一、〇〇〇円

足立 明子殿

一、〇〇〇円

足立 東一郎殿

一、〇〇〇円

足立 吉雄殿

一、〇〇〇円

安達 健一郎殿

一、〇〇〇円

植田 茂樹殿

一、〇〇〇円

岡田 充利殿

一、〇〇〇円

木下 真理殿

一、〇〇〇円

久下 善生殿

一、〇〇〇円

久呉 道子殿

一、〇〇〇円

久保 良雄殿

一、〇〇〇円

小林 和子殿

一、〇〇〇円

小松 京子殿

一、〇〇〇円

坂上 勝朗殿

一、〇〇〇円

正呂地 悟殿

一、〇〇〇円

勢川 武彦殿

一、〇〇〇円

田谷 幸子殿

一、〇〇〇円

中谷 美鶴殿

一、〇〇〇円

畑 雅樹殿

一、〇〇〇円

原 利充殿

一、〇〇〇円

藤井 住夫殿

一、〇〇〇円

山口 和久殿

一、〇〇〇円

余田 幸夫殿

一、〇〇〇円

## 柏原八幡宮と厄除大祭

千種 正裕（柏原八幡宮 宮司）

鎮座地 兵庫県丹波市柏原町柏原字八幡山

祭神 息長帯比賣命（神功皇后）

誉田別名（応神天皇）

比賣命（多紀理比賣命、多紀都比賣命、市杵島比賣命）

### ◆ 由緒

社伝によれば舒明天皇の御代（六二九〜六四二）

出雲の連なる人が入船山の山上に素盞鳴尊を奉斎したのが当社の創祀である。

その後、万寿元年（一〇二四）に入船山の周辺、三箇所より霊泉が湧出したため、奇瑞と



して京都の石清水八幡宮より、御分霊を勧請したと伝えている。

当社は田地三拾町の莊園であったが「延久の莊園整理令」により田地貳拾町が削減され、田地拾町と成った事が（東京大学史料編纂所大日本古文書 石清水八幡田中家文書）の延久四年（一〇七二）九月五日の太政官牒にて通達された。

先述の文書には社伝に言う万寿元年の前年、治安三年（一〇二三）に、この年早魃と疫病が続いたため、住人達が祈祷をしたところ神のご託宣を受け、御神体を奉じ神殿を造立したところ五穀成熟し、郷土安穩となったと記している。

### 一の鳥居

前書の通りこの地域は石清水八幡宮の莊園となり、柏原別宮の門前町として商工業者集落が形成された。

一の鳥居の周辺は今も「東市庭、西市庭」と呼ばれその前方には「古市場町」



# 丹波のまつり



殿

天正十年（一五八二）

本羽柴（豊臣）秀吉が配下の武将堀尾毛介吉晴に普請奉行を命じて再建に着手させ、同十三年（一五八五）八月に竣工

という町名もある。小規模ながらも中世地方都市の賑わいを見せていた。

ちなみに、平成三十六年（二〇二四）は、御鎮座一千祭の奉祝の年となる。

## ◆八幡宮の社殿焼失と再建

南北朝時代の貞和元年（一三四五）に丹波の国人荻野安芸守が足利氏と戦い、その兵火で創建当時の社殿は焼失し、その後再建された社殿も、天正七年

（一五七九）織田信長の

丹波攻略の命を受けた明智光秀の戦火に再び焼失し、一木一草残さず灰燼と化した。

したのが現存する社殿である。

再建された社殿の構造は、本殿と拝殿を接続した複合社殿で、本殿は三間社流造で拝殿は正面（梁間）三間、側面（桁行）四間の入母屋造、妻入、向拝一間を張り出し軒唐破風をつける。屋根は本殿、拝殿、唐破風とも桧皮葺で、箱棟、千木、勝男木をのせる。大正二年特別保護建造物、昭和二十五年重要文化財に指定されている。

## ◆厄除大祭（柏原の厄神さん）

厄除神社（八幡宮の摂社）

祭神

八衢彦神（やちまたひこのかみ）

八衢姫神（やちまたひめのかみ）

久那戸神（くなどのかみ）

配祀に、大物主神、武内宿禰命

厄除大祭は毎年二月十七日、十八日の両日に行われ「三丹（丹波、但馬、丹後）」一の祭りとして、大勢の参拝者で賑わい「柏原の厄神さん」と親しまれている。

なかでも宵宮の十七日の深夜より十八日の未明に

かけて執り行われる「青山祭壇の儀」は往古の道饗祭、疫神祭の遺風を伝える日本最古の厄除祭と言われている。

境内の一切の明かりが消された浄闇の中、斎場となる厄除神社の北側に「根堀じ」状に植え付けられている榊の木の周りを椎の木の枝で青柴垣に囲い青山（大きな山）を神籬としてさまざまな災いをもたらす厄神さんが降神される、祭壇には厄神さんが好まれるとされる赤色や黄色の神饌を供え、災い禍事をもたらす神々に丁重にもてなし、災い無きよう御



厄除大祭境内のにぎわい



厄除大祭参道

願いしお帰りいただくと言う神事で悪事災難を免

れ、厄難消除開運招福が授かると言われている。

## ◆厄年について

厄年の思想は陰陽道によつて大陸からもたらされたものであるが、厄年齢の算出方法は様々である。自分の生まれた年の干支の十二支の一巡ごとの厄年、十三歳、二十五歳、三十七歳、四十九歳など、六十一歳は「還暦」と呼び、生まれた年の干支に再び還る年回りと言われている。

漢字の語呂からその年の忌む厄年として、四十二歳（死に）、三十三歳（散々）、四十九歳（始終苦）などとする厄年。

厄年は男女とも七歳から始まり、七に九を足す「七起九厄」の思想。これを数式で表すと、7 + 9 || 16歳、16 + 9 || 25歳、25 + 9 || 34歳、34 + 9 || 43歳、43 + 9 || 52歳、52 + 9 || 61歳と続くものがある。

## ◆江戸時代の厄神祭、賽銭、祈禱料、福富徳分

万治二年（一六五九）に三重塔が落雷で焼失し、その再建時の日記五冊が現存している。文化九年

# 丹波のまつり

(二八二二) 七月より同十二年までの記録で塔再建の願書を京都奉行所に提出したこと、京都東西町奉行所の与力、同心、中井主水棟梁の手代らの検分を受けたこと、心柱を立て、松皮を葺いたことなどに塔造立の経緯を記してあるが、「文化十一年 記録 八幡山 乗宝寺役僧」に年頭行事の記載がありその当時の様子を窺うことができる。

正月

一、元旦より七日迄常例之通

中略

一、十五日御代参津田内蔵助殿

一、十六日祝餅配ル町方役人頭分不残也

一、十七日ヨリ厄神天氣能ク参詣甚多シ賽銭

三百九拾目有之祈禱料札拾両有之

福富徳分七十目有

一、廿一日節会客子方不残大工木挽出入

一、廿三日月待廿四日愛宕講相営ム

後略

朝日新聞、平成24年6月19日広告特集(江戸のお金事情)によれば「金一兩〓銀五〇匁〓銭四貫

文(四千文)」と言う交換比率が定められ、安心して使えるようになりました。」と記されている。そこで現代の貨幣に換算すると、賽銭三百九拾目〓三九〇、〇〇〇文を四、〇〇〇文で割ると(九拾七・五兩)となる、祈禱料は札で(拾両) 福富徳分七十目〓七〇、〇〇〇文を四、〇〇〇文で割ると(拾七・五兩)となる。合計百拾五兩で一兩十萬円として計算すると、厄神祭当日の社入金合計壹千壹百五拾万円となるが(後に比率は変化)とも記されているので金額が下回るかもしれない。

福富は富くじのことで三重塔再建の資金を集める手段としたのだろう。富くじの番号を記した木札と、村名と名前を記した木札がわずかながら残って



柏原八幡宮三重塔

いる。笹山、下竹田、横田村、多田村などと記されており、現在の篠山市や京都府に接する丹波市市島町下竹田の地名を見ることができ、遠近の参拝者で賑わったことが推測できる。

## ◆鉄道の開通と祭日の変更

正月十七日、十八日の両日に執り行っていた厄除祭は、明治五年（一八七三）に太陽暦の導入により年取りの意味を持つ節分と正月がずれ込むため、太陽暦の日に振替え、古儀を守ってきたが、阪神地方から柏原を経て舞鶴に通じる、阪鶴鉄道の施設工事が明治二十九年春から開始され、同三十年二月に大阪より池田間が開通。以後同三十二年一月三田、三月篠山、五月柏原駅が開業する運びとなり、七月には福知山に達するまでになった。

阪鶴鉄道の開通を契機に汽車による遠来の参拝者の誘致に取り組んだようで、明治三十三年より毎年変動のない祭日として二月十七日、十八日に変更し現在に至っている。

明治三十七年には福知山から舞鶴間が竣工とな

り、さらに山陰本線とも乗り継ぐ経路が確保され「三丹（丹波、但馬、丹後）」といわれる多くの人が訪れる厄除大祭となった。

## 〈柏原八幡宮からのお知らせ〉

平成三十六年（二〇二四）の御鎮座一千祭の奉祝の一〇〇〇年歳に向け本殿の屋根葺き替えや本殿彫刻の彩色のやり替え等の事業をこれから行っていく予定です。柏原八幡宮の情報や一〇〇〇年祭の情報、郷土の情報なども含めて当宮のホームページに掲載していきますので是非ご覧ください。（柏原八幡宮ホームページ <http://www.kaiarahachiman.jp>）

明治期の神仏分離の難を逃れた名残は三重塔前の「八幡文庫」の名残に見る事ができます。当時の丹波人の郷土の鎮守様を守る心意気には本当に頭の下がる思いで、現在お守りしておる我々も負けずに神社護持運営に努め、一〇〇〇年祭に向けて邁進していきたいと考えます。



# 丹波のまつり

## 柏原八幡神社と厄神さん

北川 敏彦・八千代（柏原町）

### ◆柏原八幡神社と厄神さん

柏原住民の心の寄り所である柏原八幡神社の森がどっしりと柏原の町並を見守っています。何百年もの間、柏原の人々の心の中にいろいろな思い出が残っている心の故郷でもあります。

八幡神社のお祭りは、二月の厄除け大祭と十月の秋祭りがあります。とりわけ二月に挙行される「厄



神さん」が、多くの楽しかった思い出を残しています。

昭和三十年前後の幼少期を過ごした私の厄神さんの思い出を



昭和 26 年頃の屋台の賑い（丹波新聞社提供）

りが出て、漫才や演芸をしていました。町筋には沢山の露店が並び、ガマの油売りやいかさまの当て物等子供心をくすぐる、年に一度の楽しいお祭りでした。

地元では、厄年の人が一重ねの餅を神様にお供えして、半分を持ち帰り、近隣知人に切り分け



昭和30年頃の厄神さんの賑い（丹波新聞社提供）

て、大勢の人に厄払いをしてもらう習わしがありました。近年はあまり耳にしなくなりました。

三丹随一といわれた厄除大祭も少しずつ変わりつつあります。昭和四十年代には三百店を上まわる露天商が出店していました。今年は百六十六店と減少しています。参拝者も平成元年頃は十万人と年々増加していましたが、今年の参拝者三万七千人となりました。

現在柏原の住民数七千八百人の町に五倍もの参拝者で大賑わいの二日間である事に変わりありません。

地方の経済は低迷し続けています。柏原の町も少しずつ寂れつつあります。町内の商工業者数も減少の一途

です。この状況に歯止めをかけ、新たな活力を求めて武者行列を繰り広げる「織田まつり」、盆踊りを盛大に行う「夏祭り」、秋には地元産物の販売で賑わう「うまいものフェスタ」と、新しい祭りも定着しつつあります。

祭りは年々様子が変わってきました。神仏の行事に併せて住民参加のお祭りから、住民主体の考えや、生活文化の中から発生したお祭りが盛大に行われつつあります。住民の文化意識が地方のお祭りの特徴として現れ、住民相互の繋がりの豊かさとなつて行くものと希望を抱いています。

皆様、帰丹の節には、柏原八幡神社にお詣り頂き、丹波住民の心の故郷に触れていただければ幸いです。

（敏彦・昭和15年青垣町生まれ／信用金庫専務理事、丹波市柏原町自治協議会会長歴任後、中井権次頭彰会役員／八千代・昭和19年柏原町生まれ／元氷上信用金庫／柏原町在住）

## 厄神さんの思い出

西崎 祥（柏原町）



“厄除さん”で有名な八幡神社は、柏原町とその周辺の守り神として終戦前までは誰もが最敬礼をして通るのが常であった。我々子供も学校に行き帰りは勿論、どんなに急

いでいる時でも鳥居の前では立ち止り、ペコンと頭を下げて通る習慣があった。また、毎週日曜日の朝は、その近くに住む我々小学生が竹箒を持って集合し、上級生の指示により、あの百数十段の石段を掃き清めるのだが、近所のお兄さんやお姉さんとの共同作業なので、とても楽しかったという記憶がある。お掃除が終わった後は階段の外の山林を走り廻り、急斜面を掛け降りたりターザンの真似をするなどスリル満点の遊びなので、みんないきいきしていて怪

我などする子もいなかった。

また、裏山の高鉢山にはよく扱葉こくばかきに行き、松の落葉を沢山東ねて背負って帰ると、母はとても喜んでくれた。かまどやお風呂の焚き付けに使っていたからで、松の木の根元などに松茸の生えているのを見ても別段興味もなく採ることもしなかった。それよりも山へ登る途中で見つける山苺は甘ずっぱくて美味しく草むらの中で採っては食べていた。

その八幡神社最大の行事が二月の厄除祭で、私達子供にとっては一年の中でも一番大きなイベントであり、その日の来るのがとても待ち遠しかった。

戦争が終わり平和になった喜びも加わり、かなり遠くからも大勢の人がお参りに来ていた。満員の臨時列車が柏原駅に着くたび、どっと人が溢れ出して八幡さんまでは身動きも出来ない程にふくれ上がった。街の狭い道路は押すな押すなの人達、その上、道路の両側には出店が連なり、ますます動きにくくなる。物売りの大声や客寄せの声など入り混じって祭りは最高に盛り上がっていた。その賑わいは本当にすごかった。

私達は学校が午前中で終わるので飛んで帰ると、すぐ街に繰り出し人混みの中に混じり、大人の人の足と足のすき間をくぐり抜けるようにして並んでいる出店を一軒一軒見て歩く。物のない時代だったこともあって陳列されている品々はどれもこれも珍しく、田舎育ちの少女の目には、それらすべてがとても上等で夢多き物に見えて幼い胸は益々ときめくのだった。

店々の中には<sup>てきや</sup>的屋らしき店も多く怪しげな雰囲気のお店も多少あったけれど、あの“天然の美”のメロディーが響いて来るともう家にじつとしていられず賑わいの街を何度も何度も見て回るだけで充分楽しかった。二日目の夕方になると早々と店を片付け始める所もあって、何となく淋しく残念な気持ちになり、このまま時間が止まってしまわないかなあ等と思いながら名残りを惜しんでいた。

厄除さんのもう一つの楽しみは、入船山の麓にある広場、<sup>いちにわ</sup>市庭に毎年サーカスが見世物小屋かがやつて来てお祭りを盛り上げていたことである。厄除さんが近付くと先にテント小屋を作るため、大勢の人

がやって来て木材を組み長い棒を縄で縛って立てたり屋根を張ったり作業が始まり、完成する頃には座員も加わり興業するための準備をしながら暮らしていた。近所に住む私達もそれが気になって毎日うるうると近寄っては様子をうかがい話題もさぐり集めた情報などで興味深々だった。

そんなある日、学校から帰ると知らない男の子が我家の唯一の暖房である掘り炬燵にチヨコンと座っていた。母が寒そうに外で立っていた男の子に声をかけ、ちよつと暖まっていこうよにと連れて来たのだった。痩せて色白の少年は母が聞く事には小さい声でモソモソと喋っていたが、私はサーカスの子と聞いただけで可哀想な子という先入観があり、何を話していいのか戸惑っているばかりだった。名前は確か「としお君」と言ったが、何が気に入ったのか、それから次の日も、また次の日も遊びに来て、だんだん笑顔も見られるようになり、一緒に遊んだり食事として帰るようになっていた。

十二、三歳くらいの小柄な少年で、親子で空中ブ

ランコをしているというので、私達もお祭りの日には観に連れて行ってもらい、手から手へ投げられては、あつちからこつちへ飛ばされるのをヒヤヒヤしながら観たことを覚えている。二日間のお祭り興業が終わると小屋を解体して引き上げて行くその日まで、家に来て母にもよく懐いていた。

それから何年か経ち、私もすでに上京していて知らなかったのだが、ある時、母が話の中で「あのとお君が訪ねて来てね、家出して来たと言うから、ゆつくり話を聞いてやり、一晩泊めて話し合ったが、やっぱり親の元へ帰るのが一番良いからと説得して帰したのよ、それからどうしているかしらね……」という話を聞いて私も久し振りに彼のことを想い出したのだが、厄除さんの話が出ると、今でもあのサーカスのジントの音と共に少年の姿が想い出され、昔のことを懐かしく偲ぶ昨今である。

(昭和12年生まれ／日本舞踊家、柏原の自宅と丹波新聞社にて日本舞踊講師／横浜市在住)

## 厄神さん

小竹政孝(柏原町)



野口雨情作詞の「柏原小唄」は、「名さへ目出度い入船山に 町のまもりの八幡宮……」で始まります。入船山は、柏原町本町にあり、その頂に八幡さん(柏原八幡神社)があります。本町で生まれ育った私にとって、八幡さんは、幼稚園、小学校、高校の往き帰り(中学校は別の方角にありました)、遊びや用事で町に出た時など、いつもそこにおわし、恐れ多いことながら、肌染み込むまで馴れ親しんだお宮さんです。

それどころではありません。私は、生まれ落ちた時から生涯、八幡さんに守られています。八幡さんの千種宮司様(ご当代の先々代に当たられる方)が、私を含む男三兄弟の名付け親なのです。宮司様の命

名は、長男、俊宏（としひろ、昭和十四年生）、次男、則克（のりかつ、昭和十六年生）、そして三男、私政孝（まさたか、昭和二〇年生）です。どれも素晴らしい名です。特に私の名は、日々身中に気を注ぎ込み続けてくれている実感があり、大変有難く思っています。

八幡さん最大の祭は、二月十七日、十八日の厄除例大祭、皆が言う「（柏原の）厄神さん」です。この時ばかりは、町中の人々の気持ちも相当に昂ぶります。学校は午後休み。篠山や福知山の高校に通っている柏原っ子が、学校を無断欠席する事件もちょくちょくありました。

柏原の二月の平均気温は摂氏三度台の前半で、霧まじりや、雪がチラつくこともしばしばあった厄神さん。その凍るような寒さの中、特に宵宮（十七日）に押し寄せる人、人、人の波は尋常ではありません。昭和二十年代の後半から三十年代の前半頃のこと。人口六千人強の町に、十四、五万人もの人が溢れるのです。柏原駅前も、八幡さんに向かおうとする人々で一杯となり、身動きができないほどでした。

八幡さんは、本町通り（全長二百三、四十メートル）の東の端（と駅から続く古市場通りの北端がぶつかったところ）にあります。私の実家からは、本町通りの西の端から町に入り、真っ直ぐ八幡さんへと向かう格好になります。

六歳か七歳の頃、宵宮の夕闇時、母にギュッと片手をつかんでもらい、本町通りにさしかかろうとした時です。道幅一杯の人で路面がほとんど見えません。見えるのは遠くまで続く人の頭ばかり。その時です。不思議なものが見えます。人の頭、頭、頭、々、々、…の上二帯に、湯気か？煙か？何だろう？白いものがゆらゆらしています。少し長じて分かりました。あれは、凍てつく寒気の中、群衆の吐く息と体熱とが、目に見えるほどの水蒸気を産んでいたのです。

厄神さんの思い出は沢山ありますが、紙幅に限りがあり、以下に一部を羅列するのみです。

厄神さんの小遣いと、連れて行ってくれる人（保護者）が、年齢と時代と共に、変わったこと。幼稚園から小学低学年は二〇円から三〇円で、母。小学

## 丹波のまつり

高学年は五〇円ほどで、兄や姉。中学、高校は百円から二百円ほどで、単独行動。

道の両側には、露店が隙間もなく続いています。おもちゃ、おやつ、鍋・茶碗、包丁などの刃物、コルク鉄砲の射的……。甘い物に飢えた時代、綿菓子には毎年コロリ。

市庭（現在、丹波市の駐車場になっている広場）の見世物小屋。出し物は年により色々変わる。ろくろ首、蛇女、人魚もあったか？今は倫理上文字でできない見世物も。客寄せのジントは、いつもきまってる「美しき天然」。呼び込みのおじさんのドスのきいた大音声、「親の因果が子の因果……。さあ見てもらっしやい」不気味で怖かった。

今は建物がなくなつた、水上郡公会堂での催し。伊藤久男の「イヨマンテの夜」、出だしの声の何と大きいこと。もみあげの濃さ、長さに、また仰天。松山恵子の「だから云つたじゃないの」、甲高いが心地よい声。大きなスカート、ハンカチ。「おケイチちゃんはね」と自分のことを言う。藤田まこと、白木みのるの「てなもんや三度笠」、まだテレビ放映が始

まる前のことだったかも？何と言う贅沢。

八幡さん。一の鳥居をくぐってすぐの所の傷痕軍人のおじさん達。八幡さんの石段は、一段一段の高さを低くしてあるが、実は段と段の間には傾斜がついている。八合目あたりにある社務所の手前くらいで、若者でも結構息があがる。「おっ、良く来たな。元気で何より。良かったのう」と声が聞こえるような、荘厳な拜殿、本殿。神社には珍しい三重塔。神仏習合の名残。維新の廃仏毀釈をかくぐり、よくぞ残つた。柏原のあちこち、遠いところからも入船山の頂に九輪と塔の三層目が望め、ほんとうに美しい。有難し八幡さん。

そして、父が昭和五十七年二月十四日に亡くなりました。十五日通夜、十六日葬儀。十七日は厄神さんの宵宮。町内の皆様には大変ご迷惑をおかけしました。私の実家も、今はありません。

最後に、願いです。

厄神さんの人出は往時に比し、かなり減っている由。丹波市、柏原町、頑張つてほしい。近郷に呼びかけ、こんな言葉があるかどうか知りませんが、祭



り人（マツリート）を創出する仕掛けを！

また、かけがえのない神社の建物、ほかの物であつてはならない歴史ある檜皮葺。是非々々大事に守つてほしい。遠いにしえの姿そのままに。

（昭和20年、柏原町生まれ／銀行勤務3年余後、日本揮毫油、現日揮㈱に勤務。平成25年1月には、日揮が、皆様に変えて大変ご心配をおかけし、申し訳ありませんでした／鎌倉市在住）

## やくじんさんの思いで

谷 敬 三（柏原町）

丹波に生まれ、故郷柏原の八幡山と生きた者にとり、「やくじんさん」には特別な響があります。町の守護神である八幡山で催されるお祭りですから、子供の頃からの記憶は鮮明です。「厄徐祭」が「厄神山」とされ、丹波の訛りや親しさを込めて「やく

じんさん」とされて来たのでしょうか？日本中に厄除け神社があり厄除けのお祭りが催されていますが、こうした呼び方を聞いたことがありません。

昔から「三丹一」の厄徐祭と呼ばれ二月十七日と十八日の両日に五万人が集まり、「やくじんさんが過ぎると漸く丹波にも春が来る」と言われて来ました。冬のお祭りなので特別に神輿などが出る訳ではなく、五万人の参拝者は黙々と八幡山へのお参りを目指して石段を上り、鐘を突きながら家族の一年間の無病息災を祈ります。

これだけの人が一度に集まりますので、町の商店街にとつては一年で最高の売り上げが期待出来る書き入れ時です。町内の商店は商品展示のために道路にはみ出さんばかりに軒を伸ばし、食堂は目いっぱいテーブルの数を増やします。空きスペースには香具師の皆さんがそれぞれのテントを広げ、「商品」を陳列します。町中が華やぎ、鉄砲のコルクで景品を落とすゲーム、金魚すくい、如何にもインチキクさい古美術の類等から、お好み焼き、焼きそば・焼うどん等の食べ物も多く、綿あめも人気です。



## 丹波のまつり

柏原駅から八幡山に続く銀座通りから古市場通り、石田本通りから八幡筋や本町にかけては店が連なり、歩くこともままならないぐらい賑やかでした。八幡山の麓で西楽寺の向かいにある「市庭」にはサーカスなどの見世物小屋が建ち、放射能で首が長くなった女性などの触込みには、如何わしさと不気味さを感じながらもついつい入場券を買ってしまつたものです。

参拝のために各地から集まつた皆さんは、子供や孫の手を引きながら幸せそうな顔をしていました。各家庭に白黒テレビが普及し始めた昭和三十年代から四十年代前半までの楽しい記憶ですが、一方では白い服を着た腕や足に傷が残る傷痍軍人の方が、アコーディオンを弾きながら鍋に募金を募られており、戦争の傷跡の残る戦後期でもありました。

町中が熱気で沸き上がる二日間ですが、町内で書籍業を営んでいた実家の二日間は忙しく、子供の自分も店番の戦力として期待されていました。手軽なお土産として子供用の雑誌や物語本の人気が高く、初日の朝には山のように積み上げていた雑誌類が、

二日目の夕方には大方売りつくし柵も隙間が見えるようになっていました。娯楽の少ない時代の、折角柏原にお参りに来たので孫にお土産の本でも買ってあげよう、とするお婆さんの声が今も耳に残ります。小学校・中学校は臨時の半ドンでしたから、帰宅し昼飯を食べ終わると店番に加わり、客足の無くなる夜まで手伝いは続きます。大阪の心斎橋で書籍業を営んでいた叔父・丸山哲郎もしばしば手伝いに来ていました。

こうしたことから、「やくじんさん」期間中の町の賑わいをそれほど楽しんだ記憶が無く、漸く二日目の夕刻の店が少し空いた頃に、慌ただしく町内を見て回つたものです。

当時は催し物の多くが郡公会堂や町公民館で行われていました。正月の書き初めの作品展が開催されており、書道を習っていたことから書き初め展には関心が高く、崇広小学校からの帰り道に見に行つたものです。入選した時などは親と一緒に行きかけたのですが、母も忙しく無理でした。

期間中の催しとして、木の根橋のたもとの広場で



植木市が開  
催されてお  
り、高校生  
の時に祖父・  
貫一が梅の  
苗木を買っ  
て来ました。

実家の裏の畑に植わっていた大きな梅の老木の将来を考え、祖父は苗木を育てその後を継ぎたかったようです。

たまに実家に帰り畑を歩くと梅の木が大きく枝を張っていますが、四五年前の祖父との会話が思い出されます。

(昭和26年、柏原町生まれ／神戸製鋼所退社後に(一社)日本伸銅協会に勤務／65歳で退職後は社会保険労務士としてお役にたきたい／東京都在住)

※ ※ ※

45号の「丹波のまつり」では、44号に続き、シリーズ化する事になり、「厄神さん」として丹波市や近郷の人々並びに他地域の人達に敬愛され親しまれる

丹波市最大の神社である柏原八幡宮をテーマに、宮司さんには先導文をお願いし、関東地区にご在住で様々な分野でご活躍中の関東氷上郷友会の三名の会員の方と地元柏原ご在住で地元柏原の世話役等で苦勞頂いている北川様ご夫妻を含め四組五名の方々に厄神さんへの思い出を主テーマにご寄稿頂きました。幼少の頃より親しまれた厄神さんの其々の思い出や、丹波最大の「まつり」への熱い思いをお書き頂きました。中には厄神さんを地域興しの観点からも一層盛り上げて欲しいとのご提案の文章もあり、斯くも適切な寄稿者を紹介の労を執って頂いた郷友会員の方々にも厚く御礼申し上げる次第です。

国宝指定の堂々として且つ優美な古来の日本伝統建築の本堂を擁する柏原八幡宮が丹波市や丹波地域の人々の熱い思いや我々の様に地域外に住まいする縁ある人々の応援を得ていや栄え、畏敬され。愛される「厄神さん」として立派に永續する事を祈念する所です。

〈企画・構成〉大野義昭(昭和19年山南町生まれ／元化学会社勤務)

◆足立かをるさん

あつと云う間に時が過ぎていきま  
す。私も81年と8カ月が過ぎ……でも  
毎日明るく楽しく充実した日々を生か  
され感謝のみです。旅行も大好きでし  
たが2010年4月11日熱海に旅行  
中、足がもつれて転び骨折して高齢者  
専用マンションに入居して3年2カ月  
になろうとしています。でも病気はし  
ていませので元気で足立さんのよう  
な方はめつたにいないと笑顔で暮らし  
ています。というわけで「ふるさとの  
会」には伺えませんがよろしくお伝え  
くださいませ。

◆上村愛子さん

実家の柏原町屋敷の武家屋敷を処分  
いたしましたので、故郷は交通便利に  
なつても帰るものでなく思うものにな  
つてしまいました。せめて丹波弁、  
丹波のお話を伺いに「ふるさとの会」  
には行かせて頂きます。

◆梅田節二さん

先月に墓参を済ませてきました。柏  
原駅から氷上市辺までの大型店舗と神  
姫バスの乗客が成松迄5人、佐治迄は  
小生1人の貸し切りで複雑な思いを抱  
いて帰郷いたしました。毎号レベルの  
高い「山ざる」を本当にありがとうご  
ざいます。編集委員の方々のご健勝を  
心からお祈り申し上げます。

◆大槻朱里さん

大変ご無沙汰しております。皆様い  
かがお過ごしでしょうか。この度もそ  
の日は仕事が入つており出席できませ  
んがお許しください。素敵な会になり  
ます事を心よりお祈り申し上げます。  
いつも「山ざる」をお送り下さりあり  
がとうございます。

◆大野善三さん

元気にしていますが、80歳を過ぎて  
から極端に歩行のスピードが遅くなり  
ました。それでも好奇心旺盛の日々を

送っています。「長生きするには、頭  
を使うこと」と昭和19年頃文化勲章を  
受賞された物理学者の発言を思い出し  
ます。これからも、この精神で過ごし  
たいと思います。

◆門山壽子さん

いつもお世話になっていきます。何時  
もながら土曜日は御休みがとれませ  
ん。仕事はぼちぼち、遊びはしつかり、  
と思つていますが「ふるさとの会」の  
ますますのご発展をお祈りしておりま  
す。

◆菊池洋子さん

この度は80歳のご招待を頂き本当に  
ありがとうございます。それなのに  
欠席でまことに申し訳ございません。  
主人の透析のお供と、生徒のレッス  
ン(声楽)で毎日が過ぎております。80  
歳が14名もおられるとは驚きました。  
どうぞ皆様いつまでもお元気でいらつ  
しやる事を心よりお祈りしています。

◆木下恵子さん

「山ざる」は2〜3年前の本屋の方の投稿に感動しました。現在司法書士法人とコラボレーションしてケアマネージャーの業務をやっています。高齢者の医療、介護、法律、経済問題について総合的に援助できるよう取り組んでおります。少しずつ自分自身のユートピアを目指しながら歩んでいます。

◆久呉道子さん

立派な関東水上郷友会誌をありがとうございます。40年間の大阪暮らしのせいか存じ上げない事ばかり忘我の心地で拝読させて頂いております。ふるさと会の盛大さが見えるようでございます。かような会に入れて頂き恐縮至極、高齢故欠席させて頂きます。

◆小松京子さん

平成25年9月2日丹波市を豪雨が襲いました。私は著名な国語学者の芦田

恵之助氏の災害の如実な記録を思い出しました。「丙申水害実況」という福知山地方の水害に付いて書かれたものです。そうこうしているうちに、台風18号の主に福知山市の水害。身を以て災害を体験された丹波市、福知山市の方々はさぞ恐ろしかったでしょう、復興をお祈りいたします。

◆齋藤陽子さん

ふるさとの会へのお誘い、いつもありがとうございます。当日は先約があり欠席させて頂きます。「山ざる」を拝読し丹波の様子を色々思い出しています。ふるさとの会の発展とご盛会をお祈りしています。

◆正呂知悟さん

「山ざる」が我が家に届くたびに一年が早いなあ。ところで私は高校を卒業して何年になるだろう。写真を眺めながら丹波も変わったなあ、そんな事を思いながら読んでいます。丹波の情

報を知るのは同級生の仲間と「山ざる」編集委員の皆さんの奮闘に感謝しつつ、「ふるさとの会」の盛会を祈ります。

◆谷 敬三さん

今年の「山ざる」には油絵の作品を掲載して頂きました。有難うございます。恐縮です、今後とも精進致します。今年のふるさとの会は、当日関西大学で日本銅学会が開催され、出席せねばなりませんので失礼させて頂きます。皆様に宜しくお伝えください。

◆谷口 捷さん

近況・インド独立に貢献し、インドでは教科書にも載り銅像も有る「メイジャー・フジワラ」はインドで一番知られた日本人であり、しかも丹波出身の先輩であると本年初頭に知人から教わり、新しく出版された「F機関」（藤原岩一著）を読む。真に人の心を動かすのは権力や地位でなく語学力でもない。民族の相違を越えた愛情と誠意が

であることを教えてくれ、この所久しく味わうことのなかった感動を受ける事が出来ました。またこういつた立派な人の努力の結果も何が悪くしてしまふのかも知ることが出来ました。

◆千葉淳子さん

いつもお世話さまでございます。「山ざる」を見る度に出席したく思っておりますが足腰が思うようにいきませず、ご無礼しております。どうか皆様方にくれぐれもよろしくお伝えくださいませ。「山ざる」がいつ迄も続きますように心より願っています。

◆辻安左衛門さん

80歳を迎えるに至りご丁寧なご案内状を頂き誠に有難く感謝で一杯です。早速に馳せ参じたい思いはございますが、一昨年末以来病氣静養中に付き誠に申し訳ありませんが欠席させて頂きたく思います。ふるさとの会の益々のご盛会をお祈り申し上げます。

◆前田和彦さん

最近歩行がやや困難な為移動は自家用車で動いていますので旅行もいけなくなってきました。中学の同級生も徐々に集まりが少なくなってきました。ご盛会をお祈りいたします。

◆吉見弘文さん

ご案内ありがとうございます。週1回の割で丹波に帰っています。週1さとは今も変わらず温かく迎えてくれます。「山ざる」の表紙を飾る笹倉氏の「フロムザパスト」良い絵ですね、丹波の母を思い浮かべます。(伊丹市在住)

◆安達啓介さん

いつも「山ざる」を送っていたいただきありがとうございます。最近厚みも増え内容が充実してきたように思います。

◆安達陽一さん

大変ご無沙汰しており申し訳ございません。今回は私ごとながら参加が出来ない事を深くお詫び申し上げます。ご成功をお祈り申し上げます、まずはお詫びまで。

◆塩見美笑子さん

大変お世話になります。現在療養中ですので失礼いたします。

◆塩味みつえさん

今年も「ふるさとの会」のお誘いをいただきありがとうございます。申し訳ございませんが体調が良くありませんので欠席させていただきます。皆様のご健康をお祈りいたします。

◆兼子昌明さん

毎年募参りに丹波に帰省しますが今年石生駅近くにある山田旅館に泊まりました。ご主人は私の中学時代の同級生です。40年振りの再会でした。

◆高見嘉都司さん

お蔭さまで元気にやっております。皆様のご健康を心からお祈りいたしますとともに、会の益々のご発展を期待しています。

◆笹倉良正さん

歳相応に変わりなく過ごしております。ご盛会をお祈りしています。

◆山口敏之さん

オランダ在住のため返事が遅れてすみません。年4回ぐらいでしか帰国できませんが母のいる丹波には毎回帰るようにしています。歳をとるとますます望郷の念が強くなるようです。

◆若森敏郎さん

昨年11月に家内をなくしてから一人暮らしになり、毎日雑用に振り回されています。まだまだ元気ですが11月16日の会は先約があり欠席いたします。会長はじめ皆様によろしく。

◆出町京子さん

丹波通いも25年、こちらでは学び続け丹波では教え続け、9月には第16回舞踏公演も終わり、10月11月12月は主にボランティア活動で人に喜びを与えることで私共も喜びを得る、出席できず残念です。

◆小田富士夫、明子さん

富士夫・9月19日から筑波大の病院に入院中。明子・ほとんど毎日病院に行き帰りしております。でも2人共歳相応の元気はあります、皆様方もどうぞ御身大切になさってくださいませ。

◆松本栄二さん

いつも充実した編集による記事を読むことができ感激しています。同期生が少なくなつてゆく事は寂しいですね。今度の集いにも先約があり出席できません、残念。

◆植木一夫さん

上京以来55年小生81歳、妻78歳共にお蔭さまで年金他の収入にて気楽に暮らしております。皆様方のご健康をお祈りいたします。

◆杉岡明美さん

すばらしい「山猿」をありがとうございました。元気なのをいい事に午前午後毎日のように出歩いておりまして、年には勝てませんでした。メニューでダウン、以来1日1か所を心がけております。当日は止むなき事情があり欠席いたしますがご盛会をお祈りいたします。

◆勢川雅弘さん

81歳になっていますが、週日は特許事務所へ顔を出しています。

◆石倉良介さん

元氣でお寺参り、太極拳に精を出しております。

◆足立正美さん

幹事の皆様ご苦勞様、お世話様です。このところ足の具合他外出が不自由で欠席させていただきました。

◆足立静雄さん

「山ざる」送っていただきありがとうございます。大変楽しい気分です。来年は出席したいと思っていますが、これからも楽しい情報を期待しています。

◆足立 稔さん

いつもご案内いただきありがとうございます。郷土誌「山ざる」で懐かしいお名前を見かけ往時を偲んでいます。丹波を出てもう65年になりました。

◆足立 眸さん

いつも会員のためにお忙しいのにお世話さまになりましてありがとうございます。今回は病氣療養中のため残念ですが欠席いたします。

◆大垣忠男さん

年齢の割には元気に暮らしています。健康の為最近社交ダンスを始めました。

◆大録和代さん

いつもご案内いただきありがとうございます。昨年は初めて出席させて頂き知人にも会え楽しいひとときを過ごすことができました。今年は何の用と重なってしまい残念です。ご盛会を心よりお祈り申し上げますと共に皆様のご健勝ご多幸をお祈り申し上げます。

◆田中一美さん

大変ご無沙汰しておりますのに、いつも「故郷の会」へのご案内、「山ざる」を送っていただきありがとうございます。地域の皆様に恵まれ、楽しく充実した日々を過ごしております。

◆浮田信子さん

ご案内を頂くばかりで出席できず申し訳ありません。「山ざる」に懐かしい想いを重ねながら読ませていただいております。世の中の話題は暗く淋しいことが多いですが東京オリンピック開催までは少なくとも前向きに前向きに歩みを進ぶ事が出来るよう努力して日常生活をいたしております。末筆になりましたが皆様お元氣でご活躍なさってください。

◆福田治子さん

すみません。歳とともに遠出（横浜から東京までも）でも私にとっては遠出なのです）が億劫になり失礼します。私より年長の出席者にはお叱りを受けさせていただきます。

◆野村節三さん

所用のため今回は欠席いたします。地元では震災復興委員会や「大船渡昔がたり」編集委員会の仕事や高齢者大

学の講師などを務めています。会員諸氏のご健勝、「ふるさとの会」の盛会をお祈りしています。

◆葉山 勝さん

昭和10年生生まれの私です。母親が上小倉出身の関係で国民学校2〜3年の時疎開で宗広小に転入、約2年学び先生のスカートめくり等をし廊下に立たされたり、やんちゃなものでした。家内が沼貫出身で一度「ふるさとの会」に参加した事がありました。2012年12月に家内は亡くなりましたが、今年はお出でいただき、10〜11年生まれの方とお会いできればと期待しています。

◆廣瀬安伸さん

当日は元会社OB会の総会で会計報告をすることになっており残念ながら欠席させていただきます。ご出席の皆様のご健康と当会のご盛会を家内共々に心よりお祈りいたしております。

◆木呂子恵美子さん

いつも大変お世話になり有難うございます。「山ざる」嬉しく頂戴いたしました。表紙の絵から何とも心温かいやすらぎを頂いています。鉄瓶の湯気、シャボン玉、ああそれからネコちゃん、が息子がシンガポールから連れ帰った10歳のミータンにそっくりなのです。

◆足立美都子さん

13年振りに関東に戻ってまいりました。友人に誘われて「ふるさとの会」に出席する事にしました。どなたにお会いできるか楽しみです。

◆形田恒夫さん

残念ですが今回は別のOB会(37年勤務した会社)に出席する予定に付き「ふるさとの会」には出席できません。昨年初参加し、今年も！と考えていました……。

◆訃報

平成25年10月から26年8月までに事務局にご連絡いただいたものです。掲載して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

福井 謙三様	平成16年
久安 敏夫様	平成19年
田原 吉幸様	平成21年
西村 道子様	平成23年2月
荒木 泰雄様	平成24年9月
小田 利江様	平成25年4月
井上 一也様	平成25年5月
白井小五郎様	平成25年11月16日
広瀬 恭子様	平成25年12月
逢阪サダ子様	平成26年1月28日
小谷 崇様	平成26年1月29日
森田 清子様	



■会員が書いた本

野村節三著

『北里柴三郎と後藤新平』

東海新報社／定価本体2500円

表紙に写真入りで並んだ二人、共に近代史に著名な人物ではあるが、どうも事績の違いそうな両者が結んだ関係とは？ と少しばかり疑問を抱きながら開いてみた本書。

そこで、著者は「まえがき」で、その疑問に答えるように書く。

「微生物研究の草創期に病原細菌の研究によって世界的な業績を挙げ、近代の細菌学と免疫学の基礎を築いた肥後国（熊本県）出身の細菌学者・北里柴三郎博士と、近代日本の内政・外交に大きな足跡を残し、中でも前半生の卓越した衛生行政によって伝染病の予防対策に貢献した陸奥国（岩手県）出身の宮僚政治家・後藤新平伯爵とは生涯にわたって深

い関わりがあった」と。

そして「二人が、主に活躍した明治・大正時代はコレラ、ペストやインフルエンザ（スペイン風邪）などの伝染病（伝染性感染症）が世界的に蔓延し、夥しい死者が出て当時の人々は恐怖におののき、社会に大きな影響を及ぼした。（中略）百数十年前に「先見の明」をもって、近代日本の医学と公衆衛生の向上に献身的な努力を惜しまなかった北里柴三郎博士と後藤新平伯爵の足跡を顧みることにも有意義なことと思われる」と執筆の動機を明確に書く。

両者が研究上で親交を持ったのはドイツの細菌学者、ロベルト・コッ



ホの研究室においてである。先輩格の北里はすでに同研究室で破傷風の血清療法の創始者として世界的な細菌学者になっており、留学前まで反目し合っていた二人は互いの業績を認め合い、将来に向け絆を結ぶ。

著者の野村節三氏は、北里研究所と北里大学水産学部教授として43年間奉職し、定年後の現在も岩手県大船渡市に住む。先の東日本大震災では幸い被災を免れ、本誌に三陸地域の災害状況と復興の足取りをレポートして連載していたらいている。

科学者でもある著者は、本書の執筆においても克明緻密である。数えきれなかったが、本書に登場する人物は六百名以上にもなる。それは義侠心に富んだ二人の人脉の広さを物語るが、それぞれが明治人としての骨格を備えた人物として登場し、こういう人物によって近代日本が形成されたことを改めて思い知らされる著書である。

（池田 忍）

■会員が書いた本

松沢成文・鴻谷正博共著

『二宮尊徳の遺訓』

ぎょうせい／定価本体一四一九円

副題として「混迷のいまを生き抜く知勇」と書かれている。共著者の一人、青垣町出身の鴻谷正博氏は『山ざる』43号に「報徳の巨星―佐々井さんの思い出」なる標題で、報徳学の泰斗と称される親子の話の中に「佐々井信太郎氏は氷上町葛野の出身。子の典比古氏は小田原生まれながらも、本籍は最後まで丹波の葛野であった」との文を寄稿しておられる。

この本の序章で「なぜ今、二宮尊徳なのか……江戸後期の農政家・農村復興の指導者である尊徳の珠玉の教訓を高弟が著した『二宮翁夜話』『二宮先生語録』の中から、テーマ別に十章立てて七十項目に整理し、二宮尊徳に造詣が深い鴻谷正博氏と

ともに、私なりの解釈や見解を加え、とりまとめた次第である」と、前神奈川県知事・松沢成文氏が紹介しておられる。実はこの本は44号で紹介された『二宮尊徳の破天荒力』の第二弾であり、鴻谷氏は第一弾でもサポートされたと聞き及んでいる。

さて、二宮尊徳。

「♪柴刈り縄綱い草鞋を作り／親の手を助け弟を世話し／兄弟仲良く孝行尽くす／手本は二宮金次郎」と、幼い頃に唄ったものだ。平明な言葉にこそ真実は表れるものであると、口遊みながら一冊を読み進んだ。薪を背負い本を読む像も記憶に鮮明だが、それは苦節の少年時代の姿であり、その経験が類い希な知勇と実行

力を持つ指導者を育んだ。

「プラス思考」「リーダーシップ」「ボランティア」「ゆとりや遊び・心の余裕」などなど、言い換える現代にクロスする訓えが満載である。平たく言い過ぎたが「至誠」「分度」「二円融合」「勤労」「推譲」「積小為大」等、これらの尊徳思想は現代を代表する財界人や経営者に大きな影響を及ぼし、混迷日本を再生させるカギが内蔵されている、と記されている。

丹波育ちの私には『語録』一五四

「深山には雪があり、谷の水は凍り、寒気が身にしみるときでも、川辺のねこやなぎが芽を出したなら、もう春の訪れで、氷や雪があつても無いと同然である。……国家が衰退し、田畑が荒れ、借財が山のようにあつても、国君や家老で深くこれを心配する者が出れば、衰微も荒地も借財も、もう無いと同じである。……」の四季と思想の融合が染み渡った。

(原谷洋美)



■郷土が登場する本

内田康夫著

「遺譜 浅見光彦最後の事件」

上・下巻

角川書店 / 本体各1,700円

テレビドラマでも人気の高い浅見光彦シリーズは、これが115冊目となる。その「最後の事件」の舞台として、ドイツ、オーストリアと並んで丹波（丹波市と篠山市）がふんだんに登場する。

戦前にドイツの大指揮者、フルトヴェングラーが書いたとされる楽譜がドイツ使節団から日本側に贈られ、元特務機関将校で現在は篠山の老宮司が戦後も保管しているという。事件はそれを巡って展開。祖母が70年前にこの楽譜に関わったというドイツ人女性ヴァイオリニスト、アリシアが「シューベルティアードたんば」音楽祭（丹波市、篠山市で

20年前から毎秋開かれていた音楽祭）に招かれ、ボディガードを務めることになった浅見が丹波に来たことから、事件に巻き込まれる。

アリシアたちは丹波の森公苑ホールやお菓子の里丹波ミオール館での演奏の合間に篠山城、興禅寺（春日局生誕地）などを観光し、これらの場面で丹波の歴史や風物が紹介される。

また、当初殺人犯と疑われた浅見を尋問する篠山署の刑事が柏原高卒



今月8月新刊の「遺譜」

で、老宮司も旧制柏原中卒。準主役級のこの宮司は一貫して信義を守り日本の行方を憂える信念の人で、やはり柏原中先輩の、「藤原機関」を率いた藤原岩市、大西瀧治郎、芦田均らの名前が語られる。

著者の内田氏と丹波との縁は5年前。シューベルティアード音楽祭に関わる山南町の浅倉陽子さんから「丹波が浅見シリーズの舞台に登場するようなことがあれば、テレビでも放映されるし、地域おこしになるでしょうね」と相談を持ちかけられた筆者が、イタリア在住の丹波出身の美術家、中川真貴さんに連絡し、仲介を依頼したのが発端だった。中川さんは、内田氏がかつてイタリアで取材した際にサポート役を務めて以来、親しくして頂いていると聞いていた。こうして氏のドイツでの取材と丹波訪問がドッキングして遂に浅倉さんの夢が実現した次第である。（丹波新聞社会員 小田晋作）

■郷土について書かれた本

## 『日本被害地震総覧 1999

—2012—

東京大学出版会／定価本体30,240円

ガタガタ ピシッピシッ ドーン  
1995年1月17日午前5時46分兵庫県南東沿岸を震源とする阪神・淡路大震災。もう19年以上を経ているが、あの記憶は常に新しい。初めての震度7や新幹線・高速道路にもたらしただ被害は安全神話をも崩壊させた。丹波の地も震度5の地域と記されている。ここに紹介する『日本被害地震総覧・599—2012』は、西暦599年～2012年までの被害地震をまとめ、2013年9月に発行された。東大・宇佐美龍夫先生と共同改訂者の石井寿、今村隆正、武村雅之、松浦律子の5氏が著者である。(石井寿氏は、柏原高校20回生の地震学者) 専門書とし

て、地震学者や自治体等の災害対策担当者への資料提供でもあるが、この1413年間に日本で発生した872件の被害地震の様相・実態を明らかにして平時からの心構えの一助にしたいと著者は著している。今流行の心理学者アルフレッド・アドラーの「私の心理学は専門家だけのものではなく、すべてのひとのものだ」と同じ考え方だ。

そこで、著者石井寿氏がいつも訴えていることを記すと①地震は必ず起きると意識しておくこと。②家具を固定すること。③緊急必需品を整理しておくこと。④家族間で集合場



所を決めておくこと。そして地震時の行動基準はまず落ち着くこと。大地震の際は何もできないことを前提に、家なら①二次災害を防止するために、ガスを止める。②避難路を確保するために、ドアを開ける。屋外ならば、建物からの落下物(ガラスや看板など)を避け、建物内に入るか、少し広い場所へ逃げる。起きて欲しくない大地震だが、著者は必ず起きるものと考えよと言っている。政府の地震調査委員会が発表した長期予想は、関東で30年以内にM8級地震の発生確率は5%で、首都直下型地震の発生確率は30%。参考情報として30年以内に空き巣にあう確率は3・4%、火災にあう確率は1・9%と発表されている。東日本大震災から3年半、先月にはその余震が2度も発生している。著者が言うように心構えが肝要。(若松 操)

## ■郷土について書かれた本

## 小泉宣右著

## 「悪党」

吉川弘文館／2,200円＋税

中学校に比べると高校で学習する日本史は、ぐんと詳しいものとなるが、その一つが荘園制度崩壊の様相である。「武士勢力の台頭に伴い現

地の荘官が本所両家の指示に従わず、年貢さえも横領するようになってきた」という簡単なものではなく、内情はずっと複雑であった。武士政権である鎌倉幕府も見過ごすこととはできず、ご成敗式目五ヶ条を制定して支配下にある御家人と貴族・社寺との紛争調停に乗り出すが、幕府にも現地の統制が取れず、荘園は次々と彼らに奪われていく。さらに本所領家を悩ませるのが悪党だ。

荘園研究の権威で東大史料編集研究所教授を務めた著者が、多くの悪

党が発生した近畿の史料に基き、彼らの活動実態を描いて一九八一年に教育社から上梓した本書が、この度、歴史研究専門の吉川弘文館から復刊されたのは同慶の至りである。わが郷土丹波では、春日町栢野東の俱利伽羅峠上にある宮田庄(篠山市宮田)と葦田庄(水上町芦田)を舞台とする悪党が登場する。

荘園成立以来の現地実力者である在地荘官には下司、公文、田所などの職務があり、統括的な地位にあつた下司とその指示を受けて文書を取扱い年貢徴収に当る公文は、無税の下司給、公文給という給田を与えられていた。源平の戦いや承久の乱の後には幕府任命の地頭が西国へ赴任し、荘園領主任命の下司・公文と対立するが、三者とも荘園横領に励む



点には変わりはなく、その中から幕府も困る

ほどの悪党も発生する。

近衛家領宮田庄では前公文兵衛次郎入道生西は悪党と認定され(二二〇一)、その後も預所(領家より派遣の荘園監督)や下司三郎左衛門入道寂仏らの住宅を焼打ちしている。引率勢力三百名という動員力があり、対領家だけでなく現地有力者同士の抗争でもあるが、御家人なので領家の支配外であると主張。一方、仁和寺領葦田庄では、後醍醐天皇の建武中興の最中に、名主の兵衛太郎入道賢忍、舎弟の兵衛二郎入道寂法、西方前公文家国法師、同子息家利、沼三郎入道正阿弥などの面々が「濫妨人」として京都へ注進され、新体制で設置された「雑訴決断所」の命により丹波の有力御家人である中沢佐綱、後藤佐渡五郎の両名が「交名人」家国法師に参洛を申付けている。挙国一致で元寇を撃退した文永・弘安の頃も近畿の悪党が幕府を悩ませたことを本書で知った。(徳田八郎衛)

## 平成26年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

今年の総会・懇親会は平成26年7月

12日(土) 11時から、「学士会館」にて開催されました。会場の学士会館は昨年までの「八重洲富士屋ホテル」が閉鎖により使えなくなったため同窓会としては初めての利用ですが、昨年「倍返し」で話題になったドラマと今年の朝ドラ「花子とアン」で撮影に使われた重厚な建物です。

今年の担当幹事は昭和43年卒・20回の皆様。阪神・東海支部から同期が10人以上応援に駆け付けて来られ総勢30名で、入念な計画のもと総会・懇親会



谷口支部長挨拶

の運営を乗り切っていたきました。

また「平成26年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会」の横断幕を書道師範の藤原ひさ子さんが力強い見事な字で作成いただきました。

心配された台風が通過した後の猛暑の中、新しく母校の校長に就任された28回卒の大西伸弘校長、同窓会本部谷水会長・赤尾副会長、京滋高見・東海畑各支部長、阪神稲継副支部長、辻丹波市長、大久保兵庫県東京事務所長、鹿島東京兵庫県人会常任幹事、荻野丹波新聞社社長、今年も日本酒の差し入



大西伸弘新校長

れを戴いた西山(榎)西山酒造場会長の合計11名のご来賓、他支部からの参加者を含め140名近くの懐かしい顔が集まり大盛会でした。

総会では会務報告、会計報告に加え2年に一度の役員改選期にあたり現体制継続の新役員案が承認されました。支部長からは皆様からご寄附頂いた母校のクスノキが治療の効果で樹勢が回復し青々と繁っている旨の報告がありました。

辻丹波市長挨拶では丹波市も30年後に消滅する市に入っているが市制10周年を迎え特に子育て支援に力を入れ中学までは医療費無料にしたことや、今年4月に国から「頑張る地域交付金」として7億8194万円いただいた。この金額は全国一とのこと、ちなみに篠山市等近隣市は3千万円程度であるとのことのお話があった。

恒例の柏陵セミナーは幹事学年20回生、余田幸夫さんによる「似て非なる国で感じたこと」と題する講演。日韓

## ◆インフォメーション



余田幸夫講師による講演風景

ると日本人の本心が分らないと思われてい。隣国という位置関係は変えようがなく政治・外交問題は今後も発生するであろうが、一人一人の交流をべ

の違いで顕著なのは①悲しい時の感情表現が日本は悲しい時に笑う美学があるが韓国では大声で泣き叫ぶ、②人との距離も日本では親しき仲にも礼儀ありといわれるのに対し韓国人はどんな中まで入ってきてプライバシーはなくなる、③日本人は思っていることをそのまま言葉にしないのに対し韓国人はストレートなので韓国人から見



来年度東京支部総会半額券ジャンケン争奪戦



万歳三唱

後は校歌・応援歌・畑東海支部長の音頭による万歳三唱。思いでの1ページとなるテーブル毎記念写真を手にも、来年の再会を約しての解散となりました。  
来年度の総会・懇親会は7月11日(土)の開催です。より多くの同窓の皆様のご参加をお待ちしています。会場は今年と同じ学士会館です。

ストした信頼関係を築き、今後日韓両国が協力してやっていけるようになることを願っているとお話でした。

高見京滋支部長の乾杯の音頭で始まった懇親会は途中に荻野丹波新聞社長のスピーチ、じゃんけんによる来年の東京支部総会半額券3枚の獲得競争で盛り上がり、時を忘れた4時間の最

近年関東に来られたご友人・お知り合いがおられましたら事務局までお知らせください。

柏陵同窓会東京支部のホームページに総会風景等アップされておりますので、是非ご覧ください。  
(支部長・谷口浩章・15回生/氷上町出身・記)

同好会

◎氷上ゴルフ同好会、今回は135回目を迎えます！

年4回開催で歴史を誇る「氷上ゴルフ同好会」。現在会員数50名弱。最近健康に不安が出てリタイアされる会員もあり会員数の減少に心配もあります。が、若返りも図るべく新しい会員の増強に努めています。(グロスは70点代〜130点代という感じです)

各例会は会員の紹介もあり良いゴルフ場で安いプレー代を心がけ、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながらの開催で各回の参加者20名前後で推移しています。

丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたいと思います。

ゴルフを楽しまれていらっしゃる皆様へ、都合の良い会場の時だけでも参加されませんか、気楽にお声を掛けて下さい新会員大歓迎です。

ご連絡を頂ければご案内を差し上げます。ホームページにもその都度結果と予定を掲載していますのでご覧下さい。この一年の成績は次の通りです。

○第131回 25年9月13日／筑波カントリークラブ



第132大会の参加者

優勝 川畑 明光  
2位 上田 雄彦  
3位 清水 則子

○第132回 25年12月13日／取手国際ゴルフ倶楽部

優勝 堀 博之  
2位 赤井 紀男  
3位 細見 充彦

○第133回 26年3月14日／日本カントリークラブ

優勝 佐伯 雅子  
2位 塚口 智  
3位 山本 喜則

○第134回 26年6月13日／東急筑波ゴルフクラブ

優勝 塚口 智  
2位 荻野 晴一朗  
3位 塚口 恭一

※

<http://pcc-taiyo.co.jp/nikami>又は「氷上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

氷上ゴルフ同好会事務係 岡 吉明

☎ 048-460-1601



## ◆インフォメーション

### ●郷友会コーラス同好会「どんぐり会」のお知らせ

念願の郷友会コーラス「どんぐり会」が平成25年3月28日(木)に発足しました。

指導者には音楽家の笹倉強先輩をお迎えし、丹波への郷愁に浸りながら思いつきお腹の底から声を出し、誰もが知っている歌を楽しく歌っています。

歌がお好きな方、声が出ないと心配される方も、健康のために、ワイワイと楽しみながらプロの指導者の下で一緒に歌いませんか！

月1回の金曜日を定例会としています。日程は郷友会のHPにてお確かめいただくか、世話人にお問い合わせ下さい。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時…毎月1回(金)午後2時～4時まで  
場所…板橋区仲町区民センター B1  
音楽室

東上線中板橋駅南口より徒歩8分

(バス利用は赤羽駅～日大病院行、仲町区民事務所前下車すぐ。池袋駅～赤羽行、仲町区民事務所前下車1分)

指導者…笹倉 強先生  
楽 譜…みんなのコーラス(野ばら社)

550円各自ご持参下さい)  
参加費…1500円(施設費&謝礼&おやつ、飲み物など)

\*お問合せ先

三鶯(みつはし) 洋子

☎090(4376)2568

岡田昌子 [nrk46297@nifty.com](mailto:nrk46297@nifty.com) まで

\*世話人

坂上勝朗・三鶯洋子・岡田昌子



## 展覧会

### ●可部美智子陶彫展

可部美智子氏が所属されている日本陶彫会主宰の展示会が去る5月12日(月)から17日(土)まで、銀座6丁目のサロン・ド・Gで開催されました。可部氏は今回は「聖徳太子」立像ほか一点を出展されました。この日本陶彫会は昭和25年に創立され、同26年第一回陶彫展を開いて以来今回が第61回目。可部氏は永らく役員として同会に多大の貢献をされるとともに、自らの芸域の探求にいそしまれました。今回役員を引いたあとも、制作活動は更に続けるとまだまだ意欲旺盛です。(S)

**NU 第61回 陶彫展**

2014年5月12日(月)～17日(土)

11:00～18:30(最終日は17:00まで)

会場: Salon de G

RESEARCH by 可部美

石井 隆	坂田 謙子	東村 昌季	森川 雅彦
藤原 守	荻野 一高	日越 浩大	安山 義正
岩田 謙子	澤井 佳子	日越 悠子	安山 義正
藤越 謙子	田中 茂	南 穂乃	吉田 典夫
大滝 英規	田宮 高哉	吉本 直樹	吉田 典夫
可部 美智子	寺田 秀子	森 大雅	榎田 亞
木村 玉尚	新倉 雄生		

## ●笹倉鉄平油彩画展

本誌の表紙絵を44号から担当頂いている笹倉鉄平氏の油彩画展が銀座3丁目のセントラルミュージアム銀座で、6月24日(火)から7月6日(日)まで開かれました。油彩による原画50点と最新作を含む版画約百点が展示されていて、その画面から出る澄明な光が観る者にただならぬインパクトを感じさせました。本誌今号の表紙絵は、五百羅漢ですが、よくご覧いただくと、並みの五百羅漢とはことなっています。はて?。(S)



## 演奏会

### ●「コーラスのぼら」合唱演奏会

笹倉強氏が指導されている合唱団の一つで、女性合唱団「コーラスのぼら」の創立45周年記念演奏会が、練馬区の練馬文化センター小ホールで催されました。



当日(7月5日・土)は会場近辺はゲリラ豪雨に見舞われましたが、会場はほぼ満席。ステージには、椅子に座って熱唱されるかたもおられ、この合唱団の絆の強さ温かさが感じられました。ラストは、笹倉氏の軽妙な挨拶のあとステージと客席が一体となって、「たなばたさま」の輪唱で締められました。とても感動的な夏の午後のひとときでした。(S)

## 同級会

### ●柏高6回生の一泊旅行

柏原高校6回生による柏友会(幹事・飯田光雄氏、高見秀史氏)は、喜寿記念の一泊旅行を3月17・18日に行いました。宿泊は南房総勝浦のホテル三日月で、10名が参加し、眼下に海を眺めながら積もる話題に花を咲かせました。



南房総ホテル三日月にて

❖ 本誌にご協力有難うございました

創業享保元年



山名酒造

奥丹波

兵庫県丹波市市島町上田211  
t e l 0 7 9 5 ( 8 5 ) 0 0 1 5  
w w w . o k u t a m b a . c o . j p

今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送  
データ入力等の情報処理、コールセンター、  
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

————— いつでもよりよいサービスを —————

**BSS**

株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉市花見川区宇那谷町 1501-2  
TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865  
<http://www.betterservice.co.jp>  
e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

認定NPO法人アジアの新しい風 理事長代行  
<http://www.npo-asia.org>

上 高 子 (氷上町出身)

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-18-22-414  
TEL / FAX 03-5426-6714  
e-mail takako-ue@t05.itscom.net

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援する NPO です。  
国税庁によって認定 NPO に認定されました。当 NPO への寄附金は、  
確定申告をすることで、税額控除の対象になります。  
すなわち、寄付総額から 2000 円を差し引いた金額の 40% が税額より  
差し引かれます。ご支援をよろしくお願いいたします。



エクステリア専門商社



株式会社 トコナメエピコス

代表取締役 広瀬 寿和 (山南町和田)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2 田中ビル  
TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

あなたの町の「石屋さん」  
そんな石屋をめざしています！！

墓石・霊園・建築石材・造園石材

## (株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高昭和36年卒  
いしやは ここよ



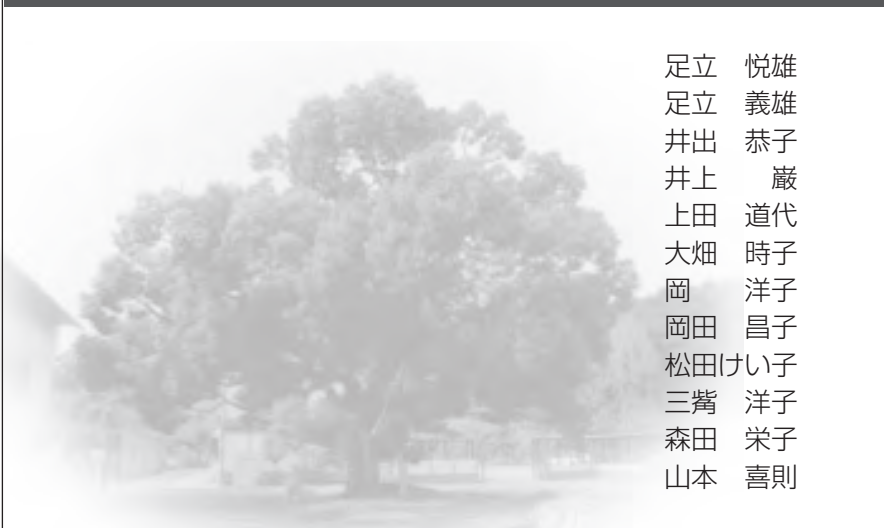
 **0120-1480-54**

工場・事務所 TEL 0795-72-3032  
FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>

# くすの木 14

14 回生関東支部会



足立 悦雄  
足立 義雄  
井出 恭子  
井上 巖  
上田 道代  
大畑 時子  
岡 洋子  
岡田 昌子  
松田けい子  
三觜 洋子  
森田 栄子  
山本 喜則

株式会社 アイ・ケイ・アイ I.K.I co.,LTD

株式会社 ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアプリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸&生産管理 & 小売り

代表取締役社長 岸田 勇 柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262



丹波市水上町石生水分れ

電話 (0795)82-6010

FAX (0795)82-6630

<http://tanbayamato.jp/>

❖ 本誌にご協力有難うございました



青垣町今出・熊野神社「はだか祭り」

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201

丹波新聞

検索

tel.0795-72-0530

fax.0795-72-1956

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,255円(郵送料205円)

## あなたの本 作りませんか

自分史・評伝・記念誌・小説・エッセイ・句集・詩歌集・写真集

弊社は長年、自分史の制作を手がけております。

自費出版のご希望がございましたら、お気軽にご相談下さい。

**安価で明瞭な35万円システム**

少数数でも費用は安心！

A5判 100ページ・100部の印刷で

判型：A5判（タテ21cm・ヨコ14.8cm） 頁数：100ページ  
部数：100部／組み方：10ボ×40字×16行（標準・1ページ640字）

株式会社 **ホンコー出版** 代表取締役社長 池田 忍

〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1

TEL 045(895)2712 FAX 045(895)4338

あだち眼科院長／医学博士  
順天堂大学眼科 非常勤講師

足 立 和 孝

〒 347-0015 加須市南大桑字下鳩山一六二〇―一  
TEL 〇四八〇―六五―五九八八  
FAX 〇四八〇―六五―六〇九七  
E-mail : kazu358@pastel.ocn.ne.jp

株式会社ナレッジリンク  
足立国際会計事務所

代表取締役  
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足 立 知 佳 子

〒 152-0035 東京都目黒区自由が丘二―三―四 U I W I I 自由が丘ビル六〇二  
TEL 〇三三七―八八―八〇四七 FAX 〇三三七―八八―八一四七  
E-mail : cadachi@ata.gr.jp

足 立 静 雄

飯 田 光 雄

〒 285-0025 佐倉市錦木町九八二―一―一〇四  
電話 〇四三―四八五―〇五〇三

モンテッソーリ・スクール ひまわりこどもの家  
NPO法人小学生モンテッソーリ・スクール  
理事長・園長

池 田 和 子

行徳校 〒 272-0137 市川市福栄二―六―一  
本八幡校 〒 272-0823 市川市東菅野一―三―一三

井 本 義 一



岡  
田  
昌  
子

有限会社 PCC大洋

岡  
吉  
明

〒351-0014

朝霞市膝折町四丁目三〇  
TEL 〇四八-四六〇-一六〇一  
FAX 〇四八-四六〇-二三九七  
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

上  
野  
重  
喜

上  
武  
正  
次

木  
呂  
子  
惠  
美  
子

金  
出  
一  
郎

坂  
上  
明

近  
藤  
仁  
司

〒112-0012  
東京都文京区大塚二丁目八十五〇一  
電話 〇三―三九四三―九一一五

栗  
田  
功

仲 山 坂  
口 上  
一 泰  
聰 男 登

仙台市在住

坂  
上  
豊

坂  
上  
勝  
朗

合唱指揮者

笹倉 強

〒 352 | 0014 新座市栄四一五―一二五  
TEL・FAX ○四八―四七七―五六四〇

高見 嘉都司

〒 173 | 0025 東京都板橋区熊野町四〇番十一号  
電話 ○三一三九五六一〇六〇〇  
電話 ○三一三九七三一六〇五六

高見 秀史

いい眠りと健康の為のNPO法人  
<http://www.sas-j.org/>

谷 敬三

谷 口 浩 章

「柏陵同窓会東京支部」で検索いただくと  
東京支部ホームページがご覧いただけます。

株式会社シードコーポレーション

代表取締役 千種 倫幸

〒 104 | 0061 東京都中央区銀座二丁目二―一九  
電話 ○三一三五六七―九七〇〇

日本画家

常岡幹彦

〒357-0205 飯能市白子一七三―七  
電話 〇四二―九七八―一〇九八

鶴田宏

日本舞踊  
端唄  
西崎 祥  
根岸 妙

〒224-0027 横浜市都筑区大柵町五〇〇―八  
電話 〇四五―五九一―六六五五

西山裕三

〒669-4302 兵庫県丹波市市島町  
中竹田一七―一

原谷洋美

青葉山 真照寺 都立八王子霊園隣り  
八王子 青葉霊苑 第二期墓地分譲案内中  
和合廟(永代供養墓) 受付中  
住職 堀井隆川

〒193-0821 東京都八王子市川町四九三―二  
電話 〇四二―六五二―二〇一一  
FAX 〇四二―六五二―二〇三三

山口和久

恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・  
由佳・愛々・茶々・凧人・愛莉・思温

〒196  
0031

東京都昭島市福島町二一〇―二七  
電話〇四二―八四八―四〇五五

[http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi\\_0330/](http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi_0330/)

若森敏郎

〒302  
0023

茨城県取手市白山五一四―一三

渡邊隆男

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりをも、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は会の運営を支える重要な資源です。同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い致します。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のきずな』の強さを思います。

(山ざる編集部)

編	集
後	記

★気候変動の影響が各地で、自然災害が多発している。遭遇された方々に心よりお見舞い申し上げます。

つつ、我々人間には、自然に対する畏敬の念を持ち共生・調和を計る事が求められると思うこの頃です。古来より日本人に醸成された自然や神と謙虚に対峙する

気持ちが必要であると強く思う。又、世界各地で頻発する地域紛争に、人類の叡智が待たれるところである。仏教、イスラム教、キリスト教、ヒンズー教など各種教徒の方々と国際交流の場で交流しながら思う昨今である。

(大野)

★水上町葛野出身の報徳学の泰斗・佐々井信太郎、典比古氏親子も『山ざる』の読者であられたと聞く。45号を重ねることとは、その先に時代を超えた幾万の読者が拡がっていると実感する。まずは50号の発行、更には百号までと『山ざる』が結ぶ輪を思う。

(原谷)

★城崎特急「ここのとり」は、但馬竹

田駅を通過しないのに竹田城のPR放送を車内で行ないます。そして同じく国指定史跡なのに、我らの黒井城址前では何も紹介してくれません。何とかならぬか。ギリシャの客船は、サラミス海戦で有名なサラミス島通過の際は紹介を怠りません。

(徳田)

★山南町の実家で跡取りをする弟の長男坊、40歳をこえて嫁さんの来てがなく、家こそ立派に建てながら「限界集落」の先取りになるのかと親戚筋を心配させましたが、このほど漸く相手が見つかり近く挙式ということになり、ほつとしました。いつも思うことですが、「経済発展」もいいが、農村の豊かな自然を残しながら、都会と農村がバランス良く発展していくことを願うばかりです。

(池田)

★投稿者の皆様・金銭面で支援して下さる皆様・内容を充実させるために多忙な日々にも関わらず持ち出し承知の上で意欲的に取材して下さる編集委員と丹波新聞社有志の皆様の、正に絶妙な素晴らし

いチームワークによって「山ざる」は、今年も充実した内容で皆様にお届けすることができました。会員の皆様には、無償で提供して下さる笹倉様の心温まる表紙画から、最後の裏表紙までじっくりと目を通し、楽しんでいただけますことを願っています。遅ればせながら夏の水害被害に遭われました丹波の皆様にお見舞い申し上げます。

山ざる 第45号 定価500円

平成二十六年十一月一日発行

- 〈編集委員〉
- |       |      |        |
|-------|------|--------|
| 池田 忍  | 井出恭子 | 井徳正吾   |
| 上 高子  | 上田正文 | 大野義昭   |
| 岡 吉明  | 岡田昌子 | 木呂子恵美子 |
| 坂上勝朗  | 常岡幹彦 | 鶴田ゆき子  |
| 徳田八郎衛 | 原谷洋美 | 藤原ひさ子  |
- 本城英明

発行者 関東水上郷友会会長 坂上勝朗  
〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町4-4-30  
関東水上郷友会事務局(岡吉明)

電話 〇四八(四六〇)二六〇一  
振替 〇〇〇一〇一三二二二三三三〇

製 作 株式会社二女社  
編集協力 株式会社ホンゴ出版